かり、戸障子を跟破つて踏込むと拳をそろへて主人を袋叩きにした。

話は遡つて一昔まへ、瓜津村三浦吉郎の老母が或夜荒磯の巖頭に立つ恵比須天の姿を夢に見て以來、同家の漁場では毎年鰊の豐漁が續いた。その謝恩と海上安全の願願とに、天に聳り立つ赤岩の頂に恵比須天の石像を祭つた。それ以來同家の漁場は、よそが不漁の年でも常に多くの鰊を漁した。そして後々には瓜津鰊場の守り神として、例年赤岩開きの日に盛大な祭をするのが、村人のならはしとなつた。それが去年の春急に姿を消してしまつたが、いつの間にか、かの不德漢が盜み取つてゐたのである。

だがこの恵比須さまも今では昔通りに、高い赤岩の頂に瓜津村に逸遊あれと鎭座ましましてゐる。尊像には「明治三十八年八月二十九日瓜津村三浦吉郎建之」と彫つてある。（昭和五年七月小樽新聞所載「赤岩の傳說」に據る）

入舸村（積丹郡入舸村役場調）

一〇、義經とシララ姫

昔、源義經が此の地に來た時、酋長の娘シララ姫と親しくなつた。シララ姫は恩々しい義經を心から慕ひ、義經も亦優しいシララ姫の純情を素直に受けいれた。然し數奇な義經の運命は尙續いて、漸く迫る厳しい探索の目を逃るべく更に北上することになつた。そして流石にシララ姫との生別の悲みには堪へ得られず、夜陰密かに義經主從は月明を便りに海岸に出たのであつた。斯くと知つたシララ姫は狂氣の如く絶壁に立つて呼び招いたが、主從の船は只遠ざかり行くばかりであつた。純情なシララ姫は、義經の變心を怨むよりも戀ひ慕ふ餘り、失心せんばかりであつた。今はこれ迄と海中めがけて飛び込んだが、其の身は遂に石と化した。之が、現在の女郎子岩であるといふのである。

喜茂別村（虻田郡喜茂別村役場調）

一一、シリベシ政廳の跡

鐵振鐵道留産驛直前、尻別川を隔てゝ獨立した丸山と稱する小丘がある。周圍二十町餘、平地を拔くこと二百餘尺、山頂の平坦部五千餘坪に及び、東南に尻別川の急流が迂曲して蹴岸に達してゐる。西北は目名川の深谷に劃せられ、廣漠たる目名原野を隔てゝ後方羊蹄山を仰ぎ、西南は磯野幾百町、尻別の岳麓に連行してゐる。丘腹に比羅夫神社があつて、一見古城趾を想起せしめる。附近所々に編頭にして、古塚に類する地窪を存し、且洞穴竪穴等穴居の昔を偲ばしむるものも少しとしない。丸山の西南方約半里、尻別岳の麓に五町歩に餘る階段狀平地を存し、泉水、築山等の城趾と想像し得べきものも少くない。尙附近の耕地より刀劍類の發掘せらるゝものも多く、口碑に依ると比羅夫將軍政廳の地所

第四十六圖版　比羅夫神社

入舸村喜茂別村

梨蔭之は即ち此所であると傳へられてゐる。

大日本史に、「齊明天皇五年三月勅を奉じ、阿部比羅夫舟師百八十艘を編し齶田、渟代（現今の秋田の地）の蝦夷二百四十一人其の虜三十一人、津軽の蝦夷百十二人其の虜四人を併せ大擧して齶田に上陸し、土地の蝦夷酋長等二十人を招き饗宴を設け酒食を與へて歸順せしめ、船一隻及五色の綵帛を以て其の地の神を祀り進んで肉入籠に抵る。餘噉字の蝦夷齶舮島蒐穂名の二人進み出でゝ曰く、後方羊蹄（斯梨蔵之）の地形廣濶にして攻防に便なり。以て政廳を置くの地とすべしと、比羅夫其の言に從ひ、郡領を此の地に置き地方を平定せり」とあり、なほ「後方羊蹄は今の蝦夷島志利遉知也山にありて屎別嶽と曰ふ」とある。

後方羊蹄山の西北麓地方は起伏重疊して、平野に乏しいのみならず、古城趾として認め得べき地もなく、又其の上陸地點たる齶舮嶽は、幾多の證左に依り、内浦灣に面する現時の虻田地方と認められるから、進軍の經路から考へ、又種々の遺跡からしても比羅夫政廳の地は、必ずや本村内字羊蹄の地と斷ずべきものであると云はれてゐる。

西島牧村（島牧郡西島牧村役場調）

一二、黄金澤

西島牧村泊川の上流黄金澤温泉（居住者なし、湧出量豐富）附近の岩に、黄金澤と彫刻して方向を示した矢印がある。此の矢印はその昔附近で採掘した金鑛を埋めてその場所を示したものか、或は良質の鑛脈を記錄する爲の彫刻か、一つの大きな謎として其の道の人の好奇心をそゝり、興味の眼を以て看られて居る。昔松前藩が柳川へ國替になつた時、有望な金鑛を採掘し、その跡を埋めて、鑛脈を隱蔽したといふ事が松前藩の記錄に殘されてゐるので、矢印はそれを示したものではないかと云はれて居る。

一三、黄金澤の溫泉

黄金澤の附近の溫泉には、砂金が相當に沈澱して居るであらうと云ふ推測で、往年上流を堰止めて溫泉の水を、ポンピングして砂金を採取すべく着手したが、今一息と云ふ所で大雪が降つて溫泉の水を滿し、之を數十回繰返したが、遂に成功せず倒産した人があると云ふ。又此の仕事に成功しさうになれば、必ず眞神を付けた侍姿の幽靈が、溫の水落に現れると傳へられる。

一四、黄金の弔鐘

黄金は黄金を呼ぶと云ふ傳說に依つて、黄金造りの弔鐘を作り、此の黄金の弔鐘を朝夕打鳴らしたと云ふ口碑がある。當時のことを知つてゐる一老人が、泊川の上流六里の奥の澤で確かに黄金造りの弔鐘を見たと云ふので、數年前或物好がその老人をガイドとして探檢に出掛けたが、遂に見當らなかつたと云ふ。

此の弔鐘が何處かへかくされてあると云ふ事は、今だに一部の人から信じられて居るらしいのである。

一五、男沼女沼の主

西島牧村内瑩濱に男沼、女沼と呼ばれて居る二つの湖水がある。其の廣さは男沼は五千坪女沼は三千坪位で、二十町位離れて居て二つとも魚族は棲息して居ない。此の二つの沼の間の草が舊夏の頃になると、何ものかが歩いた樣になび

く事がある。之は此の沼の主が違ひに行つたものだと云ふ傳說があつて、沼の主は大分大きい蛇だらうと云ふ事である。

壽都町（壽都郡壽都町役場調）

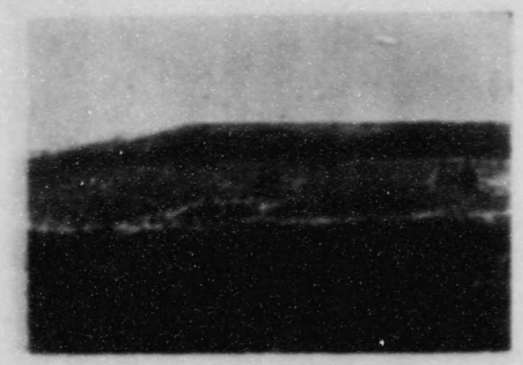
一六、辨慶の土俵

義經がこの土地に滯在中、辨慶が角力を取つて無聊を慰めたと傳へられる所がある。傍に凝灰岩の大露出部があつて之を腰掛と稱し、土俵を作つた際、腰を掛み置いたのが石となつたと傳へられる。

また腰掛附近より黃金の甕（徳利）を發掘した老翁があつたが、老婆に言はれて たゝりのあるのを恐れ、再び埋め歸つたと傳へられるが、義經の傳說と關係づけ、義經等の埋めて置いたものであるとも傳へられる。

一七、辨慶の足跡

矢張り腰掛附近に辨慶の足跡、辨慶の鼻血などと傳へられる所があるが、元來これ等は、蝦夷のチャシで、辨慶岬も夷語ペレケイと稱したものへ、和人來往後附會したものである。從つて此のチャシも義經と關聯せしめて作つた和人の傳說



第四十七圖版　辨慶の土俵

であるといはれる。

余別村（積丹郡余別村役場調）

一八、神威岩

神威岬は後志國積丹郡余別村大字神岬村にあつて、其の北西に斗出して居る岬角である。今は左程著名でもないが、昔は此處で婦女の通行を喰止め、開拓を阻害したので名高い處であつた。

此の岬は細長く日本海に突出して居て、岬の北東側には奇岩亂立し、南西側は數切の斷崖が連なつて居る。更に岬頭を西北に離れて荒き海中に一つの大なる巖があつて、其の昔義經として崇つ姿は、恰も法師の帽を冠つて立てるに似て如何にも尋常ならぬ處から、アイヌは之に名つけてカムイと云つた。即ち神として尊敬するのである。それに和人が「オ」の字を冠らせて「オカムイ」と呼んだので、昔は此の岬をオカムイ岬と云つた。尙オカムイ岩の北西に一つの巖が崇つて居て、之を俗に「メノコ」岩と呼ぶ。

かくの如く地勢が險しいので、海上を渡り來る風も陸上より吹下す風も皆此處に吹き荒び、怒濤岩角に激し、海水渦巻いて危險を極めて居る。それで昔時は此の岬を「セツタ」岬（瀨棚と島牧の間）「オフイ」（積丹と增毛との間）と並稱して西蝦夷地の三險岬と云つた。今は汽船で遙かの沖を航海するので此の岬を知らずに過ぐるが、小船で海岸に沿うて匍匐した頃は、如何にも恐るべき處であつたに違ひない。

く事がある。之は此の沼の主が逢ひに行つたものだと云ふ傳說があつて、沼の主は大分大きい蛇だらうと云ふ事である。

壽都町（壽都郡壽都町役場調）

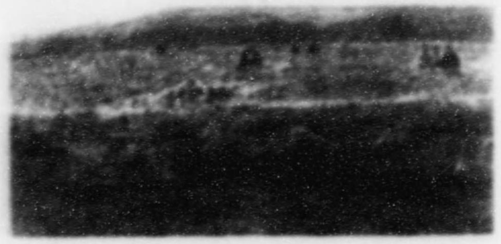
一六、辨慶の土俵

義經がこの土地に滯在中、辨慶が角力を取つて無聊を慰めたと傳へられる所がある。傍に凝灰岩の大露出部があつて之を樣森と稱し、土俵を作つた際、樣を積み置いたのが石となつたと傳へられる。

また樣森附近より黃金の瓶（慾利）を發掘した老翁があつたが、老婆に言はれてたいりのあるのを恐れ、再び埋め歸つたと傳へられるが、義經の傳說と關係づけ、義經等の埋めて置いたものであるとも傳へられる。

一七、辨慶の足跡

矢張り樣森附近に辨慶の足跡、辨慶の鼻血などと傳へられる所があるが、元來これ等は、蝦夷のチャシで、辨慶岬も夷詩ベレケイと稱したものへ、和人來往後附會したものである。從つて此のチャシも義經と關聯せしめて作つた和人の傳說



第四十七圖版　辨慶の土俵

であるといはれる。

余別村（積丹郡余別村役場調）

一八、神威岩

神威岬は後志國積丹郡余別村大字神岬村にあつて、其の北西に斗出して居る岬角である。今は左程著名でもないが、昔は此處で婦女の通行を嗟止め、開拓を阻害したので名高い處であつた。

此の岬は細長く日本海に突出して居て、岬の北東側には奇岩亂立し、南西側は數匁の鐵屋が連なつて居る。更に岬端を西北に隱れて淺き海中に一つの大なる巖があつて、其の昔雄然として峙つ姿は、恰も法師の帽を冠つて立てるに似て如何にも尋常ならぬ處から、アイヌは之に名づけてカムイと云つた。卽ち神として尊敬するのである。それに和人が「オ」の字を冠らせて「オカムイ」と呼んだので、昔は此の岬をオカムイ岬と云つた。尙オカムイ岩の北西に一つの巖が峙つて居て、之を俗に「メノコ」岩と呼ぶ。

かくの如く地勢が險しいので、海上を渡り來る風も陸上より吹下す風も皆此處に吹き荒び、怒濤岩角に激し、海水渦巻いて危險を極めて居る。それで昔時は此の岬を「セワタ」岬（瀨棚と島牧の間）「オフイ」（濱益と增毛との間）と共稱して西蝦夷地の三險岬と云つた。今は汽船で遙かの沖を航海するので此の岬を知らずに過ぐるが、小船で海岸に沿うて匍匐した頃は、如何にも恐るべき處であつたに違ひない。

此處を航海するに當つてアイヌはイナホ（木幣）を捧げ、唱へ言をなしてカムイ嶽に手向け、和人は藁人形や酒など
を手向け、大幣を發せず體容を崩さず、一心に唯無事を祈り戰々兢々として過ぎたのである。此の岬の神は如何なる理
由があるのか、甚だ婦女を忌んで婦女のこの地を通行するを禁じ、これより奥には和人の婦女を入らしめないのが古來
の習慣であつた。此の地より奥には美國、古平、余市、忍路、高島、小樽、石狩を初め數多の場所があつて漁業の利益が
多く、殊に天明寛政の頃江差福山の地方が無皆無といふ有樣であつたから、其の地方の人民は續々奥地へ出稼をなし、
年を逐つて奥地の漁業は盛んになつたが、唯男子が出稼をするのみで、神威岬より北方へは一人の婦女をも伴ふことが
出來なかつた。

寛政十一年幕府が東北蝦夷地を併せて直轄した後は、故あつて守成の方針を採り、改良を圖らなかつたので、此の岬
は依然婦女禁制の關所となつて奥地の開拓を防害して居た。文政四年松前家復領の後も亦同樣であつた、尤も當時は移
住者も極めて稀であつたので、此の禁制も實際には防害と云ふ防害にはならなかつた。其の後天保年間に至り、偶然の
事より移住者が增加し、漁民等が妻子を伴ひ、續々西蝦夷に入込むやうになつてから、大なる防害となつた。天保の凶
荒と云へば、今日でも大抵の人は聞いて知つて居るだらうが、凶荒は天保より數年間打續き、奥羽地方は最も甚しく、餓莩
道に滿ち、父子兄弟互に食を爭ひ、餓死するもの續出といふ狀態であつたので、窮民中には海を渡つて松前地方へ渡れ
込むものが少なくなかつた。松前藩では、福山、江差、箱館に海關を置いて出入の者を檢査し、職業を有し且身元引受
人のある者でなければ滯在を許さず、乘來つた船で追戻すのが舊來の規則であるので、表向きは此の法規を施行して窮
民を追歸したが、夜中人目を忍んで渡り來り、當地にある親戚知人を頼つて救助を求め、或は取締の目を潛つて蝦夷地

へ入込むものに對しては、取締りも行屆きかねたのである。又松前地方の人民も米の輸入が著しく減じ、米價も頗る高く
なつたので、生活に窮する餘り、妻子を携へて蝦夷地森に西蝦夷地へ入込むものが多かつた。其の譯は西蝦夷地は鰊其
の他の魚類に富んであるので、從來米がなくても生命が繋げるだらうと云ふ望みがあるからである。それで是等の窮民
は、近い場所より段々奥へ進んで行つたが、婦人を伴ふ身ではどうあつても「オカムイ」岬を越えることが出來ぬので、
古字以南の各場所に彷徨した。

各場所の請負人も之には頗る困つたが、さりとて自分の場所内で一人たりとも餓死するものがあつては、他所の聞え
も甚だ惡しく、之が爲不行屆の廉を以て請負を免ぜらるゝやうなことがあつては猶更一大事、又一方より考ふれば、一
時救助に骨が折れても是等の人民が自分の場所で稼ぐに於ては、漁業は益ゝ發達し、二八の牧入も增加してつまり自己
の利益になるのだから、各場所の請負人は何れも窮民の救助に努め、出來得るだけ其の場所に落付かせた。

二八の牧入と言ふ語に就いては、今日了解しかねる人もあらうから茲に説明しよう。凡べて場所は請負人なるものが
運上金を上納して之を請負ふものであるから、他人が其の場所に出稼するには請負人の許可を受け、稼業したる後牧獲
の二割を請負人に納め、八割を自己の所得とするのが普通であつて、其の出稼人を「二八取り」と言つたのである。

斯くして數年間に亘る飢饉のため「オカムイ」岬以南の各漁場は人口俄かに增加し、殊に天保七年八年は最も多く入
込んだ。其の結果是等の場所は大いに繁昌し、事業も著しく發達して好景氣を現したので、其の後去る者あるも亦新に
入り來るものがあるといふ具合で所々に聚落をなし、製結按摩も小間物商も出來、又七蓮と稱する賣春婦も現れるに至
つた。七蓮と言ふのは蓮七蓮で春を賣つたから起つた所の名であるのだ。さうして是等の内岩内が最も繁昌し、寒水年

間の記錄によると、天保凱歌の前までは、僅かに二十餘戸に過ぎなかつたものが、慶應元年五六百戸となり、百餘年しからず繁盛市街をなすに至つたのである。其の外島牧、靜内、歌笑、鵡谷、古宇の殖場所は何れも百戸より二百戸の土着者があつて相應に賑はつた。我には蝦夷地の拓殖は安政年度幕府直轄以後若くは開拓使から始まつたやうに思つてゐる者が多いが、それより前に恐るべき大凱歌が、既に蝦夷地の一部に斯くの如き一大殖民を行つてゐる。若し此の殖民を政府がするとしたならば、實に少なからぬ手數と多額の經費とを要した事であつたであらう。

幕元彌五郎名は郁有、號を蘇雲といふ。幕府大倉の吏であつたが、箱館奉行支配下役元締に轉任し、宗谷詰を命ぜられたので、安政三年幕府が松前藩より蝦夷地の引渡しを受くるや、幕吏と共に妻子を伴ひ箱館を出發した。然るに神威岬の手前に至つたところが船子等は恐れて船を進めず、古來の禁制を說いて委曲あらんことを告げた。彌五郎之を聽かず強いて船を進めたところが、岬にかゝるや果して波荒く、船動き船子等恐怖して引返さんことを懇願した。すると彌五郎は毅然容を正し「カムイ」に向ひ「國君今邊土を開かんとす何の神か之を阻止せん」と言ひ放つて、強いて船を進ましめて無事に此の岬を乘り越した。

さて此の禁制打破の人に關しては他にも異說があつて、岡千恢は村垣淡路守であると記し、志賀矧川は蝦夷奉行であると言つてゐるが、幕部正は安政元年以來の箱館奉行、淡路守は同三年拜命した箱館奉行（此の時竹内下野守と共に同時に三人の箱館奉行あり）であつて、其の身分から考へても婦女を携れて蝦夷地を巡回すべき筈がない。但し拓殖の方針を定めた事に就いては、下野守も幕部正も淡路守も皆功勞のあつたことは勿論だが、右禁制打破の實行者に至つては、彌五郎の傳記と舊宗内藩所詰役人佐藤仁左衛門の記事と、今尙生存して當時の事に明らかな人々の談話等によつて、他に彌五郎たることを斷言することが出來る。

彌五郎が妻子を連れて神威岬を過ぎるや、此の岬に喰止められて古字以南に彷徨してゐた人民の一部は、同じく妻子を携へ此の岬を乘越して其の以北に移住した。其の上安政三年より四年にかけて、所々の新道が開墾され、余市山道も千歲越も開けたので、漁民は勿論其の他の人民迄も、入込んで積丹より石狩に至る間の、海岸處々に部落をなした。中でも石狩の如き小樽（今の小樽市の南部）の如きは小市街を形成るに至つたのである。

又幕府在任の士は石狩原野に入り屋敷、發窯などに土着して開墾に從事した。是に於て藝に寂寥を極めた是等の地方は、俄かに開拓の緒に就くことゝなつたのである。左に神威岬を詠んだ詩歌數首を掲げる。

情郎辛苦入邊夷　及北青魚春孕時　　續　　鶴　屋
默念歸期加隔世　一帆風雲暗神崎

岡　　千　恢

鉛編桐頭帆影明　隻行紅淚送郎行
春風不渡神威岬　斷腸海山千萬程

山　田　邦　彥

お船さへかよひ江がてし神威岬
人すむ御世となりにけるかな

余　別　村

大銀夷のむかしとはばや横丹の
海にけたかき神の大岩　河毛三郎

長崎中分北海天　神嚴巡覽女人船
忍濱高嶋要何致　唯望歌津磯谷邊　大町桂月

空知支廳

夕張町（夕張郡夕張町役場調）

一、砂金採取の跡

寛永十二年の頃、松前藩主松前慶廣は、數百人を役して夕張川を遡り、大夕張方面に於て砂金を採取せしめたとのことである。

浦臼村（樺戸郡浦臼村役場調）

二、鶴　沼

鶴沼は浦臼村字黄臼内にある。西北に高臺があり、その上に村社鶴沼神社がある。

夕張町・浦臼村

第四十八圖版　夕張本流砂金採取の跡

第四十九圖版　鶴　沼

大蝦夷のむかしとはばや積丹の
　海にけたかき神の大岩　　河毛三郎

長崎中分北海天　神祭迷路女人給
忍溜高嶋妻何歌　唯望歌津磯谷邊　　大町桂月

空知支廳

夕張町（夕張郡夕張町役場調）

一、砂金採取の跡

寛永十二年の頃、松前藩主松前慶廣は、數百人を投して夕張川を遡り、大夕張方面に於て砂金を採取せしめたとのことである。

浦臼村（樺戸郡浦臼村役場調）

二、鶴　沼

鶴沼は浦臼村字浦臼内にある。西北に高峯があり、その上に村社鶴沼神社がある。

夕張町・浦臼村

第四十八図版　夕張本流砂金採取の跡

第四十九図版　鶴　沼

この沼に骨鶴の群が棲んでゐたといはれて居る。古老の言によれば明治三十年頃までは「宮内省鶴繁殖所」と記した標杭があつたとのことである。池水は清澄、風光麗る明媚で、現在鼓鶴禁止區域として、毎年鴨、白鳥の游泳することも珍しくない。

上川支廳

神居村（上川郡神居村役場所）

一、蝦上番屋の址

神居村字美瑛町一丁目に、松前藩時代蝦上屋の設置した番屋の址がある。蝦上屋とは松前藩時代に於ける一種の漁場税を、徴收する便法として設けられたものと謂はれる。

松前藩は骨から商賈税にたより、農耕の事は餘り勸めなかつた。故に其の民は長幼を論ぜず鼓つて漁獵や商業に努め、土人に於ては殆んど耕作の業を知らなかつた。漁獵の場所は、遠近廣狹の差があり、各分域があつた。内外の商賈は甘言と重貨とを以て、各其の處分地を請負うた。そして内外の漁場税は六萬兩の多きに上つた。商賈等は會所蝦上屋を建てゝ支配人を之に居住せしめ、米や酒その他の諸物を給積みにしては、蝦夷土人の土産と交易した。更に之を別言すれば、松前藩時代は渡島國を本領として蝦夷地と稱し、蝦夷地の中に於て、捕魚採藻の場所を分けて藩士の采に充て、概ね富商に貸した。之を場所請負人と稱したのである。請負人は各所に家屋を建てゝは松前藩士の番所に供し、常に支配人若しくは番人を置いて土人と交易させ、又其の漁期に及んでは出稼人を使つて漁業を營み、其の收獲高から二八、一九等の稱呼を以て十分の二或は十分の一の税を領主に納めさせた。是が即ち蝦上金である。松前藩では其の徴税に對する

便宜を圖つて、漁場請負なる制度を設けて商賈に任せ、一地方の漁業を管理させて運上金を納めさせた、商賈は漁場毎に運上屋なるものを建設し、蝦夷土人と物品を交易するのみでなく、漁夫を雇つて漁業を營み、或は租賃の料金を徴收して出稼人に漁業をなさしめたりした。故に此の時代に於ける漁業の實態は、殆んど漁場請負人の掌中に歸し、漁業者はこれら運上請負人に隷屬せる如き狀態であつて、隨意に漁業を營むことは出來なかつたのである。松前藩は水田や畑地とても無く、殆んど農業に頼らないで、漁業稅や水産稅のみを目當に、納められた運上金を以て家臣を養ひ、一藩の財政をまかなつてゐたため、更に進んで石狩川に十三ヶ所の新場所を開いて、運上屋を增やし、益ゝ其の範圍を擴張しつゝ、上川原野にまで其の場所を擴し廣めたのである。番屋の建物は明治七八年頃野火のために燒失してしまつて、現在では唯その舊趾を止むるだけである。

（附記）。

明治五六年の交、土人と貿易を爲す目的をもつて、單身この地に來つた鈴木龜藏の言に據ると、「當時運上屋の建物として、今の神居村字美瑛町罪遺所を距る約三百間の下方に、板葺一棟があつたが、兩三年を經て野火の爲に燒失してしまつた」とのことである。

又永山長官時代、技手であつた高畑利宣は、明治二十一年同長官上川巡視の際、忠別太原野の新道に達し、樺戸監獄署出張所事務所に到着して、圍繞雜談の間、高畑の曰く「往昔此地は山田文右衛門の支配する處にして番屋ありしも火災に罹れり、其後建設せしを新番屋と稱へ、明治四年開拓使の命を奉じて此に來りし時は尙存在せしが、後年野火のため延燒する所となつた」と。

接するに鈴木龜藏の目擊したる番屋も、高畑の所謂新番屋なりしなるべく、鈴木の來たのは明治五六年とあるから、高畑が開拓使の命を奉じて來りしより僅か一年後に過ぎない。果して然りとすれば、大災の爲烏有に歸したることは、兩人一致の言であるから、同一番屋であつたことは云ふまでもない。

留萌支廳

苫前村（苫前郡苫前村牧場）

一、金寶院の十一面觀音菩薩像

苫前古丹別川尻の金寶院は、遠く苫前開發の昔からあつたもので、時の陣屋の祈願所であつたものである。この寺の寶物として安置されてゐる十一面觀世音菩薩の像について、面白い言ひ傳へがある。

明治二十三年頃、京都下京區麩谷町三條に松前屋といふ宿屋があつた。この宿屋へ數年前から一年に一回泊つて來て宿る、開國法印尊榮といふ小僧があつた。この僧は觀世音菩薩の像を厨子に入れて、諸國を行脚してゐたのである。當時金寶院の法印慈厚龍山といふ人が、たま〳〵この宿屋に泊り合はせて知己となつた。それから幾年かの後、尊榮は諸國行脚から歸つてまもなく病程し、佛像は宿屋の主人が床間に安置して祭つてゐた。その頃龍山は又京都に上り、この宿に著いて初めて尊榮の死をきゝ、心から彼の成佛を祈つてゐた。ある夜のこと佛があらはれて「自分は尊榮の死後この家で非常に厄介になつてゐるが、俗人のところにゐるのは心もとない。お前について北海道に渡り、金寶院に入つて脇佛ともなり本尊ともなつて、衆生を濟度したいから踐れていつてほしい」と言はれたところが、丁度その夜宿の主人にも同じ樣なお告げがあつたので、二人は互ゝと相談の結果、遂に龍山は像を背負つて北海道へ歸ることになつた。大敗の天資

第五十圖版
金寶院の十一面觀音菩薩像

に基風雨にあひて遂に死せんとす、願くは能登あはすならば乘れて我等の命を救けたまへ」と祈を固りに金佛を唱へた。ところが、天に不思議な幸があつて愛をあざむく樣な光明が四散し、晃れ狂ふ波浪も靜かになつて人々は無く死を說することが出來た。乘客一同は夢心地でこの佛のあらたかな御利益に感謝し、題目を唱へたといふことである。そして無事に江差に著いた。

龍山始め一同は、佛像を一先づ同地の曹洞院寺に安置して紀つた。近郷近在の老若男女が引きもきらず參詣して今迄にない賑盛はつた。其の後江差から海路苫前へうつし、今の金寶院へ安置申上げたと云ふことである。その後この佛像は、苫前の開發のために働く人達の信仰を一身にあつめて今に至つたのである。

本佛像は昭和七年旭川市に開かれた佛教展覽會に出陳され、其の眞僞は詳かでないが雲慶の作といはれてゐる。

二、大日如來の畫幅

苫前村

留萌支廳

苫前村（苫前郡苫前村役場調）

一、金寶院の十一面觀世音菩薩

苫前古丹別川尻の金寶院は、遠く苫前開發の昔からあつたもので、時の陣屋の祈願所であつたものである。この寺の寶物として安置されてゐる十一面觀世音菩薩の像について、面白い言ひ傳へがある。

明治二十三年頃、京都下京區麩谷町三條に松前屋といふ宿屋があつた。この宿屋へ數年前から一年に一回這つて來て宿る、開國法印尊榮といふ小僧があつた。この僧は觀世音菩薩の像を厨子に入れて、諸國を行脚してゐたのである。當時金寶院の法印藤原龍山といふ人が、たま〳〵この宿屋に泊り合はせて知己となつた。それから幾年かの後、尊榮は諸國行脚から歸つてまもなく病歿し、佛像は宿屋の主人が床間に安置して祭つてゐた。その頃龍山は又京都に上り、この宿に著いて初めて尊榮の死をきい、心から彼の成佛を祈つてゐた。ある夜のこと佛があらはれて「自分は尊榮の死後この家で非常に厄介になつてゐるが、俗人のところにゐるのは心もとない。お前について北海道に渡り、金寶院に入つて脇佛ともなり本尊ともなつて、衆生を濟度したいから連れていつてほしい」と言はれたところが、丁度その夜宿の主人にも同じ樣なお告げがあつたので、二人は種々と相談の結果、遂に龍山は像を背負つて北海道へ歸ることになつた。大阪の天滇山沖から千石船に乘つて歸る途中、頗悪く駛河灘で暴風雨にあひ船は難破されて既に沈沒せんとした。乘客一同は死の恐怖より逃れんとして阿鼻叫喚の修羅場となり、龍山も既に死を覺悟してゐたが、ふと自分の安置してゐる觀音像の事を思ひ出し、この佛像におすがりして死をのがれようとした。

第五十圖版
金寶院の十一面觀世音菩薩

箱のまゝ安置して龍山は毅然と立つて、波にさらはれやうとする身體を辛うじて支へながら印を右すび、「南無觀音大菩薩我等既に暴風雨にあひて正に死せんとす、願くは慈驗おはすならば乘れて我等の命を救けたまへ」と祈を唱りに金佛を唱へた。ところが、天に不思議な響があつて雲をあざむく樣な光明が四散し、荒れ狂ふ波浪も穏かになつて人々は漸く死を脱することが出來た。乘客一同は夢心地でこの佛のあらたかな御利益に感謝し、題目を唱へたといふことである。そして無事に江差に著いた。

龍山始め一同は、佛像を一先づ同地の曼陀羅寺に安置して祀つた。近郷近在の老若男女が引きもきらず參詣して今迄にない程賑はつた。其の後江差から海路苫前（うつし、今の金寶院へ安置申上げたと云ふことである。その後この佛像は、苫前の開發のために働く人達の信仰を一身にあつめて今に至つたのである。

本佛像は昭和七年旭川市に開かれた佛教展覽會に出陳され、其の眞僞は詳かでないが雲慶の作といはれてゐる。

二、大日如來の畫幅

苫前村

金寶院の寶物である大日如來の畫幅は、印度畫であるといはれてゐる。之は徳川家康臨終の時に、引導を授けたといふ木食法印の寄贈によるものと傳へられる。

三、三毛狐の話

苦鈴村古丹別川尻の陣屋の後の山に、三毛狐の夫婦が住んでゐて、時々此處を通る人達に邪魔をした。或年のこと長さんといふ若者が、三輪の山の上にあつた藤田萬助の碑の前を通くなつてから通りかゝると、碑の後から一人の娘がふら〳〵と出て來て「濟みませんが道に迷つて困つてゐる者ですから救けて下さい」と言つて、手を合せて拜んでゐるので可哀想に思ひ手を取つて歩き出した。ところが何氣なく手を見ると指が三本より無い。さては化かされたとその女を突き飛ばして逃げると、後からその女が「おうい〳〵」と呼びながら追ひかけて來るので、後をも見ないで一目散に逃げ歸つた。そして家へ著くと、すぐ重い病氣になつてどつと床に就いてしまつた。熱に浮かされ氣も半ば狂つて、一年程の間「好い娘が來る」とか、「娘が俺を誘ひに來た」とかと氣味の惡い事を口走つてゐたが、遂に狂死してしまつた。その後金寶院の坊さんの夢枕に狐があらはれて「俺はあの長吉につき纏つて殺してしまつた。今も夫婦とも丈夫でゐるが、人が入つて來て草原も無くなつて困つてゐるから寺の隅に埋ませてくれ。」と頼んださうだ。金寶院の隣にある堂は、この狐を祀つたものだと云はれてゐる。

第五十一圖版
大日如來の畫幅

四、先住民族の遺蹟

苦鈴村創設の基は遠く天正年間に始まる。それ以前は先住民族が狩獵をなして住んで居たもの〻如く、古丹別川の中流から下流にかけて集團をなし、竪穴の中に棲んで居た遺蹟がある。尙沿岸一帶に沿うてチヤシの跡と考へられるものも存するから、當彼等はこの川岸附近を中心に、相當活躍したものであると考へられる。

そこで苦鈴村古丹別三輪の竪穴と古丹別川尻幌内澤の穴とが、土地の人々によつて先住民族の遺蹟であると言ひ傳へられてゐる。三輪の竪穴は上平部から五六町離れた渡船場のある處で、苦鈴部より東南に約半里隔つてゐる。竪穴は河に依つて取圍まれた畑地の中に有り、開墾を設いて三十餘個並んでゐる。此處は明治二十四五年頃に開墾したので、穴の大部分は埋められてゐるが、それでも森然をなして居て竪穴であることは一見明瞭である。上口が十一二尺から三十四五尺位までである。

土地の所有者に訊くと、開墾の當時は深さ五尺もあつて開墾に支障を來すので、馬耕するによい程度まで之を埋めたものだといふことである。そして附近から出た土器の破片等も、大抵は其の際一緒に埋めたと云つてゐる。此の沿岸の畑地の竪穴は今でもぽつ〳〵散在してゐるが、大部分は土功組合區域になつてゐるので今は水田に變つてわからない。なほ上流はイシカラクシュナイ即ち石狩の澤があるから、古丹別と共に此の沿岸では、相當の聚落をなしてゐたものであると思はれる。大正十三年の春、古丹別川尻の農陣屋の上の畑地から、掘出した壺は現在豐國寺で保存して居る。祝部式模紋型土器と考へられるが、發見者の言によれば二十米ばかり上の畑地に馬耕を掛けると、地下約六寸位の所に鉛が當つて上土を除けると壺の中に水が溜つてゐたと云ふことである。此の壺の附近には別に作土を施した形跡はないが、此の丘の下の川岸に二條の溝を掘つた遺蹟がある。それからなの出た所から神社に至る約一里の間には、數十のチヤ

金寶院の寶物である大日如來の畫幅は、印度畫であるといはれてゐる。之は德川家康臨終の時に、引導を授けたといふ木食法印の寄贈によるものと傳へられる。

三、三毛狐の話

苫前村古丹別川尻の陣屋の後の山に、三毛狐の夫婦が住んでゐて、時々此處を通る人達に惡戯をした。或年のこと長さんといふ若者が、三線の山の上にあつた藤田萬助の碑の前を過ぎてから通りかゝると、碑の後から一人の娘がふら〳〵と出て來て「濟みませんが道に迷つて困つてゐる者ですから救けて下さい」と言つて、手を合せて拜んでゐるので可哀想に思ひ手を取つて歩き出した。ところが何氣なく手を見ると指が三本より無い。さては化かされたとその女を突き飛ばして逃げると、後からその女が「おゐい〳〵」と呼びながら追ひかけて來るので、後をも見ないで一目散に逃げ歸つた。そして家へ著くと、すぐ重い病氣になつてどつと床に就いてしまつた。熱に浮かされ氣も半ば狂つて、一年程の間「好い娘が來る」とか、「娘が俺を誘ひに來た」とかと氣味の惡い事を口走つてゐたが、遂に狂死してしまつた。その後金寶院の坊さんの夢枕に狐があらはれて「俺はあの長吉につき纏つて殺してしまつた。今も夫婦とも丈夫でゐるが、人が入つて來て草原も無くなつて困つてゐるから寺の隣に棲ませてくれ。」と頼んださうだ。金寶院の隣にある堂は、この狐を祀つたものだと云はれてゐる。

第五十一圖版
大日如來の畫幅

四、先住民族の遺蹟

苫前村開發の基は遠く天正年間に始まる。それ以前は先住民族が狩獵をなして住んで居たものゝ如く、古丹別川の中流から下流にかけて集團をなし、竪穴の中に棲んで居た遺蹟がある。尙沿岸一帶に沿うてチヤシの跡と考へられるものも存するから、昔彼等はこの川岸附近を中心に、相當活躍したものであると考へられる。

そこで苫前村古丹別三線の竪穴と古丹別川尻幌内澤の穴とが、土地の人々によつて先住民族の遺蹟であると言ひ傳へられてゐる。三線の竪穴は上平驛から五六町離れた渡船場のある處で、苫前驛より東南に約半里隔つてゐる。竪穴は河に依つて取圍まれた畑地の中に有り、間隔を置いて三十餘個並んでゐる。此處は明治二十四五年頃に開墾したので、穴の大部分は埋められてゐるが、それでも盎狀をなして居て竪穴であることは一見明瞭である。上口が十一二尺から三十四五尺位までである。

土地の所有者に訊くと、開墾の當時は深さ五尺もあつて開墾に支障を來すので、馬耕するによい程度まで之を埋めたものだといふことである。そして附近から出た土器の破片等も、大抵は其の際一緒に埋めたと云つてゐる。此の沿岸の畑地の竪穴は今でもぽつ〳〵散在してゐるが、大部分は土功組合區域になつてゐるので今は水田に變つてわからない。なほ上流はイシカラクシュナイ卽ち石狩の澤があるから、古丹別と共に此の沿岸では、相當の聚落をなしてゐたものであると思はれる。大正十三年の春、古丹別川尻の舊陣屋の上の畑地から、掘出した壺は現在豐國寺で保存して居る。縄部式捻紋型土器と考へられるが、發見者の言によれば二十米ばかり上の畑地に馬糞を拂けると、地下約六寸位の所に鐵が當つて上土を除けると壺の中に水が溜つてゐたと云ふことである。此の壺の附近には別に作土を施した形跡はないが、此の丘の下の川岸に二條の溝を掘つた遺蹟がある。それから器の出た所から神社に至る約一里の間には、數十のチヤ

シと考へられる遺蹟が厳然と存してゐる。多くは西方海に面して崖上二段に掘作され、其の脇に溝があり、中には方形をなしたものと段々重り合つてゐるものとある。風が強いので砂が飛んで形狀を損し又は埋めてゐるので、未だ出土品と稱すべき程のものも見當らないが、これ等と數丁離れた東方の平野からは、開墾當時黑曜石の鋒、矢の根石等が相當に發見されたとのことである。

五、金昆羅神（宗谷郡初山別村役場調）

今から四十年以前、初山別村字イナウシナイ風蓮岬海岸に、金昆羅神社のお札が漂着したのを、奥瀨西松といふ漁夫が發見した。この傍では勿體なしと海上に流したところが、翌朝又同じ箇所に漂着した。三四回繰返したが同樣であつた。そこで此の地に不思議な因緣があるものとなし、附近の岩の上に祭つた。

元岩間附近は有名な波浪の高い箇所であつて、遭難船も相當あつたとの事であるが、其の後遭難船は殆んどなくなつた。其の頃から風蓮岬を金昆羅岬と稱し、毎年八月漁業者合同で盛大な祭典を行つてゐる。

第五十二圖版　金昆羅岬

宗谷支廳

宗谷村（宗谷郡宗谷村役場調）

一、不動のお水

不動のお水は宗谷村字カネタロにある。寛政の頃、内地より移住せる性質極めて實直にして、親方の信望の篤い漁夫があつた。或日、船頭の過のため目を傷めて危く失明せんとした。其の子は十四歳であつたが、孝心頗る深く父の平癒をば弁天樣（現在の嚴島神社）に祈願した。然るに滿願の日に至り神の御告げに依つて、靈水を得た。そこでそのお水で眼の傷を洗ひ淨めると、僅か一週間にして不思議にも平癒した。爾來此の地方では不動のお水と稱し、之を信仰する者が多く、此の水を用ひて治癒したものの數も寡くないといふことである。

二、東風石（ヒガシ）

東風石は宗谷村大字宗谷字オランナイにある。子持石又は女郎石とも云ふ。その昔、和人の未だ來住しなかつた頃、ピリカタイにアイヌの若夫婦があつた。極めて睦じく一兒を儲けて近隣羨望の的となつてゐた。或年夫が酋長に屋はれて其の漁場に出稼ぎ中、何時しか酋長の娘と懇に落ち、妻ある若者はその娘と五月の中頃、おぼろ月夜の靜かなる頃夜中、小舟に乘つて宗谷を後に樺太目指して漕ぎ出した。此の頃ピリカタイの家に在つた若き妻は、幼兒を抱いて夫を

シと考へられる遺蹟が歴然と存してゐる。多くは西方海に面して崖上二段に掘作され、其の間に溝があり、中には方形をなしたものと段々重り合つてゐるものとある。風が強いので砂が飛んで形状を損し又は埋めてゐるので、未だ出土品と稱すべき程のものも見當らないが、これ等と數丁離れた東方の平野からは、開墾當時黒曜石の鏃、矢の根石等が相當に發見されたとのことである。

五、金毘羅岬（字前都初山別村役場調）

今から四十年以前、初山別村字イナウシナイ風速岬海岸に、金毘羅神社のお札が漂着したのを、東瀬西松といふ漁夫が發見した。この傍では勿體なしと海上に流したところが、翌朝又同じ箇所に漂着した。三四回繰返したが同様であつた。そこで此の地に不思議な因縁があるものとなし、附近の岩の上に祭つた。

元岩間附近は有名な波浪の高い箇所であつて、遭難船も相當あつたとの事であるが、其の後遭難船は殆んどなくなつた。其の頃から風速岬を金毘羅岬と稱し、毎年八月漁業者合同で盛大な祭典を行つてゐる。

第五十二図版　金毘羅岬

宗谷支廳

宗谷村（宗谷郡宗谷村役場調）

一、不動のお水

不動のお水は宗谷村字カネタロにある。寛政の頃、内地より移住せる性質極めて質直にして、親方の信望の篤い漁夫があつた。或日、船頭の過のため目を傷めて危く失明せんとした。其の子は十四歳であつたが、孝心厚く父の平癒を祈願天様（現在の厳島神社）に祈願した。然るに滿願の日に至り神の御告げに依つて、霊水を得た。そこでそのお水で眼の傷を洗ひ浄めると、僅か一週間にして不思議にも平癒した。爾来此の地方では不動のお水と稱し、之を信仰する者が多く、此の水を用ひて治癒したものの數も寡くないといふことである。

二、東風石

東風石は宗谷村大字宗谷字オラシナイにある。子持石又は女郎石とも云ふ。その昔、和人の未だ来住しなかつた頃、ピリカタイにアイヌの若夫婦があつた。極めて睦じく一兒を儲けて近隣羨望の的となつてゐた。或年夫が酋長に屋はれて其の漁場に出稼ぎ中、何時しか酋長の娘と恋に落ち、妻ある若者はその娘と五月の中頃、おぼろ月夜の静かなる真夜中、小舟に乗つて宗谷を夜に紛れ太目指して漕ぎ出した。此の頃ピリカタイの家に在つた若き妻は、幼兒を抱いて夫を

案じつゝ門邊に立つて沖を眺めてゐたが、ふと之を發見し只一心に沖なる舟を目指して、夫の名を呼びつゝ磯づたひに追走した。

然し海と陸、如何ともする術なく、殊に順風に滿帆、矢の如く走せ行く舟、之を眺めて妻は遂に意を決し、愛兒を抱いてオランナイの濱に投身した。すると不思議にも舟足は、はたと止んで風は全く凪いでしまつた。

驚いた二人は天に向ひ「東風よ！吹けや」「東風よ!!」「東風よ!!」と東風を呼んだが、却つて北西の烈風が吹き出して小舟は忽ち激浪に呑まれてしまつた。その翌朝オランナイ崎の南方沖合に大きな石二個と、海岸に恰も子を抱いたやうな大小二個の石が現れた、沖の二つは時々「東風よ！」、「東風よ！」と呼ぶことがあつたとか。村人は沖の二つを若者と娘の化身として一方を東風石、一方を女郎石と呼び、磯の二つを若き妻と愛兒の化身として子持石と呼ぶに至つた。

三、コロポツクル

古老の言に依ると、その昔宗谷に小人があつた。住居は明らかでなく、他種族と面接するのをひどく嫌ふ風があつた。のみならず性極めて敏捷であつて、全くその容貌を認むることができなかつた。然し乍ら小兒のやうな聲を發し、蝦夷の窓下、或は入口に來ては魚、薪等を與へ、時には物品を交換することもあつた。

或日、アイヌが、その小人の手を取つてむりに屋内に引き入れて見たところ、裸體の女子で口の周圍や手には入墨があつたといふことである。その當時宗谷村字泊内に小屋を築いた形跡はあるが、間もなく樺太方面へでも渡つたものか、それから後は頓とその出現を知る者がないと云ふ。世にコロポツクルと傳へられるものは、或はこれらを指すのではあるまいかといふことである。

香深村（線文郡香深村役場調）

四、桃岩

桃岩は海拔二四九米、香深村字セトチ海岸にある。增毛對岸文アイヌ激戰の跡として知られ、幾々たるセトチ山道に、異彩を放つてゐる桃狀形の天險地帶であり、島中隨一の奇勝である。岩上には黃花シヤタナボ、繪文草等百數十種の名高い植物が生ひ茂り、百花繚亂の一大繪卷物は、五六月の交を以て最も美事に展り開げられる。

五、見内神威

香深村字カフカイ部落十八番地先の渚にある。木造粗末十七坪の御堂を矢來の上に築いて、客せては遠ナ潮の音に永遠の哀史を、囁いてゐるさゝやかな堂宇である。

宗谷アイヌへの慰撫隊長として、晴れの征途に上る夫君を見送り、思慕の情愛纏綿として盡きず、黃狀の身を抱へて岩頭に凭れたまゝ、次第に消え去り行く船影と共に、遂に石に化したといふ若きメノコ（アイヌの婦）を祀つた傳說の祠であつて、安産とお乳の神として遠く道外にまで知られてゐる。

往時此の岩を見るものには、不幸が伴ふと云はれて居たので、此處を通るものは殊更に顏を外向けたといふ、所謂「見ないで通る」がこの見内神威の起源となつたと傳へられる。

六、香深のチヤシ

香深市街地二百七十六番地の丘地、潮風爽かな禮文水道に浸つた利尻の秀峰を眺め、清爽閑雅な高臺に、昔ながらの跡をとゞめてゐる所謂香深チヤシは、禮文小學校を距てる約一町の東端に、突出せる千島小笠地帶の丘地にある。チヤシの特徴である壕塁が、深さ四尺、幅九尺の直線を以てくつきりと南北に切り落され、其の鼻が六間幅ゝ間延びの、孤立した垣地となつて、先端は直に十丈餘の斷崖となつてゐる、偉麗い遺跡の一つである。

鷺泊村（利尻郡鷺泊村役場調）

七、鷺泊古戰場

今を去る百有餘年前、即ち文化四年の夏露人來寇の事があり、沿海警備交ゝ到り、我が官船（松前藩赤船）商船の砲撃を受け、掠奪の難に遇ふものが少くなかつた。松前藩は官船二隻を以て警備の任に當らしめたところ、却つて撃破され鷺泊灣に逃れたが露人の追撃は止まず、遂に我が艦は撃沈されてしまつた。乘組員は傳馬船を下して利尻富士に難を避け、露人は深く山中まで搜索の手を延ばしたが見當らず、去るに臨んで先年捕虜とした一人を釋放し一書を與へた。其の文意に曰く、「利尻禮文の兩島は元來露國の領土なり、汝等妨害するあらば汝等の生命は勿論、汝等の本國を侵略すべし」と云ふのであつた。一同は磯船で苫前に免れ、間もなく松前に到つて藩主に報告した。松前藩では大に驚いて急使を江戸に派遣した。此の報を得た幕府は直ぐさま大老會議を開き、遂に會津藩に征討の命を下した。即ち家老諏訪幾之進に精兵三百二十名を附して、北海に向かはしめたのである。其の一隊は宗谷岬の守備に當り、他の一隊百六十名は諏訪幾之進自ら之を引率して、本島本泊に上陸した。此の時既に露軍は禮文を占領してゐた。そこで香形、鷺泊の要所に陣屋を設け、海を挾んで對陣數ケ月に及んだ。敵は我が威武侵すべからずと見たか、夜陰に乘じて悉く逃れ去つた。其の間蔬菜類の供給に缺乏を告げたため水腫病を發し、死者五十名に達したと云はれる。即ち全軍の三分の一を喪ふに至つたのである。會津藩は諸士の墓碑を磐梯山の石で刻み、越後の新潟より大和船に積載して、此の利尻の地に建設した。蓋し會津藩の記錄には殉難志士五十名とあり、往時は十六士の墓碑があつたが、風雨百年消滅して墓石を止むるものは、現在左の八基に過ぎない。

鷺泊村字本泊真宗本淨寺境内

會津藩士　渡部左右秀俊

同　丹羽　織之丞　俊　茂右衛門

同　樋口　源太　俊　孫　吉

鷺泊村字本泊淨土宗慈敎寺境内

會津藩士　關場春温友吉

同　白石　又衛門

同　遠山　登　俊利　助

香形村字穂富町

會津藩士　諏訪幾之進光尙

昭五十三國版　香形會津藩士の墓

香深市街地二百七十六番地の丘地、潮風爽かな礼文水道に浸つた利尻の秀峰を眺め、清爽闊雅な高臺に、昔ながらの跡をとゞめてゐる所謂香深チヤシは、礼文小学校を距てる約一町の東端に、突出せる千島小笠地帶の丘地にある。チヤシの特徴である堅壕が、深さ四尺、幅九尺の直線を以てくつきりと南北に切り落され、其の奥が六間幅九間延びの、孤立した丘地となつて、先端は直に十丈餘の断崖となつてゐる、得難い遺跡の一つである。

鷲泊村（利尻郡鷲泊村役場調）

七、鷲泊古戦場

今を去る百有餘年前、即ち文化四年の夏露人来寇の事があり、沿海警報安土到り、我が官船（松前藩赤船）商船の砲撃を受け、掠奪の歴に逃ふものが少くなかつた。松前藩は官船二隻を以て警備の任に當らしめたところ、却つて撃退され鷲泊湾に逃れたが露人の追撃は止まず、遂に我が艦は撃沈されてしまつた。乗組員は傳馬船を下して利尻富士に避を避け、露人は深く山中まで捜索の手を延ばしたが見當らず、去るに臨んで先年捕虜とした一人を釋放し一書を與へた。其の文意に曰く、「利尻礼文の両島は元来露國の領土なり、汝等妨害するあらば汝等の生命は勿論、汝等の本國を侵略すべし」と云ふのであつた。一同は磯船で苫前に発れ、間もなく松前に到つて藩主に報告した。松前藩では大に驚いて急使を江戸に派遣した。此の報を得た幕府は直ぐさま大老會議を開き、遂に會津藩に征討の命を下した。即ち家老諏訪幾之進に精兵三百二十名を附して、北海に向かはしめたのである。其の一隊は宗谷岬の守備に當り、他の一隊百六十名は諏訪幾之進自ら之を引率して、本島本泊に上陸した。此の時既に露軍は礼文を占領してゐた。そこで香形、鷲泊の両所に陣屋を設け、海を挟んで對陣数ヶ月に及んだ。敵は我が威武侵すべからずと見たか、夜陰に乗じて悉く逃れ去つた。其の間農業類の供給に缺乏を告げたため水腫病を發し、死者五十名に達したと云はれる。即ち全軍の三分の一を喪ふに至つたのである。會津藩は諸士の墓碑を磐梯山の石で刻み、越後の新潟より大和船に積載して、此の利尻の地に建設した。蓋し會津藩の記録には殉難志士五十名とあり、往時は十六士の墓碑があつたが、風雨百年消滅して墓石を止むるものは、現在左の八基に過ぎない。

鷲泊村字本泊鷲宗本浄寺境内

會津藩士　渡部左右秀俊

同　丹羽　義之丞　俊　元右衛門

同　樋口　源太　俊　孫　吉

鷲泊村字本泊浄土宗慈教寺境内

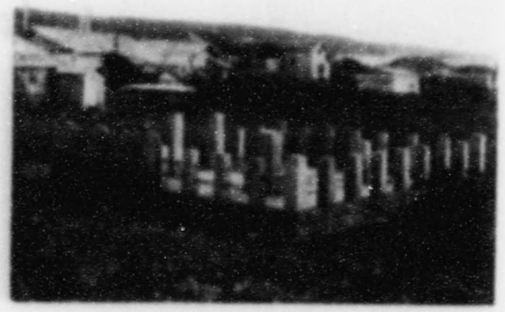
會津藩士　臨場春温友吉

同　白石　又衛門

同　逢山　登　俊利　助

香形村字神宮町

會津藩士　諏訪幾之進光尚



第五十三圖版　香形會津藩士の墓

同　山田　京佐久

何れも文化五年七月中に死したものである。之に關して高杉實松は、その未定稿に次の如く記してゐる。

嗚呼諸士は君國の爲に身命を一葉の輕舟に託して、海山萬里深く不毛の地に入り、倫さに艱苦を嘗め對戰數閲月、終に骨を此の孤島に曝す。今此處は實に當年の古戰場なり。

過其諸士殉難報國の丹心は、遂に暴露をして一指を染むる能はざらしめたり。嗚呼偉なる哉、諸士の功勲利尻富士と共に長へに光を學ふべきなり。此に特筆して埋滅せんとする諸士の偉蹟を顯揚せんとす。無窮萬世遺なきを保せず。須らく記して後の賢者に待たんのみ。嗚呼。

網走支廳

網走町（網走郡網走町役場調）

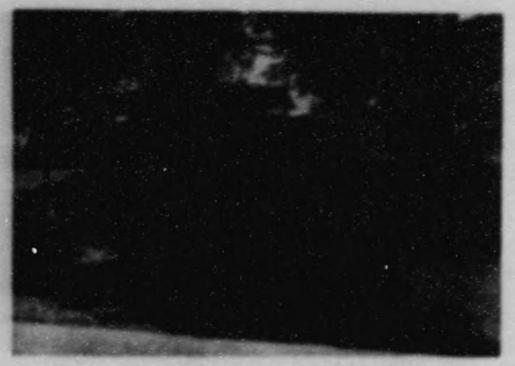
一、チバシリ

網走は古稱チバシリと云つて、アイヌが名付けたものであるが、後轉してアバシリとなつたのである。その意味は「我等の見付けた岩」と云ふので、これには次の樣なアイヌの傳說がある。

和人が未だ一人も居なかつた昔のこと、網走の地は海がもつと深く入り込んで居て、今の仲通や東止内までも潮が滿ちて居た。そしてヤチタモの林や、蔦蘿等が一面に繁いてゐて、鹿や熊狼なども澤山棲んで居た。

アイヌ達は今の新橋附近の丘と二タルの丘とに分れて住んで居り、一年の半分は狩獵、半分は漁をして生活して居たのである。其の頃二タルバチにヨセトと云ふ美しいアイヌの娘が、母親のイバローと二人で仲よく暮して居た。ヨセトは氣立が優しい上に大層美しかつたので、方々からお嫁に望まれてゐた。併し此のコタン（部落）のボンヤイにはセカチ・ノフカ、二タルにはセカチ・シマカと云ふ勝れた若者が居たのでコタンの者達は、ヨセトのお婿さんにするのは、この二人の中の一人に違ひない。コタン一の强い若者がコタン一の美しいヨセトを娶るのは、自分達の誇めてゐるカムイ（神樣）の思召だと信じてゐた。

ノワカもシマカも大變賢い若者であつたが、何時の間にかコタン一の勇者になりたいと互に競ふやうになつた。或時は捕へた熊の數を、又或時は獲つた鮭の數を競つたが、どちらも取つた獲物の數は毎年不思議にも同じで、なか〳〵勝負はつかなかつた。コタンの多くの者は此の勝負が面白いので、長く續く樣にと願つてゐた。併しコタン一の長者イヨイタクシー（豫言者と云ふ意）イガシだけは困つたことだと心配してゐた。イガシは何事でも言ひ當てると云ふ偉い豫言者で、近頃しきりに樹林に來て鳴くカムイチカウブ（鶴ふくろ）の鳴聲から、近い中にコタンに大事件のあることを悟つた。「困つたことになつた。此のコタンも近い中に亡びてしまふ。コタンを背負つて立たねばならぬノワカもシマカも、あゝして爭つてゐては所詮此のコタンは亡びる外はない。どちらが勝つたにしてもたゞではすむまい。しかしこの外に此のコタンを亡ぼす大事件と云へば、一體それは何だらう」流石に賢いイガシではあつたが、それが何であるかは一向見當がつかなかつた。



第五十四圖版　桂ケ岡チヤシ

かくしてとう〳〵その年も秋になつてしまつた。

コタンの谷地の樹林では毎夜の樣に、しまふくろが氣味の惡い鳴き聲を立てゝ居る。豫言者イガシは「いよ〳〵此の秋だぞ、此のコタンが亡びる大事件の起きるのは！」と毎日コタンのチヤチヤ（老人）達を誘つて桂ケ岡のチヤシに、祭壇を設けてカムイ樣に祈りを捧げた。

その年の秋は不思議に漁のない年であつた。そして毎日雨ばかり降つて三四日降つては一寸歇み、五六日降つては一寸止みして、青空はちつとも見えなかつた。川の水も海の水も日增しに增して、どこまでが川かどこまでが海か分らず、遂には朝定湖まで一面にずつと水續きになつてしまつた。

この日の雲過ぎ、誰ともなく沖に二間もある大きな白い魚が泳いでゐるのを見つけた。コタンは大變な騷ぎになつた。そして「あれはカムカムイチカウブ（神の魚）だ。あれを取つた者とそ酋ん長にコタン一の勇者だ」とまで言ひふらす者が出て來た。實際その魚は非常に大きく白くて、丁度カレヒ（鱈）の樣な魚で、遠くから見ても慥かに二間近くはあつた。そこでコタンの人達は、きつとあの二人が此の事で又爭ふに違ひないと思つた。桂ケ岡の祭壇で祈りをして居た豫言者イガシは之を聞いて、

「それは大變だ!!　この荒天に魚をとるなんて、それこそ二人とも生命をなくしてしまふ。誰かとめてこい。」と人をやつて止めさせようとしてゐると、一人の若者がかけて來て、

「イガシ樣大變です〳〵、ノワカもシマカも海へ飛び出してしまひました。あの白い魚をとるといつて!!」と息せき切つて告げた。

「それ!!　大變!!」

と一同背のびをして桂ケ岡から沖を見ると、ポンモイ岬の近くで大うねりの波にもまれて、小さな丸木舟を操つてゐるのは、たしかにノワカ、そして遠くパイラギ落の方に豆粒のやうに見えるのは、きつとシマカに違ひない。併し不思議なあの白い魚は何處をどう泳いでゐるのか、流れてゐるのか、ちつとも姿が見えなくなつてゐる。

雨はます〳〵強く浪はます〳〵荒れて來る。それでも二つの丸木舟は次第〳〵に近付いてゆく。ザ、、、、、、ド

ノワカもシマカも大變賢い若者であつたが、何時の間にかコタン一の勇者になりたいと互に競ふやうになつた。或時は捕へた熊の數を、又或時は獲つた鮭の數を競つたが、どちらも取つた獲物の數は毎年不思議にも同じで、なか〳〵勝負につかなかつた。コタンの多くの者は此の勝負が面白いので、長く續く樣にと願つてゐた。併しコタン一の長者イヨイタクシー（雄言者と云ふ意）イガシだけは困つたことだと心配してゐた。イガシは何事でも言ひ當てると云ふ偉い雄言者で、近頃しきりに樹林に來て鳴くカムイチカワブ（鶯ふくろう）の鳴聲から、近い中にコタンに大事件のあることを悟つた。「困つたことになつた。此のコタンも近い中に亡びてしまふ。コタンを背負つて立たねばならぬノワカもシマカも、あゝして爭つてゐては所詮此のコタンは亡びる外はない。どちらが勝つたにしてもたゞではすむまい。しかしこの外に此のコタンを亡ぼす大事件と云へは、一體それは何だろう」流石に賢いイガシではあつたが、それが何であるかは一向見當がつかなかつた、

第五十四圖版　往ケ岡ナヤチ

かくしてとう〳〵その年も秋になつてしまつた。

コタンの谷地の樹林では毎夜の樣に、しまふくろが氣味の惡い鳴き聲を立てゝ居る。雄言者イガシは「いよ〳〵此の秋だぞ、此のコタンが亡びる大事件の起きるのは！」と毎日コタンのチヤチヤ（老人）達を誘つて往ケ岡のチヤシに、祭壇を設けてカムイ樣に祈りを捧げた。

その年の秋は不思議に漁のない年であつた。そして毎日雨ばかり降つて三四日降つては一寸歇み、五六日降つては一寸止みして、青空はちつとも見えなかつた。川の水も海の水も日增しに增して、どこまでが川かどこまでが海か分らず、遂には網走湖まで一面にずつと水續きになつてしまつた。

この日の霧過ぎ、遂ともなく沖に二間もある大きな白い魚が泳いでゐるのを見つけた。コタンは大變な騷ぎになつた。そして「あれはカムカムイチカワブ（神の魚）だ。あれを取つた者こそほんとうにコタン一の勇者だ」とまで言ひふらす者が出て來た。實際その魚は非常に大きく白くて、丁度カレヒ（鰹）の樣な魚で、遠くから見ても慥かに一間近くはあつた。そこでコタンの人達は、きつとあの二人が此の事で又爭ふに違ひないと思つた。往ケ岡の祭壇で祈りをして居た雄言者イガシは之を聞いて、

「それは大變だ!!　この荒天に魚をとるなんて、それこそ二人とも生命をなくしてしまふ。誰かとめてこい。」と人をやつて止めさせようとしてゐると、一人の若者がかけて來て、

「イガシ樣大變です／／、ノワカもシマカも海へ飛び出してしまひました。あの白い魚をとるといつて!!」と息せき切つて告げた。

「それ!!　大變!!」

と一同背のびをして往ケ岡から沖を見ると、ポンモイ崎の近くで大うねりの波にもまれて、小さな丸木舟を操つてゐるのは、たしかにノワカ、そして遠くバイラギ濱の方に豆粒のやうに見えるのは、きつとシマカに違ひない。併し不思議なあの白い魚は何處をどう泳いでゐるのか、流れてゐるのか、ちつとも姿が見えなくなつてゐる。

雨はます／／強く浪はます／／荒れて來る。それでも二つの丸木舟は次第／／に近付いてゆく。ザ、、、、、、、、ド

、ドワドドワト、、、、と物凄い鳴の音。

「あワ大變だ!!　あんな大きな波が!!」

と叫かゞ叫ぶとたんに、

「ゴーゴワ」

と言ふ物凄い音がしたかと思ふと、天にも届く様に海水が一度に噴き上つた。低地に建つてゐた小屋も押流されてしまつた。勿論二つの丸木舟などはどうなつたのか見當もつかない。

「おゝ大變だ!!　海嘯だワ〳〵。舟が見えなくなつた。」

「舟どころか、これぢやコタンは全滅だ!!」

と一同蒼くなつた。

「儲まれ〳〵。この上はカムイ様のお力ぢや。祈るより仕かに途はない。」

豫言者イガシは一同を勵まして、カムイに祈をこらした。暫くたつとその効驗が現れてか、さしもの怒れもやゝおさまり、雨も小降りになつて來た。そして消えさうになつてゐた篝火も再び勢よく燃え上つて來た。其處へあはたゞしく、

「大變です。ロセトが見えません。何處へ行つたのでせう。」

母は氣が狂つたやうに、ロセトの母親イパローが駆けこんできた。一同ははつとして立ち上つた。

イガシは靜かに祈りの手をほどいて

「何、ロセトが見えなくなつた——ではあの優しい娘は定ぶ海神をなだめに行つたに違ひない。」と立つて沖を指して

「見よ。あの波間に浮ぶ黑豆のやうなものを、あれがロセトだ。健氣にもロセトは一身を捧げて、このコタンを救ふために海へ飛びこんだのだ。あの優しい心は、きつとコタンを救ふ前兆を見せて與れたに違ひない？　おゝカムイよ。」

と眼をつぶつて、また深い歎息を捧げた。沖合の黑點はまだ波にもまれてゐる、と念に沈んだのか見えなくなつた。

「あワとう〳〵沈んでしまつた!!」

と思ふとたん今度は天地もさけん許りの地響と、海が一べんに破裂する様な凄じい大きな物音がした。一同は思はずその場にひれ伏して生きた心地もなかつた。やがて誰よりも先に眼をあげた豫言者イガシは、突然「おゝ見よ!!　皆のものあのワタラ（岩）を——あれが此のコタンの守り岩となつて與れるだらう。」一同は驚き立ち上つて海の方を見ると、不思議なことには今まで全くなかつた岩が川口に一つ、パイラギ嶽に二つ、怪かに頭を海の上に出して居る。

此の時不意に一人が、

「あワ水が引いてゆく、引いてゆく。」

と叫んだので、よく見ると地上をうづめてゐた海の水がどん〳〵沖の方へ引いて行く。海水が引くに從つて岩の頭がだん〳〵と現れて、不思議にも帽子型の岩になつてゆく。

と、その時である。その岩蔭からバタ〳〵と一羽の白鳥が飛び出して、

「チパシリ〳〵」

とやさしく鳴き乍ら、一二度岩を廻つて高かパイラギ沖の方へ飛んで行つた。パイラギ岬の先には、今生れたばかりの岩が二つ仲よく並んで立つてゐる。

第五十五圖版　二つ岩

白鳥はその岩の廻りを又飛び廻つてゐる。これを見たイガシは喜びの色を顔一ぱいに浮べて、

「あゝあの白鳥こそ優しい娘ッセトの生れがはりだ。あゝきけ、あの白鳥の鳴き聲を!!　チバシリチバシリと鳴いて居る。青等が見つけた岩だと言ふ意味だ。あの岩のある限り、此のコタンは何時までも榮えてゆくのだ。平和であるのだ。」と高らかにさけび、チヤシをぐる〳〵と廻り歩いた。一同も喜び勇んで手をつないで、その廻りを取り卷いてよろこびの歌を歌ひつゞけた。

朝はすつかり晴れて、さしも荒れに荒れた海もおだやかな風となつて、折から射す夕日に赤く染まつた白鳥は

「チバシリ〳〵」

と鳴きつゞけ乍ら、海の上を波は高く、波は低く、岩から岩へと飛び翔けつてゐる。

それから此のコタンを「チバシリ」と言ふ様になつた。

不思議な白い大きな魚は、今の大鮃だらうと言ふことである。

朝子岩（原名カムイツタラク）二つ岩（原名トノツタラク）柱ケ岡（もとチヤシのあつたところ）は、今は網走の名高い名所となつてゐる。

第五十六圖版　朝子岩

古くから開けて人が住んでゐたと言ふ種かな證據としては、竪穴や横穴の穴居址が澤山殘つてゐる。古い時代のアイヌ達の生活を物語る色々の土器や石器が、今でも最寄りの貝塚から發掘されるのである。

紋別町（紋別郡紋別町役場調）

二、紋別山報恩寺の石像

これは報恩寺の本堂に安置されてゐる石像で、此の地方によくある凝灰岩で造つたものである。古風な立像の地藏菩薩で高さ一尺二寸位である。明治二十一年即ち紋別戸長役場時代に、下水工事中發見され、永らく寶物として役場内に安置されて居たが、後報恩寺に之が安置を委託されたものである。形體や手法等から研究する時は、地方開發史を語る好資料となるであらうと云はれてゐる。

第五十九圖版　會津藩士の墓

三、會津藩士の墓碑

紋別山報恩寺境内に、御影石の高さ三尺位の石

第五十七圖版　紋別山報恩寺

第五十八圖版　報恩寺の石像

白鳥はその岩の廻りを又飛び廻つてゐる。これを見たイガシは喜びの色を顔一ぱいに浮べて、

「おゝあの白鳥とそ優しい娘ロセトの生れがはりだ。おゝきけ、あの白鳥の鳴き聲を!! チバシリチバシリと鳴いて居る。昔等が見つけた岩だと言ふ意味だ。あの岩のある限り、此のコタンは何時までも榮えてゆくのだ。平和であるのだ。」と高らかにさけび、チヤシをぐる〳〵と廻り歩いた。一同も喜び勇んで手をつないで、その廻りを取り巻いてよろこびの歌を歌ひつゞけた。

雨はすつかり晴れて、さしも荒れに荒れた海もおだやかな風となつて、折から射す夕日に赤く染まつた白鳥は

第五十五圖版　二つ岩

「チバシリ〳〵」

と鳴きつゞけ乍ら、海の上を或は高く、或は低く、岩から岩へと飛び翔けつてゐる。

それから此のコタンを「チバシリ」と言ふ様になつた。

不思議な白い大きな魚は、今の大鮃だらうと言ふことである。

帽子岩（原名カムイワタララ）二つ岩（原名トノワタラ）柱ケ岡（もとチヤシのあつたところ）は、今は網走の名高い名所となつてゐる。

第五十六圖版　帽子岩

紋別町（紋別郡紋別町役場調）

古くから開けて人が住んでゐたと言ふ確かな證據としては、堅穴や横穴の穴居跡が澤山殘つてゐる。古い時代のアイヌ達の生活を物語る色々の土器や石器が、今でも最寄りの貝塚から發掘されるのである。

二、紋別山報恩寺の石像

これは報恩寺の本堂に安置されてゐる石像で、此の地方によくある凝塊岩で造つたものである。古風な立像の地藏菩薩で高さ一尺二寸位である。明治二十一年即ち紋別戸長役場時代に、下水工事中發見され、水らく寶物として役場内に安置されて居たが、後報恩寺に之が安置を委託されたものである。形體や手法等から研究する時は、地方開發史を語る好資料となるであらうと云はれてゐる。

三、會津藩士の墓碑

紋別山報恩寺境内に、御影石の高さ三尺位の石

第五十九圖版　會津藩士の墓

第五十七圖版　紋別山報恩寺

第五十八圖版　報恩寺の石像

碑が三基ある。即ち蝦夷府時代會津藩士が、北方の警備や開拓の任に當つた當時、病歿した藤沼在盛願（文久元年三月二十八日）位藤千代松啓美（文久二年三月二十六日）樋口覺次郎（文久二年八月十三日）の三人の墓石であつて、初め故別町樺天岬にあつたものと、報恩寺の開祖玄龍師が、現在の處に移したものと傳へられる。

膽振支廳

伊達町（有珠郡伊達町役場調）

一、チヤランケ岩

チヤランケ岩は、善光寺の西方伊達町と虻田村々界の海濱にある瓦岩で、アイヌ語にては、之を「ヂランケマス」と云ふ、蓋し論議又は談判の意味である。

土人の傳ふるところによれば、往昔此の海岸に鯨が漂流し、虻田村の土人が之を占有した。有珠の土人は之に異議を唱へ、自分の村の領域であるといつて爭つて止まず、談判は三日に亙り終に有珠方の有に歸した。そして其の談判の局に當つたものは遂に石と化し、一は起立し一は屈伏したのであるといつてゐる。之を陸より見れば、瓦岩の累々たるに過ぎないが、海上より遠く眺めると、宛も人の起伏せる狀に似て居る。

第六十圖版　チヤランケ岩

碑が三基ある。即ち舊幕府時代會津藩士が、北方の警備を開拓の任に當つた當時、病歿した藤沼在忠（文久元年三月二十八日）佐藤千代松啓美（文久二年三月二十六日）樋口覺次郎（文久二年八月十三日）の三人の墓石であつて、初め紋別町辨天岬にあつたものを、報恩寺の開祖玄龍師が、現在の處に移したものと傳へられる。

膽振支廳

伊達町（有珠郡伊達町役場調）

一、チヤランケ岩

チヤランケ岩は、善光寺の西方伊達町と虻田村々界の海濱にある巨岩で、アイヌ語にては、之を「ザランケマス」と云ふ、蓋し論議又は談判の意味である。

土人の傳ふるところによれば、往昔此の海岸に鯨が漂流し、虻田村の土人が之を占有した。有珠の土人は之に異議を唱へ、自分の村の領域であるといつて爭つて止まず、談判は三日に亘り終に有珠方の有に歸した。そして其の談判の局に當つたものは遂に石と化し、一は起立し一は屈伏したのであるといつてゐる。之を陸より見れば、巨岩の累々たるに過ぎないが、海上より遠く眺めると、宛も人の起伏せる狀に似て居る。

第六十圖版　チヤランケ岩

豐浦村（虻田郡豐浦村役場）

二、岩屋觀音

この觀音は、豐浦村字禮文華俗稱ホロナイケウボールの海濱地、間口四間、奥行六間、高さ二間半の洞窟内にあつて、有珠善光寺の管理に屬してゐる。大正十四年禮文華、靜狩の有志が相謀り、洞窟内に間口六尺奥行九尺のコンクリート建の御堂を建立して安置した。

第六十一圖版　岩屋觀音

寛文六年僧圓空大德が本道に渡航し、禮文華岩屋に於て大士尊像を彫刻して安置した。その後船國の六郎が禮文華山道を通行の際大熊に逐はれ、鹿道より岩屋に下り、大士尊像の背後に隱れたところ、熊は猛つて尊像の御首を引拔き去り、不思議にも六郎は危難を免れたと云ふ。以後首無しの尊像と稱したが、後虻田禮文華漁場の請負人であつた泉藤兵衛が、小主典門野氏手代新谷庄吉の許しを得て、函館の佛師伊勢屋仁右衛門に、大士尊像の御首を修復せしめたのだといふ。

因に泉藤兵衛の書き記した由來は左の如くである。

語曰禮文華岩屋觀音大士尊像ノ由來ヲ尋ヌルニ今ヲ去ルコト二百九十有餘年即チ寛文年中、僧圓空大德當道ニ渡航シ、禮文華岩屋ニ於テ大士尊像ヲ彫刻シ安置セリ、後尊像霊驗不思議ナル為大士尊像ノ御首ヲ引拔キタル如キ跡アリ。故ニ數十年以來人皆御首ナシノ尊像ト稱セリ。禮文華土人古老ノ口碑ニ依ルニ昔船國ノ六郎禮文華山道ヲ通行ノ際大熊ニ逐ハレ、鹿道ヨリ岩屋ニ下リテ土人大ニ尊信セリ、自分藤兵衛嘗テ虻田禮文華漁場請負中岩屋大士尊像ノ御首ヲ修復センコトヲ志セシガ、偶ゝ該漁場ヲ政府産物會所ヘ返納命ゼラレ、請取方トシテ少主典門野氏手代新谷庄吉外二名下リ、事件完了後自分藤兵衛ニ於テ大士尊像ノ御首修復ノ事門野主典ニ出願セルニ許可ヲ得ズ再ビ岩屋ニ參詣スルコトヽハナリヌ。然ルニ函館ヘ出發ノ前夜、新谷庄吉氏及ビ自分藤兵衛兩人共霊夢ヲ感ゼリ、新谷氏余ニ語リテ曰ク「重役ノ命ニ背クト雖モ善キ様ニ取計ハン、足下尊像ヲ護持出函シテ修復セラレヨ」ト自分藤兵衛同意シテ乃チ之ヲ佛師ニ語ルニ、佛師伊勢屋仁右衛門モ亦霊夢ヲ感ジ、因テ價格ヲ論ゼズ修復シ奉レリ、當時東本願寺豐前上人下向アリ、幸ニ開眼ヲ請ウテ尊像ノ背後ニ六字號並ニ歌未來際結緣道俗成佛二世勝利等ト記サレタリ、鼓藏岩屋窟内御堂新築ノ擧アリ、因テ鶴口並ニ金燈籠堂對旅堂旗感夢圓鈴南二個奉納スルモノナリ。

奉納主　明治二十七年七月

函館　泉　藤兵衛

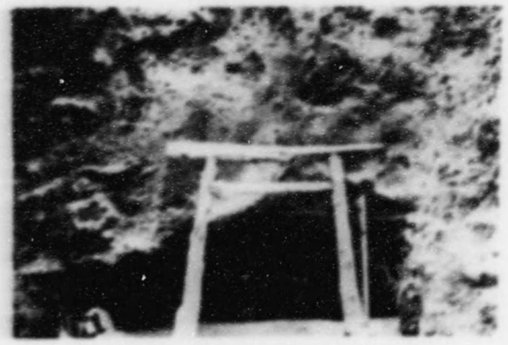
圓空傳彫記志南曰久

寛文年間美濃國伊吹山竹貫鼻乃僧圓空奈留者布里幼稚志南佛門剃入年歳二十三遊禮南富士山麓能里結庵加賀乃白山麓

從六位勲六等　野田鷹雄作

二、岩屋觀音

この觀音は、豊浦村字禮文華俗稱ホロナイケウボールの海濱地、間口四間、奥行六間、高さ二間半の洞窟内にあつて、有珠善光寺の管理に屬してゐる。大正十四年禮文華、靜狩の有志が相謀り、洞窟内に間口六尺奥行九尺のコンクリート建の御堂を建立して安置した。



第六十一圖版　岩屋觀音

寛文六年僧諦空大德が本道に渡航し、禮文華岩屋に於て大士尊像を彫刻して安置した。その後蝦國の六部が禮文華山道を通行の際大熊に逐はれ、熊道より岩屋に下り、大士尊像の背後に隱れたところ、熊は猛つて尊像の御首を引拔き去り、不思議にも六部は危難を免れたと云ふ。以後首無しの尊像と稱したが、後紅田禮文華漁場の請負人であつた泉藤兵衛が、小主典門野氏手代新谷庄吉の許しを得て、函館の佛師伊勢屋仁右衛門に、大士尊像の御首を修復せしめたのだといふ。

因に泉藤兵衛の書き記した由來は左の如くである。

謹而禮文華岩屋觀音大士尊像ノ由來ヲ尋ヌルニ今ヲ去ルコト二百九十有餘年即チ寛文年中、僧諦空大德當道ニ渡航シ、禮文華岩屋ニ於テ大士尊像ヲ彫刻シ安置セリ、後尊像霊驗不思議ナル故大士尊像ノ御首ヲ引拔キタル如キ跡アリ。故ニ數十年以來人皆御首ナシノ尊像ト稱セリ。禮文華土人古老ノ口碑ニ依ルニ昔蝦國ノ六部禮文華山道通行ノ際大熊ニ逐ハレ、熊猛リテ尊像ノ御首ヲ引拔キ去リ不思議ニモ危難ヲ免レタリト云フ、其ノ霊驗世ニ傳ヘテ土人大ニ尊信セリ、自分藤兵衛嘗テ紅田禮文華漁場請負中岩屋大士尊像ノ御首ヲ修復センコトヲ志セシガ、偶ゝ該漁場ヲ政府産物會所ヘ返納命ゼラレ、請取方トシテ少主典門野氏手代新谷庄吉外二名下リ、事件完了後自分藤兵衛ニ於テ大士尊像ノ御首修復ノ事門野主典ニ出願セルニ許可ヲ得ズ再ビ岩屋ニ返戻スルコト、ハナリヌ。然ルニ函館ヘ出發ノ前夜、新谷庄吉氏及ビ自分藤兵衛兩人共霊夢ヲ感ゼリ、新谷氏余ニ語リテ曰ク「重役ノ命ニ背クト雖モ苦キ様ニ取計ハン、是下尊像ヲ護持出函シテ修復セラレヨ」ト自分藤兵衛同意シテ乃チ之ヲ佛師ニ語ルニ、佛師伊勢屋仁右衛門モ亦霊夢ヲ感ジ、因テ信仰ヲ論ゼズ修復シ本レリ、當時東漸寺豊舟上人下向アリ、幸ニ開眼ヲ請ウテ尊像ノ背後ニ六字號並ニ盡未來際結緣道俗成佛二世勝利等ト記サレタリ、茲嚴岩屋内御堂新築ノ擧アリ、因テ鄭口並ニ金智龍壹對旗壹旗感夢謝恩函二個奉納スルモノナリ。

奉納主　明治二十七年七月　　函館　泉　藤兵衛

諦空傳編記志曰久

寛文年間美濃國伊吹山竹賀島乃僧編諦空杂曾者有早幼編志曰佛門編入甲歳二十三遍禮曰富士山編熊野結曰加賀乃白山編

從六位勲六等　野田　熊　雄作

身籠禮里一夜白山權現乃至現手受介出氏美濃國澁尻乃彌勒寺乃再建手成就先里飛彈裏山爾至里鉋一柄手携比南常爾佛
像手造里其地爾納末人其由來手尋曾母敢南竹比自我山岳爾居里南多年佛像手作里其地神手供養須登餘事手言教受夜食手
求無智所余志過々人乃食手與不智者有智母烹南食不物食請介受生爾南食不其者妻中手花押登食里其初志如來乃參詣爾有里
成後乘地化度爾有里志木島爾來里給組翻經手造登世自深山幽谷手往來志每爾鉋一抵手携比到智慮佛像手刻手鉋作登雖母
魚中非凡乃巧有里寛文年中禮文華岩屋爾至里七夜夜樂師乃神咒手唱比南鉋里二體乃觀音像手作里之手惠古捏乃岬岩屋爾
納末其一手落乃岬阿久雲内爾安置志多里寛文年中爾此乃眼夷地爾佛光手環夜多智彼世間奈乃力敢母多志登須為住也

三、板の上觀音

板の上觀音は、禮文華市街地東端に位する濱の岬、森山の小高き處に御堂を作つて安置してある。今は禮文華部落の管理に屬してゐる。

寛文年中美濃國伊吹山竹賀鼻の僧圓空が來て、禮文華岩屋に至り、七夜夜の間樂師の神呪を唱へて籠り、二體の觀音像を作つた。一體を岩屋に納め、一體を濱の岬阿久雲内に安置したと傳へられてゐる。（圓空記に據る）

明治二十三年、部落民の信仰心を養ふために、手代木榮之進、佐藤茂平等が發起して腐朽倒壞せる御堂を取除き、再建せんとした時、一本の柱に打つてある板を取外した處、表面は文字が不明で判明しないが、裏面には文化五年再建立、再建立迄には百五十五年を經過せりと記入してあつたとのことである。

四、觀音堂境内の名木

板の上觀音堂境内には、參百餘年を經過した杉が二本ある。古老の言によれば、樹齊の名僧が植付けたものといはれて居る。御外に文化五年再建立の際記念のため植ゑたと云ふ、赤松水松の兩木がある。

第六十二圖版　觀音堂境内の二本杉

五、題目石（鬼脇部鬼脇村校場跡）

登別温泉　湯澤神社境内にある。

今を去る約六百年前、日蓮上人の法弟日進上人が鎌を此の地に曳いた時、題書したるものであると傳へられる。多年雨露に晒されたものであるが、石面に水を注げば、今尚墨痕を現ふことが出來る。

ひぐま棲む蝦夷が島根に渡りきて
　みのりを說ける跡のたふとさ
はろばろと蝦夷がいでゆの草枕
　樹の間にひゞく題目の聲

第六十三圖版　題目石

母能禮里一夜白山權現乃東現手受介出氏美濃國澁尻乃彌勒寺乃再建手成就乃里殘彫製裝山爾ヤ里鉋一柄手携比由常爾佛
像手造里其地爾納米人其由來手尋曾母敢而答比自我山岳爾居里而多年佛像手拜里其地神手供養須登餘事手言敢受夜食手
求無曾所奈志遊々人乃食手與不曾者有曾母苦而食不物食請介受生爾而食不其書盡中手花押登世里其初志如來乃參詣爾有里
或波乘地化度爾有里志木島爾來里給組盤經手苦登世自深山幽谷手往來志同詮一組手携比到曾島佛像手刻手鉋作登雖母
魚中非凡乃巧有里寛文年中禮文華岩屋爾至里七晝夜柴飾乃神咒手唱比而蓮里二體乃觀音像手作里之手慈吉拜乃師岩屋爾
納米其一手濱乃岬阿久雲内爾安置志奈里寛文年中爾此乃狼夷地爾佛光手導食多曾波曾世雲乃力最母多志登須遺食也

三、坂の上觀音

坂の上觀音は、禮文華市街地東端に位する濱の岬、森山の小高き處に御堂を作つて安置してある。今は禮文華部落の管理に屬してゐる。

寛文年中美濃國伊吹山竹賀鼻の僧圓空が來て、禮文華岩屋に宿り、七晝夜の間柴飾の神呪を唱へて籠り、二體の觀音像を作つた。一體を岩屋に納め、一體を濱の岬阿久雲内に安置したと傳へられてゐる。（圓空記に據る）

明治二十三年、部落民の信仰心を養ふために、手代木榮之進、佐藤茂平等が發起して腐朽倒壞せる御堂を取除き、再建せんとした時、一本の柱に打つてある板を取外した處、表面は文字が不明で判明しないが、裏面には文化五年再建立、再建立迄には百五十五年を經過せりと記入してあつたとのことである。

四、觀音堂境内の名木

坂の上觀音堂境内には、參百餘年を經過した杉が二本ある。古老の言によれば、麗國の名僧が植付けたものといはれて居る。尙外に文化五年再建立の際記念のため植えたと云ふ、赤松水松の兩木がある。

第六十二圖版　觀音堂境内の二本杉

五、題目石（鬼脇郡鬼脇村松原）

登別温泉　湯澤神社境内にある。

今を去る約六百年前、日蓮上人の法弟日德十人が錫を此の地に曳いた時、題書したるものであると傳へられる。多年雨露に晒されたものであるが、石面に水を注げば、今尚墨痕を現ふことが出来る。

ひぐま棲む蝦夷が島根に渡りきて
　みのりを說ける跡のたふとさ
はろばろと蝦夷がいでゆの草枕
　樹の間にひぐく題目の聲

第六十三圖版　題目石

日高支廳

幌泉村（幌泉郡幌泉村役場調）

一、懸巖大菩薩の由來

エリモはアイヌ語であつて鼠と訳し、懸巖岬は一名わづみ岬と稱する。この附近は、音岬一帶に棲息してゐた多數の白鼠より成るものであると、傳へられて居る。天明年間稍街路の便が開け、屢々内地人が渡航し、漁業に從事するに至つた頃、岬に居住してゐた、アイヌ人エリモミーランドといふものが、偶ゝ暗礁地帶を老鼠に跨つて、飛魚のやうに渉破する十一面大菩薩の御姿を拜し、一堂を設し たところが、その後再三ならず不可思議な示現があつた。或日我が家舊近の岩礁の上に、御尊像の漂着して居るのを發見して大いに喜び、御堂を設けて熱心に信仰してゐた。以來その岩を神威岩と稱して往遠を張り、所謂聖所として子孫のエリモシローに及んだ。文化年中シロー十五歳の時、一商船がエリモ沖合で遭難と時化に遭遇し、眞鶴嵐きて懸巖樣に祈願したところが、十一面菩薩が現れ、穏な

第六十四圖版　懸巖神社

く海上靜穏となつて、難破を免れたと云はれる。文化十一年になつて渡島の人、島屋佐兵衛といふものが懸巖神社を建立し、幕末時代より明治の初年にかけて、懸巖の海を航行する船舶は懸巖樣に合掌し、船中安全無難漁業自在自體健康つて御告げを受けるに的中しない事はないと言はれてゐる。今も御尊像を奉安し、靈驗顯るあらたかであつて吉凶、待ち人、失ひ物等、おみくじによ

二、一石一字塔

懸巖岬を廻つて、海濱を稍ゝ東北に進むと、有名な百人濱がある。附近に無名の沼があつてその沼邊に、一石一字塔なる碑石がある。之を百人濱の碑と稱する。昔南部藩の御用船が懸巖沖合で難破し、辛うじて蛇に上陸したが食物もなく、百餘人のものは空しく餓死したと傳へられる。後世の人が之を悼んで文化三年、追善供養のためこの碑を建設したものであると云はれる。

三、鹿野の櫻花

幌泉村大字鹿野村市街丘陵地帶の山櫻は、實に數種三千數百本、天然樹として道内隨一の稱がある。例年五月十三日頃より二十日頃迄が滿開時期であつて、其の眺め絶佳である。難に珍らしい夫婦櫻、屏櫻等は、頗る奇觀を呈し、何人も稱讃せざるものはない。

この地の櫻は、全山悉く天然樹たる所に特色を有するのであるが、櫻に關する文獻は何もなく、繁殖の經路も明確でない、只地方の口碑によれば夫婦櫻の種子が落ちて、隨所に發芽成育したのであると言はれる。だが此の夫婦櫻の其の源に關しては誰も知るものはない。

日高支廳

幌泉村（幌泉郡幌泉村役場調）

一、襟裳大菩薩の由來

エリモはアイヌ語であつて鼠と譯し、襟裳岬は一名わづみ岬と稱する。この語原は、昔岬一帶に棲息してゐた多數の白鼠より成るものであると、傳へられて居る。天明年間稍舟路の便が開け、屢々内地人が渡航し、漁業に從事するに至つた頃、岬に居住してゐた、アイヌ人エリモミーランドといふものが、偶ゝ暗礁地帶を老鼠に跨つて、飛魚のやうに渉破する十一面大菩薩の御姿を拜し、一意尊崇したところが、その後再三ならず不可思議な示現があつた。或日我が家貧近の岩礁の上に、御尊像の漂着して居るのを發見して大いに喜び、御堂を設けて熱心に信仰してゐた。以來その岩を神威岩と稱して注連を張り、所謂聖所として子孫のエリモシローに及んだ。文化年中シロー十五歳の時、一商船がエリモ沖合で遭難と時化に遭遇し、萬策盡きて襟裳様に祈願したところが、十一面菩薩が現れ、程なく海上靜穩となつて、難破を免れたと云はれる。文化十一年になつて渡島の人、島屋佐兵衛といふものが襟裳神社を建立し、幕末時代より明治の初年にかけて、襟裳の海を航行する船舶は襟裳様に合掌し、船中安全無事漁業自在自體健康を祈願したと云はれて居る。今も御尊像を奉安し、盥驗頗るあらたかであつて吉凶、待ち人、失ひ物等、おみくじによつて御告げを受けるに的中しない事はないと言はれてゐる。

第六十四圖版　襟裳神社

二、一石一字塔

襟裳岬を廻つて、海濱を稍ゝ東北に進むと、有名な百人濱がある。附近に無名の沼があつてその沼邊に、一石一字塔なる碑石がある。之を百人濱の碑と稱する。昔南部藩の御用船が襟裳沖合で難破し、辛うじて鼓に上陸したが食物もなく、百餘人のものは空しく餓死したと傳へられる。後世の人が之を悼んで文化三年、追善供養のためこの碑を建設したものであると云はれる。

三、座野の櫻花

幌泉村大字座野村市街丘陵地帶の山櫻は、實に數種三千數百本、天然樹として道内隨一の稱がある。例年五月十三日頃より二十日頃迄が滿開時期であつて、其の眺め絶住である。殊に珍らしい夫婦櫻、扇櫻等は、頗る奇觀を呈し、何人も稱讃せざるものはない。

この地の櫻は、全山悉く天然樹たる所に特色を有するのであるが、櫻に關する文献は何もなく、繁殖の經路も明確でない、只地方の口碑によれば夫婦櫻の種子が落ちて、陽所に發芽成育したのであると言はれる。だが此の夫婦櫻の其の源に關しては誰も知るものはない。

四、豐似湖の碑

豐似湖は座野猿留間の、豐似峠の山腹にある。寛政十年幕吏近藤重藏が、從者六十餘人を率ゐて國後擇捉よりの歸途、廣尾幌泉間の新道開鑿のため踏査中、從者の一人が乘馬諸共過つて、斷崖から轉落して豐似湖附近で慘死したのを悼み、後人が追善のため湖邊に塔を建立したのである。其の後慶應元年藤島屋佐治兵衛の支配人紋藏なる者の手によつて、美津山大神を合祀したと傳へられる。

幕末十五圖版　豐似湖

靜内町（靜内郡靜内町役場調）

五、日高國名の話

昔アイヌ人が地名を決定する場合には、各部落の重立つた者の衆議によると傳へられる。日高なる地名は、明治初年和人の名付けたものであつて、アイヌ語では「チエプカロタン」と稱し、「日當りの好き里」の意味であるとのことである。

六、靜内町内各部落の字名

（註）以下地名に括弧を附したるは土語を示す

農屋（ノヤシヤラ）

全部落は遠が花々として生ひ繁りたるため、名付けたとのこと。

御園（エチプエ）

昔此の部落に女神があつて、此の里を開いたと傳へられて居る。

豐畑（ルベスベ）

山頂を傳はつて澤となり、此の里に通ずる道路があつた。

幕別（マクンベツ）

此の里の後方に大川（今の榮進川）があつたといはれて居る。

田原（トウブツ）

昔、此の里に大沼があり、大蛇が棲息してゐた。或時此の部落の開拓者である土人原島某が、同族數名と共に十勝方面より移住したが、當時は沼澤が多く蛇類の跳梁が甚だしかつたため、沼岸に近く神座を設け、七日七晩祈禱の結果、その効驗が現れて大蛇は遂に姿を消したと傳へられて居る。

尙此の大沼に、昔大鹿及び幼兒を背負つた婦人が入水したが、遂に屍體は發見に至らず、色々捜査を願けた結果、此の地より遙か南方約二里も距れた、郡境シンヌフ海岸に漂着せるを發見した。そこで此の沼の淵は、太平洋に通じてゐると人々は言ひ傳へて居る。

目名（メナ）

大川より分岐した小川の澤に、里があつたために名付けられた。

四、豐似湖の碑

豐似湖は庶野猿留間の、豐似嶽の山腹にある。寛政十年幕吏近藤重藏が、從者六十餘人を率ゐて國後擇捉よりの歸途、廣尾幌泉間の新道開鑿のため踏査中、從者の一人が乘馬諸共邊つて、路崖から轉落して豐似湖附近で慘死したのを悼み、後人が追善のため湖邊に塔を建立したのである。其の後慶應元年福島屋佐治兵衛の支配人紋藏なる者の手によつて、美津山大神を合祀したと傳へられる。

靜内町（靜内郡靜内町役場調）

五、日高語名の話

昔アイヌ人が地名を決定する場合には、各部落の重立つた者の衆議によると傳へられる。日高なる地名は、明治初年和人の名付けたものであつて、アイヌ語では「チェプカコタン」と稱し、「日當りの好き里」の意味であるとのことである。

第六十五圖版　豐似湖

六、靜内町内各部落の字名

（註）以下地名に括弧を附したるは土語を示す

農屋（ノヤシヤラ）

全部落は蕊が花々として生ひ繁りたるため、名付けたとのこと。

御園（エチブェ）

昔此の部落に女神があつて、此の里を開いたと傳へられて居る。

豐畑（ルベスベ）

山頂を傳はつて澤となり、此の里に通ずる道路があつた。

幕別（マタンベツ）

此の里の後方に大川（今の榮町川）があつたといはれて居る。

田原（トウブツ）

昔、此の里に大沼があり、大蛇が棲息してゐた。或時此の部落の開拓者である土人屋島某が、同族數名と共に十勝方面より移住したが、當時は沼澤が多く蛇類の跳梁が甚だしかつたため、沼岸に近く神座を設け、七日七晩祈禱の結果、その効驗が現れて大蛇は遂に姿を消したと傳へられて居る。

尙此の大沼に、昔大蟒及び幼兒を背負つた婦人が入水したが、遂に屍體は發見に至らず、色々捜査を續けた結果、此の地より遙か南方約二里も離れた、郡境シンヌフ海岸に漂着せるを發見した。そこで此の沼の名は、太平洋に通じてゐると人々は言ひ傳へて居る。

目名（メナ）

大川より分岐した小川の澤に、里があつたために名付けられた。

神森（サチウンコタン）

昔染退川の沿岸に大海嘯が襲來したが、此の里のみは天帝の惠によつて、浸水の被害がなかつたと云ふ。

靜内市街地（ホマルセイ）

大分昔のこと、惡性の傳染病が、流行つたが、幸ひ此の里だけは一人の患者も出なかつた。それは一に氣候風土と、住民の溫和であるのに依ると言はれて居る。

入舟町（ヌプリヤ）

起伏せる山岳海岸に突出して、其の麓に人里があつたとのこと。

舞歌（マウタサウプ）

昔此の地を通過した一旅人が、不圓高い丘を飛鳥の如く馳驅し來れる古老に出遇つたので、行手を尋ねた處が、今和人と同族（アイヌ人）との交驩を傳へ聞き、我が同族救援のために、馳せつけるのであると叫び、遂に其の姿を沒したといふ。

門別（モベツ）

昔惡性の傳染病が流行したが、幸ひ此の里のみは一名の患者も發生しなかつた。それは偏に氣候風土の良好なのと住民の溫和なのに依るものであると傳へられて居る。

うせない（ウセナイ）

昔此の地に惡疫が流行して、同族の死滅するものが頗る多かつたといふ。

ろくまつぶ（ルセコマウプ）

鶴の澤「うせない」に惡疫が流行した際、此の里にも惡疫神の足跡が印せられたが、唯單に通過せるに止まつて、惡疫はなかつたと言ひ傳へて居る。

おしよむすべ（オショムスベ）

此の里を貫流する無名川の川尻附近には、常に赤き油の樣な、水の湧く沼があつたといふ。

西川（サメ）

大昔海嘯があり、此の里に鮫が漂着した爲につけられた。

元靜内（スツネー）

スツネーの土語の意味を尋ねたが全く不明である。靜内なる地名の語原は、スツネーから生れたものであらう。

春立（ラシュツベ）

此の部落に細長い小澤があり、之を中心として土人が居住して居る。此の小澤は恰も鰐の油（製造しない生なもの）の半分にも及ばぬ、細長いといふ意味である。

東別（ブシ）

昔、此の里を流れて居る布辻川の下流に、河童が棲んでゐて、川を渡る旅人に危害を加へた。そして河童が出沒する時には、必ず奇音を發したので、其の地名としたといふことである。

一說に布辻川は他の川と異り、多期凍結することが早く、凍結期になると氷が音響を發するところからして、地名

としたとも傳へられてゐる。

布仕澤（キクスウナイ）

笠のまばらに生えて居たのに因んで、地名としたといはれる。

染退（シビチヤリ）

昔、此の部落一帶の地名を、ホマルセイと稱した。その當時膽振方面の深山に、ラフコと稱する女神があつて、膽振地方を治めて居たが、住民が惡化したため、女神は遂に其の姿を鳥と化して、此の地に飛び來り暫し休んだ時、其の羽搏きの羽音が「シビチヤリ、シビチヤリ、シビチヤリ」と聞えたので、ホマルセイをシビチヤリと改めたと傳へられる。

七、染退地方の大海嘯

昔或る快く晴れた朝、突然降雹があつた。住民は訝しんで掌に受けて、その雹塊を眺めてみた處が、鹹味が強く、更に染退川の畔に立つて川面を眺めると、寂然として怡も死せるが如くであつた。そして魚も鳥も共に姿を消して一向に見えず、住民一同は異樣な無氣味さと不安とに襲はれた。やがて何氣なく遙かの河口を望むと、沖合には黑雲が深く垂れ、波濤が白く泡立つてゐるのに氣付いたので、實被海嘯の襲來と叫んで人々は一齊に避難を急いだ。この時サチウンコタン（現在の字神森川の附近）に住んでゐた古老達は、「海嘯の神は、濁酒の船を我の外棄ふから、若し天災の場合には心得置くべし」と、先祖から傳へられて居つたことを想ひ出し、後に神祭を設けて「カムイ祭り」を執行し、メノコ等に部落の周圍に濁酒の船を流かせ、心を籠めて神樣に祈願した處が、不思議なるかな、染退川下流から襲來した海嘯は、此の部落に近付づくや、左右に岐れて奥地を蹂躪し、此の黑のみは海嘯の惨禍を免れることが出來た。そして染退川の上流を駆つた海嘯は、猛威を振つてメナシベフ川に至つたと傳へられて居る。

現在節内市街地を距る、東北約七里の染退川支流メナシベフ川流域には、イタオラキ（海抜七百米）とイフケウナイといふ地名が存して居る。當時の海嘯で千石船がイタオラキの地で難破して、その破片を殘し、イフケウナイの山には船の骸骨が留まつたので、それを地名としたといはれて居る。

八、染退川の話

昔、染退川支流のメナシベフ川水源の深山に大鹿が棲んでゐた。此の地點は十勝の國境と昇ひする所であるが、或時十勝側の獵師が、大鹿を捕獲するため尾札内から登攀し、染退アイヌは、メナシベフ川を遡つて町度國境で出會つた。そこで双方協力して、この稀有の大鹿を捕殺したが、餘り巨大であつて運搬に困難し、止むなく兩者が立會つて國境の山の頂で、大鹿を胴切りとし半分は十勝國尾札内澤に、半分は染退川上流の澤に切落した。ところが、染退川上流の澤に切落した鹿の屍は、體が巨大なために澤口を塞ぎ、下流一帶の水を淀らしてしまひ、屍體から流れる血潮は、河水を眞赤に染めてしまつた。これがため此の澤附近をサチシビチヤリと名付けたと傳へられる。

後世この川を染退川と命名したのも、亦これに依ると云はれて居る。

九、染退金山の傳說

染退川上流の金山の所在は、今から約三代程前の古老時代に口止めとなつて、現存せるアイヌ人でこれを知る者はなくなつてしまつた。昔、和人が多數此の地に入り込み、年代ははつきり分らないが、節内新冠兩郡の境シンヌフより、

染退川の支流シュンベツ川の上流アブラサンベに至る道を傳はつて、金山道路の開鑿のため、約七十ケ年を費したといはれて居る。染退川は昔から河の水が清冽で、或時古老が石狩の千歳川に行つて小砂を拾つて來て、この川に投げた處が、それから毎年鮭が遡上する樣になつた。その後和人が入込んで採金が盛んとなつたために、河水が汚濁して鮭は遡上しなくなり、下流では飲料水にすら不便を感じ、アイヌ人の生活は極度に脅かされるに至つた。そこで古老達が衆議の結果、遂に金山の所在は和人は勿論、同族子孫に對しても一切口外せざることを、堅く誓つてしまつたとのことである。現在染退金山に絡はる、次の樣な哀話が傳へられてゐる。

金山が殷盛を極めてゐた頃、他所から屋はれて來た喜平といふ和人の炊夫があつた。或日味噌汁に珍しい山菜を入れて、鑛夫達に供したところ、一同俄に苦悶しはじめ、死者續出したので、喜平は大いに驚き、悲報を里人に告げんと小屋を急ぎ下つたが、途中自責の餘り、路傍で自決してしまつた。今その自刄せる地點をキヘイナイ（喜平の澤）と稱してゐる。當時の山菜は毒草ブシのことで、鑛夫其の他の者一同は、全滅したものであらうと傳へられて居る。

一〇、染退酋長シヤクシヤイン

シヤクシヤインのことを現住せるアイヌ人に就いて、尋ねたところに依ると三つの說がある。一はシヤクシヤインの實在を否定するもの、一は勝氣に剛勇の酋長があつて土着のアイヌ人を壓迫し、暴力を揮つたので、衆くの人々より蛇蝎視せられた。そして彼は十勝より移住したもので、染退アイヌではなく、惡者であるといふのである。

一はシヤクシヤインの末裔なりと稱する、一族が現存して居ると云ふ說である。卽ち寛文年間松前藩と激戰し、一族殆んど殺戮せられ、遺族に對する松前藩の詮議が嚴しく、過去三百餘年間に亘り、シヤクシヤインの後裔なることを、堅く秘して今日に至つたといふのである。アイヌの口傳蒐集のため某氏が、それらの一族を訪問した際、傍邊に一老女があつて、古老の語るシヤクシヤインの話に耳を傾けつゝあつたが、偶々一族の末裔なることを發表するや、愕然として古老を制し、古來嚴く秘めた一族の身分を他人に口外し、災を一族に及ぼしては大變であると、頗る悲痛な面持をした實例があつたといふことである。一族の語る處に依れば、シヤクシヤインは十勝國クンネベツ（黑い川の意味、土着アイヌ人の話によれば、黑い川とは腹黑い人々の住める處、所謂惡者等の住める部落とも解釋される）より此の地に移住し、三人兄弟であつて、長兄をシヤムクスアイヌ（後世シヤクシヤインと稱す）、次弟を「トングスリ」、末弟をトンギヤマと稱した。シヤクシヤインは體軀瓦大容貌傑偉であつて、走ること飛鳥の如く、染退より登別までを一日で往復したと傳へられる。シヤクシヤインの居住せる砦の址は不明であるが、次弟トングスリは現在の不動坂の上の砦に、末弟トンギヤマは、入舟町金比羅神社の上の砦址に居たといふことである。

當時樣似の方面より美較の妖婦オワケニなるものが、松前藩の間諜となつて管内アイヌの豪族を訪れ、容色を餌に巧みに同族の內情を偵察して、其の動勢を松前藩に通報してゐたが、遂に染退に入り來つて、シヤクシヤイン一族の動靜を探逐して密告し、松前藩との交戰の誘因をなした。

松前軍は染退に進入して城砦に攻め寄せた。この時、次弟トングスリは、砦の物見臺より押寄せ來る松前軍勢を見て、其の猛威に敵し難きを悟り、一子ニスオタテと稱する嬰兒を抱いて納屋に至り、糞掃き用の臼を伏せて其の中に匿ひ、長兄シヤクシヤイン、末弟トンギヤマに危急を傳へ、城砦の斷崖から染退川目掛けて跳び込んだ。シヤクシヤインは身に着けてゐた、鹿の皮のカワコロ（胴服の如きもの）を水中に潛つて脫いだ。染退川の畔に進軍した松前勢は、水面に

鹿の皮のカワコロが突如現れたのを見るや、一斉射撃をした。其の隙に、シヤタシヤインは染退川を潜つて海中に出で、靜内新冠兩郡の界「シンヌワ」附近の海岸に泳ぎ上つて巧に逃走した。次弟トングスリは、不幸にも松前軍のために捕へられ、シンヌワ附近に於て竹の鋸を以て惨殺せられた。シヤタシヤインとトンギヤマの二人の消息は、全く不明であつた。

松前軍は猶なく染退城砦を捜査したが、一族は既に遁走して人影は全然なかつた。納屋に至り納戸の白の伏せてあるのを目撃はしたが、嬰兒が其の内にかくしてあるのには氣が付かないで退去した。其の後一族の者が嬰兒を救ひ出して養育した。現在シヤタシヤインの末裔と稱するものは、御ちとの＝スオタチ（土語＝スとは白の鋼なり）の子孫であると傳へられて居る。

一一、アイヌ創世の話

日高アイヌは大昔神様が、アイヌ＝シリ（アイヌ人種）を造るために、男女二神を天より二組下し給ひ、一組は東北地方にて、一組は北海道にて夫れ〳〵アイヌ＝シリを、創造したと云ひ傳へてゐる。

十勝支廳

芽室村（河西郡芽室村役場調）

一、シユプサラ砦址

シユプサラチヤシは、芽室村大字西士狩村にあつて、今にその原形を遺し、本道屈指の砦址と稱せられて居る。このチヤシは、シユプサラ原野の南方を流るゝ十勝川から、北方約二十町を隔てたる丘陵の一端を占め、眼下には龜崎長蛇の如き十勝川の清流を望み、遙かに十勝平原を一眸の中に收め、展望頗る開闊なる好位置を占めて居る。

チヤシの一方は空壕で、他は中段を繞らし、別に左り前方に分派する空壕がある。此の面積約三百八十坪で、標高は三百十八尺である。地方の土人が傳へて曰ふには、此の砦は十勝の砦中最も堅牢であつて、いかなる强敵と雖も、曾て破ることは出來なかつたと。又曰く、この砦の上から高く號呼すると、その聲は遙かに隔つて居る旅來の砦に達すると。開よりこのチヤシは昔蝦夷が、自己の要害のために設けたものであつて、敵の攻め寄せて來るや、この所に立て籠つて防禦したものであることは言ふまでもない。然し乍ら何時の時代に築造し、また使用されたかは、何等の記錄をも有しない民族のことであるから、知るべき由もない。たゞ纔に附近から發見される石鏃、石斧、石槍、石劍等によつて按ずるに、石器時代に築造せられたことは明らかであつて、當時强豪無比を誇る十勝アイヌが、如何に勇敢に奮鬪したかを想

像し得るに過ぎないのである。

上士幌村（河東郡上士幌村役場調）

二、上士幌村名の由來

昔の十勝は、鬱蒼たる大森林を以て蔽はれ、山に川に野に自由に食物を得られたので、各地に小さい部落があつた。そしてこの小部落には、部落を囲ふ山窩に似た土人語でいふイワカートウミー（切取り強人する無頼の徒の群）が、跋扈したものである。その一群が偶々現在の士幌村佐倉農場附近に、本據をもとめたことがある。然るにこの年は魚族が少く土豆等に乏しく、幾日かの遠征に獲物の無い彼等は、遂に飢に苦しまねばならなかつた。而して遂には唯死を俟つのみとなつた。死なば諸共と許り、最後の決議は即ちシュウオロー、シュウオローと異口同音に呼んで、容るゝものなき鍋を川の中に投棄てたのである。シュウオローとは鍋を水に入れる意である。それから此の川をシュウオローと呼ぶに至り、後には附近一帯をも呼ぶ様になつた。それが更に後世轉訛してシホロとなつた。飢に死なねばならぬ彼等は流石に悲しかつた。そしてオルペレレー（泣く聲）と聲をあげて泣いた。その聲は千古の密林をゆるがす許りであつた。これが即ちオルペ（居邊）の起源である。

三、クワーカヌ

十勝川本流の川口に近い、アイヰヨウ部落の酋長に三人の男の子があつた。彼等の間には常に鬪爭が絶えなかつた。不平と不滿の日を經つて居た末弟は、或る日翻然考へる所があり、一振のマキリ（小刀）を腰に、クワー（杖）を手にして十勝川を北へ北へと歩を續けて、本別の奥ピリベツのニセイに辿り着いた。そしてそこの城砦の主となつた。間もなく生まれた子は不思議にも、持つて來たクワーの頭に印せられた割印と符合するものであつた。依つて其の名をクワーカヌと名付けたが、その子は額に一本の金の角があつたのでカラフウンクル、その子のポネラウンクルは、骨の角があつたので夫れをそのまゝ名前とした。而もポネラは當の申し子であると言はれ、その子や孫は孰れも雷鳴の日に生まれたと傳へられる。

四、パラトー

現在の上士幌村アイヌ住居地は、昔パラトー（澄水沼）でカモキの住居とせられて居た。カモキの住居ならば必ず吾々を護つてくれるに違ひない。どうせ貧乏するならカモキの居る所とばかり、ナイタイから彼等が餘々との地へ移つたのは、凡そ百五十年程前と傳へられて居る。勿論現在の地は乾燥してゐて立派な農耕地である。

前述のポネラウンクルは、赤兒の頃背負はるゝ時には、いつでも和人から貰つた黄金の鞘のある刀を、後手にしてお尻を支へられたが、それに小便をかけたので、彼の子孫は常に貧乏から逃れられない、運命になつて居ると云はれてゐる。

五、イツシナウシ

上士幌市街より昔更川を廻ること約二里半、鞆圓形の巒が中央を切割つた如く、南岸に

第六十六圖版　パラトーアイヌ部落

上士幌村

像し得るに過ぎないのである。

上士幌村（河東郡上士幌村役場調）

二、上士幌村名の由來

昔の十勝は、鬱蒼たる大森林を以て蔽はれ、山に川に野に自由に食物を得られたので、各地に小さい聚があつた。そしてこの小聚には、部落を囲ふ山窩に似た土人語でいふイワカートウミー（切取り盜人する無頼の徒の群）が、跋扈したものである。その一群が偶々現在の士幌村佐倉農場附近に、本輩をもとめたことがある。然るにこの年は魚族が少く土豆等に乏しく、幾日かの遠征に獲物の無い彼等は、遂に飢に苦しまねばならなかつた。而して遂には唯死を俟つのみとなつた。死なば諸共と許り、最後の決議は即ちシュウオロー、シュウオローと異口同音に呼んで、容るゝものなき譏を川の中に投棄てたのである。シュウオローとは譏を水に入れる意である。それから此の川をシュウオローと呼ぶにが り、後には附近一帯をも呼ぶ様になつた。それが更に後世轉訛してシホロとなつた。飢に死なねばならぬ彼等は流石に悲しかつた。そしてオルベレレー（泣く聲）と聲をあげて泣いた。その聲は千古の密林をゆるがす許りであつた。これが即ちオルベ（居邊）の起源である。

三、クワーカヌ

十勝川本流の川口に近い、アイヰヨウ部落の酋長に三人の男の子があつた。彼等の間には常に闘爭が絶えなかつた。不

平と不滿の日を送つて居た末弟は、或る日憤然考へる所があり、一振のマキリ（小刀）を腰に、クワー（杖）を手にして十勝川を北へ北へと歩を積けて、本別の奥ピリベツのニセイに辿り着いた。そしてここの城砦の主となつた。間もなく生まれた子は不思議にも、持つて來たクワーの頭に印せられた刺印と符合するものであつた。依つて其の名をクワーカヌと名付けたが、その子は額に一本の金の角があつたのでカラウンクル、その子のポネラウンクルは、骨の角があつたので夫れをそのまゝ名前とした。而もポネラは雷の申し子であると言はれ、その子や孫は悉れも雷鳴の日に生まれたと傳へられる。

四、パラトー

現在の上士幌村アイヌ住居地は、昔パラトー（游水沼）でカモヤの住居とせられて居た。カモヤの住居ならば必ず吾々を護つてくれるに違ひない。どうせ貧乏するならカモヤの居る所とばかり、ナイタイから彼等が悉々この地へ移つたのは、凡そ百五十年程前である。

と傳へられて居る。勿論現在の地は乾燥してゐて立派な農耕地である。

前述のポネラウンクルは、赤兒の頃背負はるゝ時には、いつでも和人から貰つた黄金の粉のある刀を、後手にしてお尻を支へられたが、それに小便をかけたので、彼の子孫は常に貧乏から逃れられない、運命になつて居ると云はれてゐる。

五、イツシナウシ

上士幌市街より音更川を遡ること約二里半、稍圓形の嶺が中央を切割つた如く、南岸に

第六十六圖版　パラトーマイアー部落

第六十七圖版　イワレナウシの岩

相距つて、その間に幽邃なる深淵の境がある。之をイワシナウシといふ。更にそれに續いて彎曲した巖がある。之はアイヌ創造の神サマイクルカムヰが、或る時忽然と來て大きな岩に腰をおろし、暫し、休憩しながら薬の實樣のものを焚火で燒いて居つたが、突然はねたのでカムヰは驚いて飛び上り、その拍子に巖が割れたのだといふ。同時に大きなイワシナ（嶮）が出たが、その息の爲に大きなウツロが出來たのであると云はれる。

廣尾村（廣尾郡廣尾村役場調）

六、陣屋跡

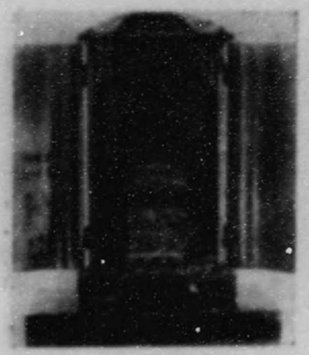
十勝場所が安政六年仙臺藩の領地となるや、目付代官勘定方等が人夫を伴ひ來つて、丸山の麓に陣屋を構へ、農家、大工、木挽等を移住させ、しめ殺菜其の他の試作をなさしめた。之等の家屋は總て土蔵の中に、建築したものであると云ふ。そして當時陣屋としての建物は、五間に拾間位の草葺であつたことが、口碑に傳へられてゐるが、今は唯僅かに土蔵を存するのみである。

七、會所跡

寛政の頃から十勝國全部をトカチ場所と稱し、會所を廣尾に置いて支配人に納

第六十八圖版　陣屋跡

第六十九圖版　禪林寺



第七十圖版　禪林寺の観音像

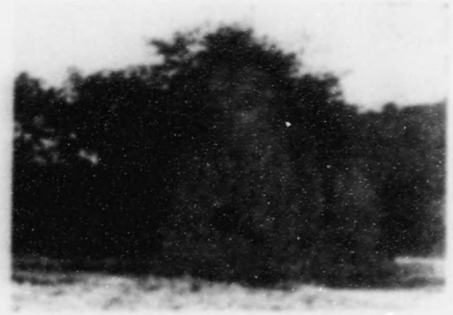
稅や、宿泊等の取扱を爲さしめたと謂ふことである。當地の會所は、現在の廣尾市街會所通八番地であつて、會所としての建物は、奥行七間半間口三十七間の建造物で、支配人より漁夫に至るまで、皆此處に宿泊したものだと云はれる。此の建物は明治三十三年頃迄尚殘つて居たと云ふが、現在は何等の跡も遺つてゐない。たゞ當時會所の裏庭に在つたといふ老オンコだけは、昭和七年まで現存したが個人の私有物であるため、遂に他に賣却せられてしまつた。

八、寶物觀音像

この觀音像は寛文六年六月、當地を領してゐた松前藩の家老蠣崎藏人が、祈願のため十勝神社に奉安したものである。その後明治維新の際神佛混淆の禁令に觸れて、改めて木村禪林寺に安置することゝなつて、現在に及んだと云はれてゐる。

九、道路開鑿の記

寛政十年幕吏近藤重藏は、江戸勘軍使として東蝦夷地を巡視し、擇捉島に渡つた歸途廣尾に立寄つた。會ゝ風雨に阻まれて、廣尾幌泉間の海岸を通行する事が出來ず、滯留數日に及んだ。そこで重藏は地方のために新に山道を開かんと欲し、通詞及び東夷と相談し、從者下野源助（本名木村謙次）等をして之を指揮させ、十勝場所「ルベ



第六十七圖版　アイヌイウシナウシの岩

相距つて、その間に廣濶なる深淵の境がある。之をイウシナウシといふ。更にそれに續いて彎曲した巖がある。之はアイヌ創造の神サマイクルカムヤが、或る時忽然と來て大きな岩に腰をおろし、暫し、休息しながら薬の宮様のものを焚火で焼いて居つたが、突然はねたのでカムヤは驚いて飛び上り、その拍子に巖が割れたのだといふ。同時に大きなイワシナ（嵯）が出たが、その足の爲に大きなウワロが出來たのであると云はれる。

廣尾村

（廣尾郡廣尾村役場調）

六、陣屋跡

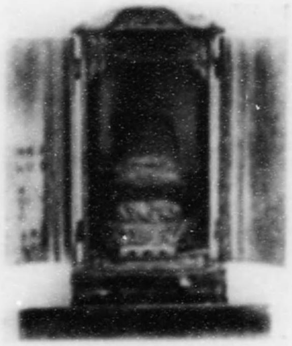
十勝場所が安政六年仙臺藩の領地となるや、目付代官勘定方等が人夫を伴ひ來つて、丸山の麓に陣屋を構へ、農家、大工、木挽等を移住させ、しめ殺茶其の他の試作をなさしめた。之等の家屋は總て土蔵の中に、穀類したものであると云ふ。そして當時陣屋としての建物は、五間に拾間位の草葺であつたことが、口碑に傳へられてゐるが、今は唯僅かに土蔵を存するのみである。

七、會所跡

寛政の頃から十勝國全部をトカチ場所と稱し、會所を廣尾に置いて支配人に納

第六十八圖版　陣屋跡

第六十九圖版　禪林寺



第七十圖版　禪林寺の觀音像

授や、宿泊等の取扱を爲さしめたと謂ふことである。當地の會所は、現在の廣尾市街會所通八番地であつて、會所としての建物は、奥行七間半間口三十七間の建造物で、支配人より漁夫に至るまで、皆此處に宿泊したものだと云はれる。此の建物は明治三十三年頃迄倒壊つて居たと云ふが、現在は何等の跡も遺つてゐない。たゞ當時會所の裏庭に在つたといふ老オンコだけは、昭和七年まで現存したが個人の私有物であるため、遂に他に賣却せられてしまつた。

八、實物觀音像

この觀音像は寛文六年六月、當地を領してゐた松前藩の家老蠣崎蔵人が、祈願のため十勝神社に奉安したものである。その後明治維新の際神佛混淆の禁令に觸れて、改めて本村禪林寺に安置することゝなつて、現在に及んだと云はれてゐる。

九、道路開鑿の記

寛政十年幕吏近藤重蔵は、江戸勘幹使として東蝦夷地を巡視し、擇捉島に渡つた歸途廣尾に立寄つた。會〻風雨に阻まれて、廣尾幌泉間の海岸を通行する事が出來ず、滯留數日に及んだ。そこで重蔵は地方のために新に山道を開かんと欲し、通詞及び東喜と相談し、從者下野源助（本名木村謙次）等をして之を指揮させ、十勝場所「ルベ

シベツ」より「ピタタヌンケ」に至る山道約三里餘を開墾し、之が記を下野源助が銘して板に書き記し、十勝神社に奉納した。

東蝦道路開墾記碑文

蝦夷東北之徼自射庭兒至尾劃涉海岸之險若納筑子毘内峰巖絶壁登降趾起蟹步蟻躡攀附猿攀誤失一步則非粉骨必魚腹夷族死此險間亦有之江戸幕軒使近藤君一徑此險有意新開道於山後恵登呂府安歸之日風雨驚道路窓濤湧飯日於是慨然發憤與通詞某及夷族商議出資散財自留邊志別溯水至神芝留按針南沿流而下出御田奴月登降凡三里西近伐木架橋爲梯石投谷爲梯行路初免跋渉無危人夷賴之是所以江戸餘澤被及夷族而爲近藤君思人思夷之陰德也余與其事記姓名揭刀勝神祠

大日本寛政十年戊午十一月朔庚申（昭和十年ヨリ百三十八年前）

江戸幕軒使近藤君重蔵

從者　下野源助銘（本名　木村謙次）

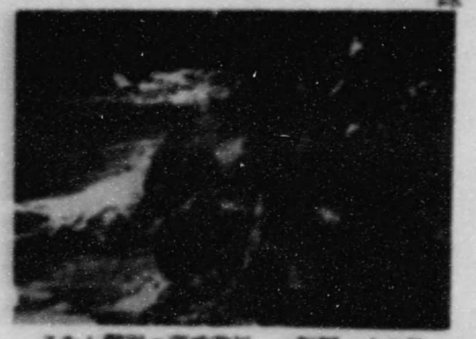
金平

通詞　豊吉

孫　七

夷族六十八人

近藤守重東蝦新道記（蝦夷奴久夢字雲像語不可讀戊士三西貞藤正豊西正文等敬力所撰以詩金官御書銘之）



第七十一圖版　近藤重蔵の開墾したるルベシベツよりピタタヌンケに至る由道

蝦夷紀元後申八月（昭和十年ヨリ七十六年前）　茶屋　鈴木重貞

射庭兒（地名現在ノ稚内）　尾劃（地名現在ノ礼文）　剃筑子毘内（地名現在ノ各編九號第五圖附近）　曾邊志別（地名現在ノ　ルベシベツ）

御田奴月（地名現在ノ日影網場ピタタ）　神芝留（地名日影網場ピタタヌンケ川上流）

シベツ」より「ピタタヌンケ」に至る山道約三里餘を開墾し、之が記を下野源助が誌して板に書き記し、十勝神社に奉納した。

東蝦道路開墾記碑文

蝦夷東北之徼自射庭兒至尾劍涉海岸之嶮若稍筑子瓈内峰巒絶壁登降趦趄蟹步蹤躅蟻附猿攀誤失一步則非粉骨魚腹夷族死此嶮間矣有之江戸幕軒使近藤君一得此嶮有意新開道於山後恵登呂府安歸之日風雨阻道路塞濠澪日於是慨然發憤與通詞茗及夷族商議出資散財自留邊忠別洲水平神芝留接針南沿流而下出鄂田叙月登降凡三里而近伐木架流爲橋碎石投谷爲梯行路初免跋涉無危人夷賴之是所以江戸餘澤波及夷族而爲近藤君思人思夷之陰德也余與其事記姓名揭刀勝神祠

大日本寛政十年戊午十一月朔庚申（昭和十年ヨリ百三十八年前）

江戸幕軒使近藤君重蔵

従者　下野源助　詮（本名　木村謙次）

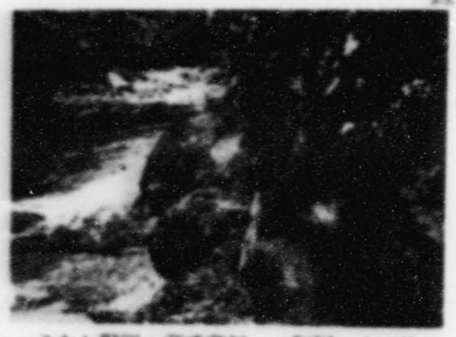
金平

通詞　豊

孫七　吉

夷族六十八人

近藤守重東蝦夷道記舊板既久蠹字蝕漫不可讀戊寅三月橋正豊酉正友等勉力再鐫其詩余官務書勝之



第七十一圖版　近藤重蔵の開墾したるピタタヌンケ（ペレベツ）に至る山道

萬延紀元庚申八月（昭和十年ヨリ七十六年前）　蒼溟　詮　本重　向

射庭兒（地名現在ノ樣似）　尾劍（地名現在ノ樣尾）　瓈筑子瓈内（地名現在ノ各磯丸鐵橋附近）　留邊志別（地名現在ペレベツ）

鄂田叙月（地名現在ノ日勝國境）　神芝留（地名日勝國境ピタタヌンケ川上流）

釧路國支廳

厚岸町（厚岸郡厚岸町牧場調）

一、鯉水松

第七十二圖版　鯉水松

鯉水松は、厚岸町大字弁天町字オソナイ山頂にある水松の巨木で、樹齢正に三百餘年と稱せられる。枝葉は繁茂し鬱蒼たる巨木であるばかりでなく、其の場所は眺望頗る絶佳で、厚岸湾を一眸に收めることができる。

由來厚岸は其の氣候風土が、極めて良好であるばかりでなく、豊富な魚族の繁息する厚岸湾があるため、土人にとつては昔から、この上も無い安住の地であつた。

職つて幾多の物語もあつたであらうが、確かな資料の現存するものはなく、唯古老の斷片的な口傳へに依つて、僅に其の一斑を窺ひ知る程度である。サカサオンコに關する傳說として、殘されたる物語は次の如くである。

今から約三百年の昔、アイヌ族は此の厚岸を唯一の樂土として、平和な日を送つて居た。然し其の平和はやがて起つた大飢饉の爲に破壞される運命となつた。

それは全道的に襲つた飢饉のために、常に厚岸アイヌの仇敵たる阿寒、塘路、屈斜路、釧走アイヌが次第に食を求めて南下し、平和な厚岸を目指して、攻め寄せてきたからである。

しかも夫は偶ま交易の爲、秋前方面に厚岸の酋長が出掛けた、その留守の出來事であつた。男盛りの老婆ワタヌは戰利あらざるを知つて、酋長の妻シュルパルマに貴族の寶物を持たして、大勢タブコプに難を避けさせ、自分は部落の一族を引具して、山のチャシに立て籠り勇ましくも戰つた。だが衆寡敵せず、哀れ老婆ワタヌは遂に敵の毒矢に殞れた。此の時老婆は無念の形相物凄く、メナに寄り掛り、手にせる水松（一說にはメナの支柱又は杖）を地中に突き刺し、我は死すとも此の地を敵に渡さじ、神樣何卒守り給へと念じた。尙一族に對しては寶物を携へて逃れた、シュルパルマと酋長の歸り來るを待つて、必ず仇を討てと云ひ殘つて遂に死んで行つた。一族は愚命に戰つた。態て酋長の歸るに及んで士氣大いに擧り、彼の大敵を打拂つて、再び元の平和な厚岸に歸つた。其の後、老婆ワタヌの突刺した水松は根を下し枝を張り、そして三百餘年間亭々として、空を摩する巨木となつて今日に至つたのである。

二、アイカツブ岬に纏はる傳說

昔、厚岸チクシコイ土人の一族と、厚岸の土人とが細の事から激しい鬪爭を惹き起し、激昂したチクシコイ土人は大擧して厚岸部落に殺到したが、厚岸土人の爲に無惨にも敗られて、餘儀なく一時アイカツブに陣容を整へて再び對抗した。然し乍ら厚岸土人の矢は猛烈にして防ぐことができず、又々退き、そしてアイヌンカツブ岬に最後の一戰を交へた。此處ではさしもの厚岸土人の攻擊も効を奏せず、遂に最後に至つて之を打破ることができた。

今のアイカツブ岬は其の舊蹟で、アイは矢、カツブは屑く或は屑かぬとも云ひ、即ち味方の放つ矢は敵に屑くが、敵

釧路國支廳

厚岸町

（厚岸郡厚岸町役場調）

一、逆水松

第七十二圖版　逆水松

逆水松は、厚岸町大字奔渡町字オツナイ山頂にある水松の巨木で、樹齢正に三百餘年と稱せられる。枝葉は繁茂し鬱蒼たる巨木であるばかりでなく、其の場所は眺望頗る絶佳で、厚岸湾を一時に收めることができる。

由來厚岸は其の氣候風土が、極めて良好であるばかりでなく、豐富な魚族の棲息する厚岸湾があるため、土人にとつては昔から、この上も無い安住の地であつた。臨つて幾多の物語もあつたであらうが、確かな資料の現存するものはなく、唯古老の斷片的な口傳へに依つて、僅に其の一斑を窺ひ知る程度である。サカサオンコに關する傳說として、殘されたる物語は次の如くである。

今から約三百年の昔、アイヌ達は此の厚岸を唯一の樂土として、平和な日を送つて居た。然し其の平和はやがて起つた大飢饉の爲に破壞される運命となつた。

それは全道的に襲つた飢饉のために、常に厚岸アイヌの魚敵たる阿寒、靖路、屈斜路、網走アイヌが次第に食を求めて南下し、平和な厚岸を目指して、攻め寄せてきたからである。

しかも夫は偶〻安易の爲、桧前方面に厚岸の酋長が出掛けた、その留守の出來事であつた。男獵りの老婆ワタヽは戰利あらざるを知つて、酋長の妻シュルパルマに貴重の寶物を持たして、大別タブコブに難を避けさせ、自分は部落の一族を引具して、山のチヤシに立て籠り勇ましくも戰つた。だが衆寡敵せず、哀れ老婆ワタヽは遂に敵の毒矢に殺れた。此の時老婆は無念の形相物凄く、ヌサに寄り掛り、手にせる水松（一說にはヌサのを柱又は杖）を地中に突き刺し、我は死すとも此の地を敵に渡さじ、神樣何卒守り給へと念じた。尙一族に對しては寶物を捨へて逃れた、シュルパルマと酋長の歸り來るを待つて、必ず仇を討てと云ひ終つて遂に死んで行つた。一族は懸命に戰つた。態て酋長の歸るに及んで士氣大いに擧り、彼の大敵を打拂つて、再び元の平和な厚岸に歸つた。其の後、老婆ワタヽの突刺した水松は根を下し枝を張り、そして三百餘年閑春々として、容を摩する巨木となつて今日に至つたのである。

二、アイカツブ岬に纏はる傳說

昔、厚岸チクシロイ土人の一族と、厚岸の土人とが細の事から激しい鬪爭を惹き起し、激昂したチクシロイ土人は大擧して厚岸部落に殺到したが、厚岸土人の爲に無慘にも敗られて、餘儀なく一時アイカツブに陣容を整へて再び對抗した。然し乍ら厚岸土人の矢は猛烈にして防ぐことができず、又々退き、そしてアイヽンカツブ岬に最後の一戰を交へた。此處ではさしもの厚岸土人の攻擊も効を奏せず、遂に最後に至つて之を打破ることができた。

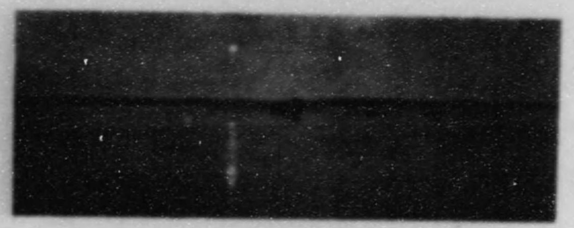
今のアイカツブ岬は其の舊蹟で、アイは矢、カツブは屑く或は屑かぬとも云ひ、卽ち味方の放つ矢は敵に屑くが、敵

の矢は屆かなかつたと云ふ意味であると傳へられてゐる。

三、パラサン岬とピラツカムイ

昔アイヌが沖合に漁に出て、最も恐れたのはピラツカムイ（神魚）であつた。それは、此の神魚が船を背にのせて、轉覆させると傳へられて居たからである。

或日、此の恐しいピラツカムイが突如厚岸灣に迷入つて來た。偶々パラサン岬に在つてパラサン（パラサンとは魚を目刺にして、岩と岩との間に竿を掛け、乾して食料を作ることである）に從事して居たメノコが之を發見して大騒ぎとなり、人々は濱邊に立つて見ようとした時に、此の恐しい神魚は不思議にも忽ち石と化してしまつた、と云ふ傳說が殘されて居る。



第七十四圖版　厚岸湖

第七十三圖版　パラサン岬

四、屈斜路湖の義經石

弟子屈村（川上郡弟子屈村役場調）

爾來此の神魚の化したと云ふパラサン岬を通る船は、神酒や御幣（イナオ）を供へて御祈りして、往來したことは今尙實話として殘つてゐる。

屈斜路湖和琴半島の突端南岸に、義經石と呼ばれる大石がある。現在は和琴半島の溫泉の上に安置せられてゐる。

昔、土人某が此の義經石に尿を掛けたところが、程なく此の石像は湖中に轉落してしまつた。それから湖は日毎に荒れ、湖水から引揚げんとすれども揚らず、其の後尿を掛けたアイヌは湖に入水して死んだ。それ以後湖水の荒れも不思議に止んだといふことである。今でもアイヌは此の義經石を崇敬しつゝある。

五、摩周湖の傳說

昔、アイヌメノコが湖に丸木舟を浮べ、男に乘じて湖心に差掛かると、荒い渦波に卷き込まれ、舟も人も共に影を消してしまつた。それから半ケ月程經つて、舟の破片と無慘に疲ついたメノコの死體が紅別川の上流に漂着した。

又或る日アイヌが熊を追ひかけると、熊は一目散に湖上の堅氷を渉つて對岸に逃れようとした。恰度湖の中央に達したところ、忽ちその姿は見えなくなつてしまつた。後數日を經て、紅別川上流にその熊の屍體が浮かんで居た。

舌辛村（阿寒郡阿寒村役場調）

六、雄雌阿寒岳

昔、雄阿寒岳（ピンネシリ）雌阿寒岳（マウネシリ）と言ふ夫婦の山があつた。それにルベシベの濕山にポンヌプリと言ふ目掛山（愛のこと）があつた。

或時、何處から來たのか判らぬが、力の强い鬼が現れて、山の麓に目掛などを持つて居るのは生意氣であると怒鳴り、

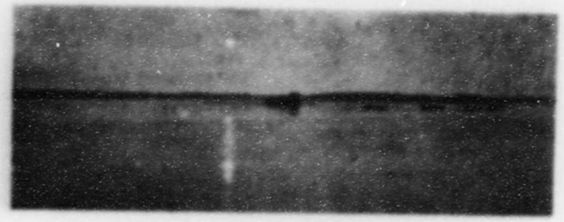
の矢は屆かなかつたと云ふ意味であると傳へられてゐる。

三、パラサン岬とピラツカムイ

昔アイヌが沖合に漁に出て、最も恐れたのはピラツカムイ（神魚）であつた。それは、此の神魚が船を背にのせて、轉覆させると傳へられて居たからである。

或日、此の恐しいピラツカムイが突如厚岸灣に這入つて來た。偶々パラサン岬に在つてパラサン（パラサンとは魚を目刺にして、岩と岩との間に竿を掛け、乾して食料を作ることである）に從事して居たメノコが之を發見して大騒ぎとなり、人々は濱邊に立つて見ようとした時に、此の恐しい神魚は不思議にも忽ち石と化してしまつた、と云ふ傳說が殘されて居る。

爾來此の神魚の化したと云ふパラサン岬を過る船は、神酒や御幣（イナオ）を供へて御祈りして、往來したことは今尙實話として殘つてゐる。



第七十四圖版　厚岸灣

第七十三圖版　パラサン岬

四、屈斜路湖の義經石

弟子屈村（川上郡弟子屈村役場調）

屈斜路湖和琴半島の突端南岸に、義經石と呼ばれる大石がある。現在は和琴半島の溫泉の上に安置せられてゐる。

昔、土人某が此の義經石に屎を掛けたところが、程なく此の石像は湖中に轉落してしまつた。それから湖は日毎に荒れ、湖水から引揚げんとすれども揚らず、其の後屎を掛けたアイヌは湖に入水して死んだ。それ以後湖水の荒れも不思議に止んだといふことである。今でもアイヌは此の義經石を崇敬しつゝある。

五、摩周湖の傳說

昔、アイヌメノコが湖に丸木舟を浮べ、舟に乘じて湖心に差掛かると、荒い渦波に卷き込まれ、舟も人も共に影を消してしまつた。それから半ケ月程經つて、舟の破片と無惨に疲ついたメノコの死體が釧路川の上流に漂着した。

又或る日アイヌが熊を追ひかけると、熊は一目散に湖上の堅氷を渉つて對岸に逃れようとした。恰度湖の中央に達したところ、忽ちその姿は見えなくなつてしまつた。後數日を經て、釧路川上流にその熊の屍體が浮かんで居た。

舌辛村（阿寒郡阿寒村役場調）

六、雄雄阿寒岳

昔、雄阿寒岳（ピンネシリ）雌阿寒岳（マウネシリ）と言ふ夫婦の山があつた。それにルベシベの眞山にボンヌプリと言ふ目掛山（愛のこと）があつた。

或時、何處から來たのか判らぬが、力の強い鬼が現れて、山の窟に目掛などを持つて居るのは生意氣であると怒鳴り、

大きな槍を取つてピンネシリを突き、マフネシリの頭を突き飛ばしてしまつた。その槍跡が現在の雄阿寒大穴（噴火口）である。

尙續いてポンヌプリをも突飛ばした。その元氣な槍が流れて七曲りに止まつた。その附近に現在深い澤がある。それがその槍跡だと言ふ。

ポンヌプリのあつた箇所は、沼になつたと言ふ事である。その飛んだものが屈斜路湖畔へ行つて止まり、阿寒の人が屈斜路湖上に出ると淚雨と言ふか、きつと俄雨が降ると言ひ傳へられる。そしてその山の一方からは赤い泥水が流れて居る。これを山の淚だと言ふ。

（元チンベツ古部村長敬藤西郎ナレベレツトケレヤンの話）

七、鶴澤の傳說

昔、ペカンペ（水中に浮いて居るものの意）と言ふものが湖の中に浮いて居たが、常に湖の神樣に虐待されて居た。或時ペカンペが神樣に、「私共は出來得る限り、自分等の仲間を多くしたいから此の湖に置いて下さい」とお願ひすると、神樣は「お前達を湖の中に置くと、湖が汚れて見苦しくなるし、お前達を取るために人間が來て、沼が亂れるから許すことはならぬ」と言はれたので、ペカンペは大いに怒り、藻を投げ入れた。それが現在の鶴澤であると言ひ傳へられて居る。

（同じく元チンベツ古部村長敬藤西郎ナレベレツトケレヤンの話）

根室支廳

羅臼村（目梨郡羅臼村役場調）

一、義經尻もち岩

尻もち岩は羅臼の海岸にある。昔、義經公が此處に來り、鯨の寄つたのを一刀の下に切つて串に刺し、焼いて食はうとしたところ、其の串が忽ち折れてしまつた。義經は驚いて尻もちを搗いたと云ふので、名付けられたものであると傳へられる。

二、蝮蛇岩

羅臼海岸に蝮蛇の如き怪岩が海に突出し、其の傍には人の立てるが如き五基の岩がある。傳へて云ふにはシヤマイルタ（武藏坊辨慶）の妹が、此處に住んで居た時、大蛇が妹を呑まんとしたのを見てシヤマイルタが怒り、踏み殺したところ、忽ち化して岩となつたといふのである。

三、觀世音岩

昔、知床半島の岬に接續する三里の岸壁に所の名僧が漂着し、酋長の穴居に宿を

第七十五圖版　蝮蛇岩

大きな槍を取つてピンネシリを突き、マツネシリの頭を突き飛ばしてしまつた。その槍跡が現在の雌阿寒火穴（舊噴火口）である。

尙續いてポンメブリをも突飛ばした。その元氣な槍が流れて七曲りに止まつた。その附近に現在深い澤がある。それがその槍跡だと言ふ。

ポンメブリのあつた箇所は、沼になつたと言ふ事である。その飛んだものが屈斜路湖畔へ行つて止まり、阿寒の人が屈斜路湖上に出ると涙雨と言ふか、きつと俄雨が降ると言ひ傳へられる。そしてその山の一方からは赤い泥水が流れて居る。これを山の涙だと言ふ。

（元チレベツ古潭酒長藤次郎チレベレットケレヤンの談）

七、鶴澤の傳說

昔、ペカンペ（水中に浮いて居るものの意）と言ふものが湖の中に浮いて居たが、常に湖の神樣に虐待されて居た。或時ペカンペが神樣に、「私共は出來得る限り、自分等の仲間を多くしたいから此の湖に近いて下さい」とお願ひすると、神樣は「お前達を湖の中に置くと、湖が汚れて見苦しくなるし、お前達を取るために人間が來て、沼が濕れるから許すことはならぬ」と言はれたので、ペカンペは大いに怒り、藻を投げ入れた。それが現在の鶴澤であると言ひ傳へられて居る。

（同じく元チレベツ古潭酒長藤次郎チレベレットケレヤンの談）

根室支廳

羅臼村（目梨郡羅臼村役場調）

一、義經尻もち岩

尻もち岩は羅臼の海岸にある。昔、義經公が此處に來り、蝦の寄つたのを一刀の下に切つて忠臣に刺し、焼いて食はうとしたところ、其の串が忽ち折れてしまつた。義經は驚いて尻もちを搗いたと云ふので、名付けられたものであると傳へられる。

二、蛟蛇岩

羅臼海岸に蝮蛇の如き怪岩が海に突出し、其の傍には人の立てるが如き五基の岩がある。傳へて云ふにはシヤマイルク（武藏坊辨慶）の妹が、此處に住んで居た時、大蛇が妹を呑まんとしたのを見てシヤマイルクが怒り、踏み殺したところ、忽ち化して岩となつたといふのである。

三、觀世音岩

昔、知床半島の岬に接續する三里の岸壁に唐の名僧が漂着し、酋長の穴居に宿を

第七十五圖版　蛟蛇岩

借りて滯留すること、五百日の永きに及んだ。口碑を按ずるに知床の岸壁に在る、等身大の觀世音菩薩の尊像は、この唐僧の彫刻に成つたものだと云ふ。

この唐僧に就いては、次の如き奇しき傳說がある。

唐土の名僧が日本に佛法を傳へんとして渡航したが、暴風のため漂流して、やつと知床半島に上陸し、一命を船長に助けられた。唐僧は持戒護法の美しい若法師であつた。佛縁浅なく日出づるヤマトの國にも渡れず、又日の沒する唐土の故郷にも歸れず、空しく寂寞の歲月を北海の地に送つた。幸か不幸か船長の宅には、花顏しき一人の娘があつた。眉目秀麗の唐僧に、いつとはなく心を惑かれ、遂に切々の恩慈の情を誓へた。然るに金剛不壞の唐僧は、乙女の切ない愛情を熱狂の私語の如くに聞き流し、日夜船長から借り受けた石斧で、コツ〳〵と彫目もふらず岩壁に、觀世音菩薩の尊像を彫刻してゐた。そして刻み終るやお禮の印に、羅山のお金の入つた銅卷を置いて、唯一人丸木舟に乘つて、何處とも なく消え去つた。後に殘された娘の驚きと悲しみとは言語に絶した。そして恩慈の情やみ難く、やがて唐僧の跡を追うて、怒濤逆卷く海原に身を投げて死んだ。

第七十六圖版　觀音岩(高橋中將撮影)

蛇岩は、この可憐な娘の體が、蛇身に化したものであり、又岸壁の觀世音の尊像は、乙女の身代り觀音であるといふのである。

四、底無の沼

羅臼溫泉の裏手に沿うて羅臼川を上ると、熊越の淵の手前に川と並行して、摺鉢形をした底無の沼と言ふ沼がある。其の名の如く青々とした、水をたゝへた無氣味な沼で、周圍は僅か四五丁位の至つて小さな沼である。故老の話に依ると、この沼は明治二十六年頃、羅臼の噴火に依り山崩れを生じ、その際土砂が羅臼川を堰止めて、出來上つたものらしく、當時あの水量豐富な羅臼川の水が數日間も涸渴し、村民が之を不思議に思つて、溫泉に行つて見ると、今までなかつた沼が出來たばかりか、湯治客數名は山崩れの下敷となつて、死んでゐたとの事である。

尙この變事について神秘な話がある。それは底無沼にからんだ物語であるが、話を進める前に、之を生んだ主人公に就いて一言語らねばならぬ。

眞言宗の僧で桑門長海と言ふ者が、丁度山の變事（噴火）がある直前まで溫泉に泊つてゐたが、彼は其の日、山に變事がある事を豫言して、湯治客五六名と溫泉宿の主人作田繁藏夫婦に、山を下つて市街に出る事を勸めたが、作田夫婦の外は、皆一笑に附して山を下らなかつた爲に、居殘つた者全部は生命を失つてしまつた。彼の豫言は前夜夢うつゝに知つた、神のお告げに依るものであつた。お告げの大體はかうである。

身に破れたる衣を纏うても、物慾の汚れのない彼は幸福に滿ち〳〵て旅から旅へ——それが唯一の、人を救く道であり德を積む修行だつた。彼は俗界を離れて、雲上より靈峰へと一歩〳〵の歩みを續けてゐた。歩を續けてゐる中に、廣々とした百花繚亂たる花園に出た。花園は到底俗界に見る藤芥にまみれたそれとは、似ても似つかぬ美しいものであつた。そしてその花園には、御佛を始め羽衣もいと輕やかな天女、銀色

第七十七圖版　底無の沼

借りて滯留すること、五百日の永きに及んだ。口碑を按ずるに知床の岸壁に在る、等身大の觀世音菩薩の尊像は、この唐僧の彫刻に成つたものだと云ふ。

この唐僧に就いては、次の如き奇しき傳說がある。

唐土の名僧が日本に佛法を傳へんとして渡航したが、暴風のため漂流して、やつと知床半島に上陸し、一命を酋長に助けられた。唐僧は持戒護法の美しい若法師であつた。佛緣淺なく日出づるヤマトの國にも渡れず、又日の暮する唐土の故郷にも歸れず、空しく哀愁の歲月を北海の地に送つた。幸か不幸か酋長の宅には、花顏しき一人の娘があつた。眉目秀麗の唐僧に、いつとはなく心を惹かれ、遂に切々の思慕の情を訴へた。然るに金剛不壞の唐僧は、乙女の切ない愛情を熊笹の私語の如くに聞き流し、日夜酋長から借り受けた石斧で、コツ〳〵と傍目もふらず岩壁に、觀世音菩薩の尊像を彫刻してゐた。そして刻み終るやお禮の印に、澤山のお金の入つた桐箱を置いて、唯一人丸木舟に乘つて、何處ともなく消え去つた。後に殘された娘の驚きと悲しみとは言語に絶した。そして思慕の情やみ難く、やがて唐僧の跡を追うて、怒濤逆巻く海原に身を投げて死んだ。

第七十六圖版　觀世音岩（海鷗中島撮影）

腹蛇岩は、この可憐な娘の體が、蛇身に化したものであり、又岸壁の觀世音の尊像は、乙女の身代り觀音であるといふのである。

四、底無の沼

羅臼溫泉の裏手に沿うて羅臼川を上ると、熊越の滝の手前に川と並行して、摺鉢形をした底無の沼と言ふ沼がある。其の名の如く青々とした、水をたゝへた無氣味な沼で、周圍は僅か四五丁位の至つて小さな沼である。故老の話に依ると、この沼は明治二十六年頃、羅臼の噴火に依り山崩れを生じ、その際土砂が羅臼川を堰止めて、出來上つたものらしく、當時あの水量豐富な羅臼川の水が數日間も涸渴し、村民が之を不思議に思つて、溫泉に行つて見ると、今までなかつた沼が出來たばかりか、渴治客數名は山崩れの下敷となつて、死んでゐたとの事である。

尙この變事について神秘な話がある。それは底無沼にからんだ物語であるが、話を進める前に、之を生んだ主人公に就いて一言語らねばならぬ。

眞言宗の僧で桑門長海と言ふ者が、丁度山の變事（噴火）がある直前まで溫泉に泊つてゐたが、彼は其の日、山に變事がある事を豫言して、渴治客五六名と溫泉宿の主人作田繁藏夫婦に、山を下つて市街に出る事を勸めたが、作田夫婦の外は、皆一笑に附して山を下らなかつた爲に、居殘つた者全部は生命を失つてしまつた。彼の豫言は前夜夢うつゝに知つた、神のお告げに依るものであつた。お告げの大體はかうである。

身に破れたる衣を纏うても、物慾の汚れのない彼は幸福に滿ち〳〵て旅から旅へ——それが唯一の、人を說く道であり德を積む修行だつた。彼は俗界を離れて、雲上より雲峰へと一歩〳〵の歩みを續けてゐる中に、廣々とした百花繚亂たる花園に出た。花園は到底俗界に見る藤芥にまみれたそれとは、似ても似つかぬ美しいものであつた。そしてその花園には、御佛を始め羽衣もいと輕やかな天女、銀色

第七十七圖版　底無の沼

第七十八圖版　藤白嶽

の白馬にまたがつて、天空を自由に疾驅する女神等、善美の世界喜びの天國であつた。彼は初めて見るこの世界に立つて、恍惚として己を忘れてゐると、白馬の女神が彼の前に、馬を進めて言ふには「汝等疾く山を下り海岸に出でよ。然らざれば危難忽ち身に迫るべし」と。その理由は……

藤白川の主と、藤白嶽の主との間に戰端が開かれ、爲に地上に一大變動が起ると言ふのであつた。事の起りは藤白川を支配し得た、川の主は自己の力を過信し、世の中に自分より力の强いものはないと自惚れ、餘勢に乘じて更に藤白嶽山麓一帶をも、自己の勢力圏内に入れようとの野望を懷き、山の神に向つて今後自分の家來にならねば、我が所有權に屬する川の水は勿論、此の川に流れ注ぐ少しの水でも、一切飲む事は相成らんと言ひ出した。驚いたのは山の主を始め一同のもので、早速相談の結果、山の寶物を貢ぐ條件で和解を申出た。ところが川の主はそんな事には耳を傾けず、遂に神樣の裁判を仰いで戰端を開いた。戰は數日に亙つても、容易に勝敗は決しなかつたが、やがて最後の勝敗を決める日が到來した。その日は朝からどんよりした陰氣味惡い、そして何となく怒氣を含んだ陰鬱な天候であつた。

其の夜である、地鳴り山鳴りが引きつゞいて起つた。それは最後の決戰の爲に山と川との兩雄が、四つに組んで揉み合ふ響であつた。やがてのこと一大音響と共に、山は崩れ川の底は拔けて、今の底無の沼が出現した。そして川の主は到頭此の沼に幽閉されてしまつたのだと言ふ。

桑門長海はその後も旅から旅へと流浪を續け、何時頃か明らかでないが、隣村標津の伊茶仁で

行き當りばつたり草の枕かな

といふ辭世の句を殘して死んだと傳へられる。

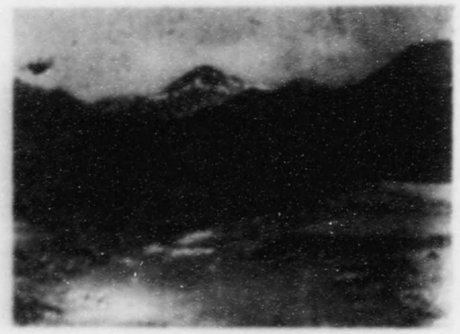
留夜別村（國後郡留夜別村役場調）

五、大瀧海の由來

千島列島の航海業者から、航海の神樣とも偉人とも尊ばれて居る高田屋嘉兵衛は、幕府の命を帶び函館より擇捉、國後、色丹、納沙布の各地水路を航海するに當つて、潮流の逆轉に卷き込まれ、死生の境に遭遇したことは、枚擧に遑ない程であつた。高田屋自身の船は能く難破を免れたけれども、他の船は屢〻難破の厄に遭ひ、犧牲者を海底に葬ることも多かつた。玆に於て嘉兵衛は、納沙布岬と國後アトイヤ岬と擇捉島内保岬の各高丘に登り、海潮の流れと水色と渦流の異動を、具さに觀察研究し、また藥取沖、内保沖、年萠沖の三ケ所に於て、三浬の間隔を設き、三本の竹竿と丸太を放流せしめた。然るところ右の三本は、色丹沖合に流るゝに從つて間隔愈〻接近し、國後島のアトイヤ沖に至つて合致し、更に納沙布岬を通過して何れも離散放流して終つた。

右の如き結果を實驗すること三度に及んで、彼は非常なる潮流の異動と渦流の混亂あるを會得した。

即ちオホツクと中部千島と樺太カムチヤツカの三大潮流が、擇捉島と色丹島の海峽に激流し來つて合致し、物凄い勢



第七十八圖版　羅臼岳

の白馬にまたがつて、天空を自由に疾驅する女神等、善美の世界喜びの天國であつた。彼は初めて見るこの世界に立つて、恍惚として己を忘れてゐると、白馬の女神が彼の前に、馬を進めて言ふには「汝等疾く山を下り海岸に出でよ。然らざれば危難忽ち身に迫るべし」と。その理由は……

羅臼川の主と、羅臼嶽の主との間に戰端が開かれ、爲に地上に一大變動が起ると言ふのであつた。事の起りは羅臼川を支配し得た、川の主は自己の力を過信し、世の中に自分より力の強いものはないと自惚れ、餘勢に乘じて更に羅臼嶽山麓一帶をも、自己の勢力圏内に入れようとの野望を懷き、山の神に向つて今後自分の家來にならねば、我が所有權に屬する川の水は勿論、此の川に流れ注ぐ少しの水でも、一切飲む事は相成らんと言ひ出した。驚いたのは山の主を始め一同のもので、早速相談の結果、山の寶物を貢ぐ條件で和解を申出た。ところが川の主はそんな事には耳を傾けず、遂に神樣の裁判を仰いで戰端を開いた。戰は數日に亙つても、容易に勝敗は決しなかつたが、やがて最後の勝敗を決める日が到來した。その日は朝からどんよりした薄氣味惡い、そして何となく惡氣を含んだ陰惡な天候であつた。

其の夜である、地鳴り山鳴りが引きつゞいて起つた。それは最後の決戰の鬨に山と川との兩雄が、四つに組んで揉み合ふ響であつた。やがてのこと一大音響と共に、山は崩れ川の底は拔けて、今の底無の沼が出現した。そして川の主は到頭此の沼に幽閉されてしまつたのだと言ふ。

桑門長海はその後も旅から旅へと流浪を續け、何時頃か明らかでないが、隣村標津の伊茶仁で

行き當りばつたり草の枕かな

といふ辭世の句を殘して死んだと傳へられる。

留夜別村（國後郡留夜別村役場調）

五、大鹿海の由來

千島列島の航海業者から、航海の神樣とも偉人とも尊ばれて居る高田屋嘉兵衛は、幕府の命を帶び商船より擇捉、國後、色丹、納沙布の各地水路を航海するに當つて、潮流の逆轉に卷き込まれ、死生の境に遭遇したことは、枚擧に遑ない程であつた。高田屋自身の船は能く難破を免れたけれども、他の船は屢〻難破の厄に遭ひ、積荷者を海底に葬ることも多かつた。茲に於て嘉兵衛は、納沙布岬と國後アトイヤ岬と擇捉島内保岬の各高丘に登り、海潮の流れと水色と逆渦の異動を、具さに觀察研究し、また藻取沖、内保沖、年萠沖の三ケ所に於て、三浬の間隔を設き、三本の竹竿と丈太を放流せしめた。然るところ右の三本は、色丹沖合に流るゝに從つて間隔愈〻接近し、國後島のアトイヤ沖に至つて合致し、更に納沙布岬を通過して何れも離散放流して終つた。

右の如き結果を實驗することと三度に及んで、彼は非常なる潮流の異動と逆渦の混亂あるを會得した。

即ちオホツクと中部千島と樣太カムチヤツカの三大潮流が、擇捉島と色丹島の海峽に激流し來つて合致し、物凄い勢

を加へて、アトイヤ岬に向つて襲来し、更に逆流して納沙布岬と相對峙する、ユリ、水晶、忠發等の各離島に突撃逆流するといふ、潮流關係を實測の結果知つたので、彼は内保岬とアトイヤ岬と納沙布岬を、千島に於ける三大魔海と斷定した。

この三大魔海を航海突破するには、激流を逆に應用し、流れに乗を差すと云ふ、所謂水理利用が最も大切であるとは、近海航海者の口を揃へていふところである。

六、爺々山の傳說

國後島の爺々山は、千島列島に於ける第一の高山で、實に神秘崇厳な霊峰であるが、此の山麓には幾多の傳說が秘められて居る。

山麓一帶は、今なほ太古そのまゝの原始林で、猛獸や鳥類が棲息して居る。山神は之等の鳥獸を保護するため、如何なる狩獵の名人と云はれるアイヌ人でも、二度まではこの森林で狩することを許すが、三度に及ぶと神罰を蒙り、必ず生命を失ふと一般に信じられてゐた。故に土人は、鷲を獲るのに森林へ歸入らず、一里も遠なる海岸の絶壁の岩窟に隱れてゐて、日夜頃多くの鷲の群が、擇捉島方面から餌食を漁つて己が巣に歸る、途中を狙して毒矢で射止めるのが、長い間の習慣であつた。

鷲の大將は、此の人間の暴戾を非常に憤慨し、或時一族の安全と復仇に就いて、衆議を凝らした結果、爺々山の神の使たる熊に、その善後策を相談すると、熊は夫れは海に氣の毒ぢや、俺が皆の仇を取つてやると快諾した。そこで熊は、土人よりも先廻りして岩陰に隱れてゐて、悠々とやつて來る土人に猛然と飛びつき、一撃の下に斃して死體を深林に搬ぎ込み、鷲達と共に骨も身も喰盡して喜んだ。かくして來る土人も來る土人も、悉く熊のために喰殺され、それ以來鷲を打つアイヌ人は跡を絶つに至つた。これは鷲の爲には仕合せの樣であつたが、熊は忽ち餓死線上に彷徨する身となつた。熊は大いに悲觀した。窮餘の一策として熊は、仔鷲を狙つて鷲の巣に登り、片つ端から喰ひ殺した。初め親鷲は不思議と恐怖にかられたが、遂に朋友の情義を無視した、暴戾な熊の仕業なることを知つた。鷲は再び群議を凝らした結果、雄鷲だけが擇捉島へ出稼ぎに行き、雌は皆留守番に殘ることにした。番兵の居ることを夢にも知らぬ熊は、今日も平然と密き巣狙ひに、大木に攀ぢ登つた。待ち構へて居た雌鷲は、一聲高く叫ぶと幾百千羽の雌鷲が八方から飛來し、鋭い嘴で忽ちに大熊を征伐してしまつた。

札幌市（札幌市役所調）

一、開拓延命地藏尊

明治四年富山縣人某といふものが、本道安全祈願の爲、札幌市南一條新川端に一基の地藏尊を安置した。その後開拓の進捗と共に、轉々移轉の已むなきに至つた。即ち

明治二十八年頃　南一條西十二丁目
同　三十二年　南一條西十七丁目
同　四　十　年　北師倶樂部前
大　正　二　年　南一條西十八丁目

同　六年　現在の南方

同　十三年　現在の大通西十九丁目一番地内

大正十三年四月、小川直吉等が相謀つて、現在の位置に一字の御堂を建立し、入佛式を擧行せんとするに先立ち、淸某と云ふ婦人が、地藏尊の首を奉納せんことを請うた。大圓山瑞龍寺三浦承天が親しく之を檢仰すると、本尊の石材と全く同質であり、正しく符節を合はせたやうなので直ちに取付けたところが、恰も活けるが如き御姿を拜することが出來た。そこで參拜の善男善女一同其の瑞祥に隨喜し、それより改めて札幌開拓延命地藏尊大菩薩と尊稱するに至つた。

これ首無地藏と稱せられたもので、其の首無の期間及び所在は明らかでない。

（札幌開拓延命地藏尊縁起による）

二、札幌開祖の碑

この碑は札幌市豐平町二番地先豐平川堤防敷地内に在つて、大正十一年頃、野村茂、阿部字之八、藪惣七、河野常吉等發起の下に、自然石に「札幌開祖志村鐵一碑」と刻んで建立したものである。

志村鐵一は信州の劍客であつて、安政四年幕府が石狩に調所を置くや、其の調役兼并金助の從者として石狩に渡來し、金助の命に依つて建碑の地に移り農耕を營み、その子に豐平川の渡守をなさしめ、次いで通行屋（驛逓所）を營み交通の便を計つた。これが札幌市域内に於ける和人居住の嚆矢である。

當時附近一帶は鬱蒼たる原始林で、熊や狼が横行して居た。鐵一は金助の許を得て對岸、即ち今の南四條東四丁目高田派專修寺別院の所に住み、狩獵をなして通行人の保護安全を期した。

明治二年開拓使札幌本府經營當時、和人の戸口二戸七人と誌にあるのは、蓋し右鐵一、茂八の二戸と其の家族を指したものであらうと云はれる。

函館市（函館市役所調）

一、函館の地名

原名はウショロケン後轉じてウスケンと言つた。アイヌ語で舟の端の義、白岸或は字頭岸の字を充てゝある。其の箱館と稱したのは後世の事で、箱館を函館と改めたのは明治二年八月十五日の官令に依る。以前には柾に箱館、箱立といふ當字を用ひたものもある。能原については數說ある。

◇桀穆丸は其著蝦夷島奇觀（函館圖書館藏）に、享德年間河野加賀左衞門なる者が渡海し來り、桑を築いたがそれを對岸七重濱方面から望むと、其の形が箱に似て見えたと。

◇市川十郎は其の著蝦夷實地檢考錄（函館圖書館藏）に、文安二年熊田郷の領主河野加賀守政通が館を築いて移つた。その時鐵器のはいつた筐笥が地中から出たからと。

◇松前廣長は其著松前志（函館圖書館藏）に、もと館地の名で（河野氏の館でなく、現在振興館山と呼ぶ谷地頭町後方に聳える山の頂に在るチャシを指す）それが今地名となつたと。

◇永田方正は其著『北海道蝦夷語地名解』（函館圖書館藏）に、函館の原名はハクチャシ、淺瀨即ち小館の義とし、

河野館の事を一説に擧げてゐる、

以上の如く異說行はれるが、最近に於ては箱館は、ハタチヤンなるアイヌ語の轉訛なり、とするもの漸く多きに至り、定說となつてゐる。

因に河野氏の渡來は享德三年で、加賀守政通と有るのが正しいのではあるまいか。

二、尻澤邊

石川啄木墓畔の崖下海岸を「白い濱」といふ。それに續いて北東谷地頭町、住吉町より遠く折戸迄の一帶を俗に、スサビ、シシヤビなどゝ呼ぶが、昔は尻澤邊村と稱し、元祿總帳、勢庵遺稿にはシリサブなどゝ載つてある古い漁村で、蝦夷實地檢考錄には、

寛文年中、久東の酋長シイラケ、尻澤邊まで攻來り、此方の酋長ライトウイム敗れて石狩まで逃げたり。

とあるが、勿論正史には認めがたい點である。その地名については以下の數說がある。

永田方正は其著北海道蝦夷語地名解に、シリサラベ、大拜崎、尻澤邊なり、和人サラを澤に訛る。北見國澤喜村の澤の如し。サラは茅又は湿澤の地を云ふ。舊地名解に「シリサンベ」にて函館山の尾崎を云ふとあり、二說行はると。

河野常吉は其の著函館風史に、永田氏の說を採り、蝦夷語大谷地の義、或はシリサンベ、函館山の尾崎なりといふとの說を擧げて居る。

磯部精一は其の著『北海道地名解』（函館圖書館藏）に、シリサウブにて、サウブとは下る、傾斜する義と。

蝦夷實地檢考錄に、シヤンは下る、ベは出崎の義、澤邊とはシヤンベの僞音。又同書に「口碑に箱館の溪澗をシンヤムベツと稱せり」とある。

三、チヤチヤノボリ

元町ハリストス教會と、その東隣聖公會との間の細い坂道を市民は斯く呼ぶ。函館風史に

函館沿革史天保四年の地圖に、函館山の麓より稍登りたる所にチヤチヤノボリといふ地名を記し、本文には沙見町配水池上部にチヤチヤノボリの地名存すと記せるが、チヤチヤヌプリは蝦夷語老爺山の義（國後島に此の名の山有り）卽ち大山に名づくべきものにして、斯の如き地に名づくべきにあらず。聞く明治十二年、官舍此處に建てられたるが、其の高地に在るの故を以て（現今も渡島支廳、函館市立中學校及び高等女學校等の官舍あり）一教員戲れに、

君屋不知何處在、
白雲深鎖蓼々登。

と詠じて、その官舍に住む者に與へたる所より傳播するに至れりと。又古老に問ふも此の名は、開拓使以前函館に在らざりしと言へり。

と。嘗て喜田貞吉博士も、坂を登る者の恰好が老人に似てゐるので、チヤチヤ（老人）が登るといふ意味でその名と

第七十九圖版　チヤチヤノボリ
昭和十四年十一月二十七日
撮影　函館市今川町坂路

河野館の事を一説に擧げてゐる。

以上の如く異說行はれるが、最近に於ては箱館は、ハタチヤンなるアイヌ語の轉訛なり、とするもの漸く多きに至り、定說となつてゐる。

因に河野氏の說來は享德三年で、加賀守政通と有るのが正しいのではあるまいか。

二、尻澤邊

石川啄木墓畔の崖下海岸を「白い濱」といふ。それに續いて北東谷地頭町、住吉町より遠く新川底の一帶を俗に、スサビ、シシヤビなどゝ呼ぶが、昔は尻澤邊村と稱し、元祿總帳、勢場道稿にはシリヤブなどゝ載つてある古い漁村で、蝦夷實地檢考錄には、

寛文年中、久東の酋長シイラケ、尻澤邊まで攻來り、此方の酋長ライトウイム敗れて石狩まで逃げたり。

とあるが、勿論正史には認めがたい話である。その地名については以下の數說がある。

永田方正は其著北海道蝦夷語地名解に、シリサラペ、大杯捉、尻澤邊なり、和人サラを澤に訛る。北見國澤喜村の澤の如し。サラは茅又は溫澤の地を云ふ。舊地名解に「シリサンペ」にて函館山の尾崎を云ふとあり、二說行はると。

河野常吉は其の著函館區史に、永田氏の說を採り、蝦夷語大谷地の義、或はシリサンペ、函館山の尾崎なりといふとの說を擧げて居る。

磯部精一は其の著『北海道地名解』（函館圖書館藏）に、シリサウブにて、サウブとは下る、傾斜する義と、

蝦夷實地檢考錄に、シヤンは下る、ペは出崎の義、澤邊とはシヤンペの轉音。又同書に「日碑に箱館の溪澗をシンヤムベツと稱せり」とある。

三、チヤチヤノボリ

元町ハリストス教會と、その東隣聖公會との間の細い坂道を市民は斯く呼ぶ。函館區史に

函館治革史天保四年の地圖に、函館山の麓より稍登りたる所にチヤチヤノボリといふ地名を記し、本文には沙見町配水池上部にチヤチヤノボリの地名存すと記せるが、チヤチヤヌプリは蝦夷語老爺山の義（國後島に此の名の山有り）卽ち大山に名づくべきものにして、斯の如き地に名づくべきにあらず。聞く明治十二年、官舍此處に建てられたるが、其の高地に在るの故を以て（現今も渡島支廳、函館測候所及今郵便局所在地）

第七十九圖版　チヤチヤノボリ
昭和十四年十一月二十七日
撮影者　函館測候所

立中學校及び高等女學校等の官舍あり）一教員頃れに、

君屋不知何處在、
白雲深鎖夢々登。

と詠じて、その官舍に住む者に與へたる所より傳播するに至れりと。又古老に問ふも此の名は、開拓使以前函館に在らざりしと言へり。

と。嘗て喜田貞吉博士も、坂を登る者の恰好が老人に似てゐるので、チヤチヤ（老人）が登るといふ意味でその名と

なつたのだらうと語られたことがあるが、牽強附會の說たるは免れない。

四、一本木

今の若松町は、明治五年一本木町と命名された。之は今の若松小學校附近に、柏の大樹が有つたからだといふ。蝦夷島奇觀に依れば、永正九年四月十六日、蝦夷叛亂の時、字須岸館主二代河野彌次郎右衛門季通奮戰して此處に自刄したので一本木はその墳墓だと記してある。

當時は、鹿田箱館間の略ゞ中央に位する交通の要衝であつた。

五、鹿田八幡宮の縁起

文化五年六月廿八日鹿田八幡宮神主藤山和泉正藤原秀房、安政五年正月千代ケ丘陣營に於て越智貫成改誌と奥書のある鹿田八幡宮古實記（函館圖書館藏）なる書に依れば、箱館に城郭を構へ鹿田郷の領主と仰がれてゐた、河野加賀守森幸が願主となり、明應元癸酉年敎智氣比神社の、仲哀天皇、神功皇后、正八幡大神の靈を勸請して建立し奉つた。其の後上の國勝山館の武田太郎信廣に、攻められて河野氏は滅び、武田氏松前館主となり蠣崎若狹守に任ぜられ、當八幡宮をば鹿田郷の總鎭守に祭つた。松前家五代蠣崎長鄕大輔慶廣、秀吉公に出仕し伊豆守に任ぜられたが、此頃即ち文祿三年から東西の蝦夷大騷侵入、松前兵も敗れ鹿田郷の民家も危く見えたので、領主慶廣松前より當地千代ケ丘に出陣、自身當社に參詣し永く建立地に御出し、當家の先祖智樂院が、南部領大間村より渡海して、夷人退去の修法を七重村藤山の絶頂に於てなしつゝあつたのを、召出して

第八十一圖版　一本木

昭和十四年十一月二十七日
津軽海峡圖會刊行委員會撮影

當社別當に任じ、文祿四年正月五日には謁を賜はり、同七日には御神樂を奏し、即ち家の子蠣崎主殿助等に、兵三十騎許を授けて七重濱に蝦夷と戰はしめた所、七重濱並に勝平（穴、平、ナイ、ヤ、か今の濱地のこと）の柏木を始め、草木まで皆軍勢と相見え、夷人數を消し酋長シヤムケンは捕虜となり、殘兵は茅部方面に潰走する程の、大勝を博して此の亂は鎭まつた。これ皆八幡宮の神力の御加護に依るとの、世人の評判が慶廣の耳に入り、智樂院を松前に召び出して、即ち持弓、大弓、牛弓をその寶藏に納め、その謝禮として永く法樂の神事を施すこと〻し、勝平及び七重濱一帶の柏樹を伐採することも禁じた。然るに文化四年松前家お國替となつたので、右の縁起を公儀に陳情した所、改めて箱館御役所より先々の通り永く執行せよと仰せ渡された。智樂院伶延命坊まで京都聖護院御宮御支配之處、お宮家、領主御支配院家相談の結果、國中の修驗一徒京都吉田殿の御支配となつた。

などとあつて、荒誕無稽の事が多く、史實としては採るに足らぬものである。殊に建立の年代を、明應元癸酉年とあれど、元年は皇紀二一五二年壬子であり、文政八年十月神主藤山大膳記の鹿田八幡宮記元書（函館圖書館藏）や、明治三年八月二十三日社寺奉行所に差出した上申書（函館圖書館藏）にも、慶長八年十月とあるのが、動かすべからざるものであらう。

又安政五年千代ケ丘陣營にて越智貫成改誌とあるは、越智氏は河野氏である所から、河野森幸と連結せしめこの僞書を生ましめたであらう。然も當時

第八十一圖版　鹿田八幡宮

昭和十四年十一月二十七日
津軽海峡圖會刊行委員會撮影

なつたのだらうと語られたことがあるが、亦強附會の說たるは免れない。

四、一本木

今の若松町は、明治五年一本木町と命名された。之は今の若松小學校附近に、柏の大樹が有つたからだといふ。蝦夷島奇觀に依れば、永正九年四月十六日、蝦夷叛亂の時、字須岸館主二代河野彌次郎右衛門季通奮戰して此處に自刄したので一本木はその墳墓だと記してある。

當時は、鹿田箱館間の略ゝ中央に位する交通の要衝であつた。

五、鹿田八幡宮の緣起

文化五年六月廿八日鹿田八幡宮神主藤山和泉正藤原秀房、安政五年正月千代ケ丘陣營に於て越智貫成改誌と題書のある鹿田八幡宮古實記（函館圖書館藏）なる書に依れば、箱館に城郭を構へ鹿田郷の領主と仰がれてゐた、河野加賀守森幸が關主となり、明應元癸酉年越智氣比神社の、伸哀天皇、神功皇后、正八幡大神の靈を勸請して建立し奉つた。其の後上の國勝山館の武田太郎信廣に、攻められて河野氏は滅び、武田氏松前館主となり蠣崎若狹守に任ぜられ、當八幡宮をば鹿田郷の總鎭守に祭つた。松前家五代蠣崎長鄕大輔慶廣、秀吉公に出仕し伊豆守に任ぜられたが、此頃御ち文祿三年から東西の蝦夷大擧侵入、松前兵も敗れ鹿田郷の長家も危く見えたので、領主慶廣松前より當地千代ケ丘に出陣、自身當社に參詣し永く建立地に仰出し、當家の先祖智樂院が、南部領大間村より渡海して、夷人退去の修法を七重村藤山の絕頂に於てなしつゝあつたのを、召出して

第八十一圖版　一本木

昭和十四年十一月二十七日
津軽書房刊行　今井信雄撮影

當社別當に任じ、文祿四年正月五日には鎭を賜はり、同七日には御神樂を奏し、則ち家の子蠣崎主殿助等に、兵三十騎許を授けて七重濱に蝦夷と戰はしめた所、七重濱菱に勝平（今の鹿部のこと）の柏木を始め、草木まで皆軍勢と相見え、夷人膽を消し酋長シヤムケンは捕虜となり、殘兵は茅部方面に潰走する程の、大勝を博して此の亂は靜まつた。これ皆八幡宮の神力の御加護に依るとの、世人の評判が慶廣の耳に入り、智樂院を松前に召び出して、則ち持弓、大弓、半弓をその寶藏に納め、その謝禮として永く法樂の神事を爲することゝし、勝平及び七重濱一帶の柏樹を伐採することも然じた。然るに文化四年松前家お國替となつたので、右の緣起を公儀に陳情した所、改めて箱館御役所より先々の通り永く執行せよと仰せ渡された。智樂院快盛命坊まで京都聖護院御宮御支配之處、お宮家、領主御支配院家相談の結果、國中の修驗一法樂の神事を爲すべき筈の御支配となつた。

第八十一圖版　鹿田八幡宮

昭和十四年十一月二十七日
津軽書房刊行　今井信雄撮影

京都吉田殿の御支配となつた。

などとあつて、愛護無稽の事が多く、史實としては採るに足らぬものである。殊に建立の年代を、明應元癸酉年とあれど、元年は皇紀二一五二年壬子であり、文政八年十月神主藤山大膳記の鹿田八幡宮記元書（函館圖書館藏）や、明治三年八月二十三日社寺奉行所に差出した上申書（函館圖書館藏）にも、慶長八年十月とあるのが、動かすべからざるものであらう。

又安政五年千代ケ丘陣營にて越智貫成改誌とあるに、越智氏に河野氏である所から、河野森幸と連結せしめこの僞書を生ましめたであらう。然も當時

の千代ケ丘は津軽藩の陣營で、その築造は遙に下つて、百十二年後となつて居ることに於てもやである。

六、船魂神社

元町の船魂神社は、當市古木道最古の社であると、崇敬者達は誇つてゐる。

嘉永五年の箱館御役所圖（函館圖書館藏）には御役所の東隣りに觀音堂とあり、安政四年淡窕如水著箱館夜話草（函館圖書館藏）に、船魂大明神のやしろあり、會は堂宇なくして林の中に在り、船魂大明神本地觀世音菩薩石像とあり、然して如水按するに、觀音をもつて船魂とすること、未だ聞かずと附記してゐる。蝦夷實地檢索錄に

祭神豫土翁命、國常立尊、大己貴命也。俚俗觀音と稱す。（中略）神職内記云

大治年中（八百十年程前）大原の良忍上人、融通念佛を弘めむ爲此島へ渡り杖を忍しゝ時、觀音の靈跡有と云ひしことあるより、保延元年（八百四年前）一宇を建立せり。後文治の末建久の初、源義經津輕より渡り來る洋中、逆浪大に起り、船將に沈まむとせしに船魂明神の奇瑞あり。差なく岸に着いて此地を歩行せし時、頻りに渴して水を索るに、童子忽然として岩上に現れ指示する方を掘れば、清水滾々と湧出せり。後世之を船玉明神の洗濯水（現當社神職渡邊幸雄が先代房松より聞き傳ふる所に依れば、蓋し宜託水の誤記ならんと）といひ傳へぬ。（中略）土人相傳へて、船魂明神の舊社は後世波分不動と呼ぶ。其の八町西に洗濯水の古跡有と云ふも的知すべからず。（前記幸雄談には、大雨の時函

船魂神社　版圖二十八第

昭和十四年十一月二十七日
函館市役所所藏

館山より流出して小川の狀を呈し、日常は砂礫を露出せる所ならんと、先代が語り居れりと）。今の明神社は延享四年七月、八幡宮神職菊地某再築せり。

と、往時の社殿は明治四十年の大火に炎上したので、その山の手西隣に社域を擴張（道有林拂下）し、昭和七年遷座祭を行つたのが現社殿である。又寛政十年四月箱館奉觀寫圖（蝦夷島奇觀所載）に依れば、龜田番所（現渡島支廳）の南に觀音社（即ち現社域）と有るので、之が享保二年に、松前藩で調べた自大澤村至黑岩村二十二ケ村五十六社年數之覺（函館圖書館藏）にある觀音堂とすれば、應永元年二月日との記名ある鰐口があるので、五百四十五年前まで創立年代を溯つて見ることが出來る。後に神佛混淆となり、天保頃には船魂明神と轉身してゐたのである。勿論良忍上人や、義經渡島說が術說として、俚諺を賑はして居るのである。

七、藥師山

前記箱館奉觀寫圖にも見える如く、藥師山の八合目あたりに、一堂の有つたことは一寸古い市民は皆覺えてゐる。前記二十二ケ村五十六社年數之覺の中に、

年數六十年位以前（この書の成つた享保二年より數へる）七左衛門と申者、夢中に觀音を見候故掘出し候處十二躰見え候由、唯今に爲り候由、其後村（坊か）建立、

とあり。蝦夷島奇觀にも、

箱立山の中腹なる藥師堂は、金銅七佛を安置し、箱館の故主河野氏の永願を祀れる所とす。（後略）云々、

とあり、市民は「藥師さん」と呼び、崇敬特に篤かつたと。

の千代ヶ丘は津輕藩の陣營で、その築島は遙に下つて、百十二年後となつて居ることに於てをやである。

六、船魂神社

元町の船魂神社は、當市唯一本道最古の社でもると、堀敬者達は誇つてゐる。

嘉永五年の箱館御役所圖（函館圖書館藏）には御役所の東隣りに觀音堂とあり、安政四年淡路如水著箱館夜話草（函館圖書館藏）に、船魂大明神のやしろあり、昔は堂宇なくして林の中に在り、船魂大明神本地觀世音菩薩石像とあり、然して如水按するに、觀音をもつて船魂とすること、未だ聞かずと附記してゐる。蝦夷實地檢索錄に

祭神豐土翁命、國常立尊、大己貴命也。俚俗觀音と稱す。（中略）神職內記云

大治年中（八百十年程前）大原の良忍上人、融通念佛を弘めむ爲此島へ渡り枝を息しゝ時、觀音の靈跡有と云ひしことあるより、保延五年（八百四年前）一宇を建立せり。後文治の末建久の初、源義經津輕より渡り來る洋中、逆浪大に起り、船將に沈まむとせしに船魂明神の奇瑞あり。並なく岸に着いて此地を步行せし時、頻りに渴して水を索るに、童子忽然として岩上に現れ指示する方を穿れば、清水滾々と湧出せり。後世之を船玉明神の洗濯水（現當社神職渡邊幸雄が先代房松より聞き傳ふる所に依れば、蓋し宜託水の誤記ならんと）といひ傳へぬ。（中略）土人相傳へて、船魂明神の舊社は後世波分不動と呼ぶ。其の八町西に洗濯水の古跡有と云ふも的知すべからず。（前記幸雄談には、大雨の時函

第八十二圖版　船魂神社
昭和十四年十一月二十七日
撮影者　函館市今井屋寫眞部

館山より流出して小川の狀を呈し、日常は砂礫を露出せる所ならんと、先代が語り居れりと）。今の明神社は嘉享四年七月、八幡宮神職菊地某再築せり。

と、往時の社殿は明治四十年の大火に炎上したので、その山の手西隅に社域を擴張（道有林拂下）し、昭和七年遷座祭を行つたのが現社殿である。又寛政十年四月箱館奉觀寫圖（蝦夷島奇觀所載）に依れば、龜田番所（現渡島支廳）の南に觀音社（卽ち現社域）と有るので、之が享保二年に、松前藩で調べた自大澤村至黑岩村二十二ヶ村五十六社年數之覺（函館圖書館藏）にある觀音堂とすれば、應永元年二月日との記名ある鰐口があるので、五百四十五年前まで創立年代を溯つて見ることが出來る。後に神佛混淆となり、天保頃には船魂明神と轉身してゐたのである。勿論良忍上人や、義經渡島說が俗說として、俚談を賑はして居るのである。

七、藥師山

前記箱館奉觀寫圖にも見える如く、藥師山の八合目あたりに、一堂の有つたことは一寸古い市民は皆覺えてゐる。前記二十二ヶ村五十六社年數之覺の中に、

年數六十年位以前（この書の成つた享保二年より數へる）七左衞門と申者、夢中に觀音を見候故掘出し候處十二體見え候由、唯今に爲り候由、其後村（坊か）建立、

とあり。蝦夷島奇觀にも、

箱立山の中腹なる藥師堂は、金銅七佛を安置し、箱館の故主河野氏の永祭を祀れる所とす。（後略）云々、

とあり、市民は「藥師さん」と呼び、崇敬特に篤かつたと。

八、牛王堂の由來

明治三十二年、東川町（後このあたり柴町と町名變更）に函館善光寺が建立せられた。所が次の年二月六日、大門前㊙肉屋で屠殺所に來いて行く牛の一頭が、鐘の音に驚いたのか、突然本堂指して駆け込んだ。牛飼達が慌てゝ連れ戻さうとしても仲々動かぬ。やつとのことで店まで連れ戻したが、何がさて牛が善光寺樣に飛び込んだとあるだけに、その儘に濟まされよう筈が勿論無い。住職はどう話をつけたかお肉屋に交渉してその牛を譲り受け、牛王堂なる牛小屋を建てゝお賽錢箱を釣し、扨はベコ節なる歌へ唄を唄つて、樂隊附で多くの信者達が、莊嚴に着飾つた此の牛にお伴して、街中を練り歩いたこともある。牛拜みの參詣客は殺到する。檀家は日に〳〵增す。住職は愼が溢まる。數年後には住職と信者代表數名が、此の牛を連れて長野の善光寺にお參りした。その時牛は、前脚を折つて恭しく禮をしたといふ土産話が、一行に依つて宣傳せられると、層一層參詣人は增しお賽錢箱は膨つた。そのお蔭でお肉屋まで繁昌した。ベコ節の一節を紹介すると、（十まである）

一ツトセ廣い世界に隱れなき御佛は
信濃の國の善光寺、ベコ〳〵〳〵有難や

いくら貴い牛でも壽命には勝てない。間もなく死亡すると共に參詣人も減り、寺も淋しくなつた。牛骨を寺寶として藏し、時々展覽會を開いて御開帳に及ぶが、牛健在當時の如きお賽錢は集まらぬとのこと。牛王堂由來記（函館圖書館藏）なる一編の書が往事をよく物語る。

（札幌教育局編『北海道郷土史研究』從書第一教育松前傳說より）

九、恩之松

本道最古の記錄である新羅之記錄は、松前慶廣の息で河野家を嗣いだ盛廣の所著、正保三年三井寺に納めたものである。これに依ると、

字須岸全盛之時は、館々若狭から商船が年三回やつて來るので、當地の問屋筋では渚邊に掘割を作り、纜を綠の柱に結んで取引をした。隨岸寺の開山嘉峰和尙が、生國若狭から鉢に植えて持つて來た稚松は、成長するにつれ枝が皆若狭の方を向くので、貴人之を「恩之松」と呼んだ。所が和尙遷化と共に松も枯れたので、貴人奇異の思をなし「嘆之松」と呼んだ。二世の寂峰和尙が、此の松が枝を切取り藥王如來の像を彫刻し、態國若狭に勸進して御堂を建立した所、人々之を「枝樂師」と呼んだ。所が此の御堂の光は海上十里にも輝いて、漁獵に魚がかゝらなくなつた。それで御堂を焼拂つて今では礎を殘すのみ。

とある。此の字須岸は言ふまでもなく箱館の古名で、其の隨岸寺は、松前舊事記（函館圖書館藏）に、「長祿三年字須岸の隨岸寺を松前に移す」とあり、更に「文明十八年松前大館出火、隨岸寺焼失、以後滅ず」とあるを見れば、永享嘉吉頃即ち箱館繁華の頃に建てられ、長祿蝦夷の亂後、其の廢地に近きを以て松前に移されたものと信ぜられる。

一〇、高龍寺のむしな

明治初年の話であるが、高龍寺はその頃（明治十四年迄）、今の無天町各呉服店の西側に山門があり、山手は鍛冶町通りまで境内であつた。藪が多かつたので自然狐狸の類も棲んでゐたが、特にこの寺のむしなとて人を誘すので評判であつた。壽司屋が注文に依つて届けてから、後に勘定を貰ひに行くと、その家ではそんな覚えがないと云ふ。某寺の被被

僧が赤給（と俗に云つた淫口の堂明給＝或穂丸）に行つて踏破をして負けてばかり来るので、このむじなに頼んでどうか勝たしてくれと言つたとか。十二年の大火には寺の宝蔵若類の搬出を手傳つたとか、兎に角宗時寺院の人気を獨占してゐたといふ。

一一、穴　洞

山背泊町から宮川部落に通ずる、一條の海道の中程に、宛も江之島の大洞窟を思はしめる如きもの、それを市民は穴洞と呼ぶ。海水常に怒濤となり岩壁に碎けてゐるのと、岩汁が金箔の如く降り注いでゐるのとで、餘程夜の静かな日、合羽様の物で充分身仕度を整へ、特殊の小舟に乗り、洞内の照明準備をしてゞなければ、洞奥の神秘は探れぬ。殊に洞口に流へた紺碧の深淵を見たゞけでも、如何なる魔神が棲むかと思はれる程なので、餘程剛毅な探検家でない限りは、洞奥には進めない。さればこそ古老に聞いても、諸説區々我らに怪は怪を生み、或は谷地頭に横いてゐるとか、給魂神社裏の深穴に抜けられるとかの傳説が作り出された。

今實際に洞奥を探つた快男兒某の談を聴くに、

洞窟は入口が西に向つてゐるが、奥行を測るために洞口の釣船の鐵鎖に、綱を縛りつけ奥へ進むと十尋程で右に曲り、それからが真暗闇で、中から入口を顧みると、僅かの光で波の躍動するのが見へるばかり。隨て洞内の物を識別する爲には、僅かの光りでは駄目なので、ボヽ切を丸めて石油を染いだ物を用ひた。點火すると同時に奥の方から、バタ／＼飛んで来たものがあるので思はずゾウフとしたが、それは言ふまでもなく蝙蝠群である。岩面から降り注ぐ水滴が、首筋に觸れてヒヤリとするのと、このバタ／＼の音を聞いては、自ら病に栗立ちを感ずる。手にした結火から立ち昇る濛々たる油煙を振りかざしながら、小舟を漕ぎ進めると、間もなく四米位の巨石が横はつてゐる。それを越えると砂礫の磯で、眼前には磊塊たる岩が崩れかゝり、それを五米程登ると、大きな岩の頂上に達する裂目はあるが、僅かばかりの細長い平らな處がある。そして其處には方六十糎許りの石造の御堂が鎮座して、中には穴洞大明神と記した札が一枚有つた。其處の天井は一番高く、恰も甲の頂の様な風に冠さつて居る。それから奥は磊塊たる岩塊で奥に六十糎許りの砂地が有つた。其處迄が入口から約四十尋餘の深さである。又途中から左側（山手）の岩蔭に、巾七十五糎位の裂隙が有つて一つの支洞を成して居る。之は全く普通では進み得ないが、入口に居つて心耳を澄ますと、遙に汀に打寄する潮の音を聞くことが出来る。

昔此の洞窟内の岩上で、鐵門上人（文字不詳）なる僧が、坐禪觀法の修行をしたと傳へられてゐるが、其の時代も傳記も詳にすることが出来ない。

因に前記谷地頭と稱するものは、今谷地頭町の低地が昔の噴火口で、維新前迄は小沼であつたため、埋立は殆んど底知らずといふ難工事であつた。それで沼の底は海に通じてゐるなどと噂せられた。勿論現在はすつかり埋立てゝ、立派な街衢をなしてゐる。

又給魂神社裏に高さ十六米餘、樹幹地上一米にて五米半の周りがある程の巨杉があつた。樹齢も一千年以上と傳へられてあつたが、その傍らに人工の横穴が有つた。明治の末期頃迄は少年達が、鱈ょ蠟燭を灯して探つたものである。山手に向つて穴を入ること十米位で、下方に掘り下げられた竪穴を梯子で降りると、それから山手に向つて更に十米以上も延びてゐる。此方は高さも高いが、別に中途から右手に向つて支穴がある。之は最初の入口の下方に延び光線は見えて

ゐるが、穴が低いので這入られない。で一體之は何であるかと當時種々取沙汰された。或者は函館戰爭の際脱走軍が隱れた所だ、或者は前記穴潤に被けるのだといふ。然し現船魂神社神職渡邊幸雄が、先代房松や現存の母堂から聞く所に依ると、某酒造業者が函館山から良質の地下水を得ようと、秘かに當地の官有地を掘つたのであるが、不幸にも水が出なかつたのだと言つてゐる。穴の構造から考へるとそれもどうかと思ふ。

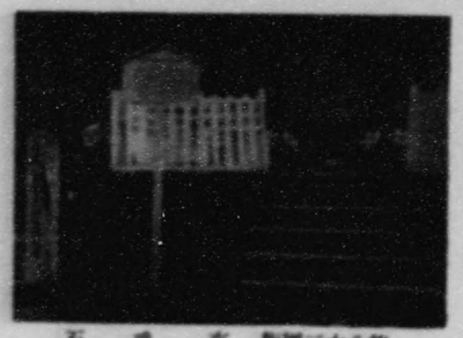
時事新報社から發行の雜誌少年に、これらの穴潤や、谷地眼、深穴などを取材として、桜美佐雄が要塞の兵隊さんが探險したと言ふ、實話を發表したことがある。

一二、夜鳴石

實行寺山門の「史蹟日持上人云々」の標杭を左に見て、本堂側を何處までも登ると、凡そ三百米にして、鶏冠石、御題目石又は御經石、そして俗說夜鳴石と稱する、高さ一米半巾一米三十糎許の碑のある處に達する。中央に南無妙法蓮華經と刻んである所から斯く呼ばれ、常に四五の參詣者がある。

史上には、永仁四年五月（皇紀一九五六）日蓮の高弟日持が、法華經を蝦夷地に弘通せんがため、函館に渡り函館山に登り、鶏冠形の瓦石の中央に御題目を、右に大日天王菩に後五百歳中廣宣流布と、左に大月天皇と墨書し、後石崎村に留錫し、四年にして滿洲に渡つたと傳へられてゐる。

文化十三年京都本滿寺の僧日龍が渡島し、此の山に登り墨書の磨滅を恐れて之を彫らした。之は水元澤を登り詰めた、藥師山から千疊敷に行く路の背に在つたが、明治三十年其筋から移轉を命ぜられ、翌年實行寺の背後地を許されて移されたのが現碑である。それ迄は彫も、丈け三米三〇餘、横三米餘、厚二米八〇餘あつて、寃然鶏冠に似てゐた爲、鶏



第八十三圖版　夜鳴石
昭和十四年十一月二十七日
函館實業學校今井慶雄撮影

冠石と呼びその所在地を鶏冠峯と云つた。所が之を何故夜鳴石といふかについては、鶏冠石であるから卽ち鶏だから鳴いたと云ふのであらうが、深瀨春一著和人傳說考に載する所を摘錄するに、

日持上人函館山鶏冠峯近くの宿に泊られた所、深夜女の聲と子供の聲と相混つて聞えて來るので、宿の主人に聽き糺すと、あれは或惡武士があの山の大石の前で、赤子を負うた女を殺し屍體をそこに埋めた。それ以來あゝして鳴く聲が毎夜聞えて來るのだとの答であつた。翌日上人登山してお經を上げ、背石面に御題目を書かれた。それ以來泣き聲は止んだ。（編年小學校佐藤忠三談）

背此碑は毎晩鶏鳴を發したが、文化十三年日龍上人が、碑面の墨書の減するのを恐れて石工に彫らした。それが完成しない中に二人の石工は死に、三人目で漸く出來上つたが、その石工も間もなく死んだ。然しそれ以來鶏鳴の聲は止んだと云ふが、之は碑石の鶏冠に似た所から聯想した創話である。三人目に出來上つたと云ふ事なども、お咄の型にはまつてゐる。

以上二つの傳說を比較すると、前者は永仁四年には鳴き聲は聞えなくなつてゐるが、後者に依れば文化十三年まで聞えたことになるし、前者は人間の聲、後者は鶏の聲になつてゐる。元來墨書が永仁四年から文化十三年迄五百二十年間も雨露に晒されて、殘存する事も有るべからざる事であり、之の建碑者が本滿寺の日龍であることは、現に碑面に彫刻さ

（岡田健三著函館百珍、函館圖書館藏）

ゐるが、穴が低いので這入られない。で一體之は何であるかと當時種々取沙汰された。或者は函館戰爭の際殺走軍が隱れた所だ、或者は前記穴蔵に被けるのだといふ。然し現船魂神社神職渡邊幸雄が、先代房松や現存の母堂から聞く所に依ると、某酒造業者が函館山から良質の地下水を得ようと、秘かに當地の官有地を掘つたのであるが、不幸にも水が出なかつたのだと言つてゐる。穴の構造から考へるとそれもどうかと思ふ。

時事新報社から發行の雜誌少年に、これらの穴潮ヤ、谷地眼、深穴などを取材として、松美佐雄が要塞の兵隊さんが探檢したと言ふ、童話を發表したことがある。

一二、夜鳴石

實行寺山門の「史蹟目持上人云々」の標柱を左に見て、本堂側を何處までも登ると、凡そ三百米にして、鶏冠石、御題目石又は御經石、そして俗說夜鳴石と稱する、高さ一米半巾一米三十糎許の碑のある處に達する。中央に南無妙法蓮華經と刻んである所から斯く呼ばれ、常に四五の參詣者がある。

史上には、永仁四年五月（皇紀一九五六）日蓮の高弟日持が、法華經を蝦夷地に弘通せんがため、函館に渡り函館山に登り、鶏冠形の巨石の中央に御題目を、右に大日天王並に後五百歳中廣宣流布と、左に大月天皇と墨書し、後石崎村に留錫し、四年にして滿洲に渡つたと傳へられてゐる。

文化十三年京都本滿寺の僧日龍が渡島し、此の山に登り墨書の磨滅を恐れて之を彫らした。之は水元澤を登り詰めた、臺師山から千疊敷に行く馬の背に在つたが、明治三十年其筋から移轉を命ぜられ、翌年實行寺の背後地を許されて建てられたのが現碑である。それ迄は形も、丈け三米三〇餘、横三米弱、厚二米八〇餘あつて、寫然鶏冠に似てゐた爲、鶏冠石と呼びその所在地を鶏冠峯と云つた。所が之を何故夜鳴石といふかについては、鶏冠石であるから即ち鶏だから鳴いたと云ふのであらうが、深瀬春一著和人傳說考に載する所を摘錄するに、

第八十三圖版　夜鳴石

昭和十四年十一月二十七日
註紅葉無垢今年建碑

日持上人函館山鶏冠峯近くの宿に泊られた所、深夜女の聲と子供の聲と相混つて聞えて來るので、宿の主人に尋き糺すと、あれは或惡武士があの山の大石の前で、赤子を負うた女を殺し屍體をそこに埋めた。それ以來あゝして鳴く聲が毎夜聞えて來るのだとの答であつた。翌日上人登山してお經を上げ、貴石面に御題目を書かれた。それ以來泣き聲は止んだ。（編生小沢校長藤忠三談）

昔此碑は毎晩鶏鳴を發したが、文化十三年日龍上人が、碑面の墨書の滅するのを恐れて石工に彫らした。それが完成しない中に二人の石工は死に、三人目で漸く出來上つたが、その石工も間もなく死んだ。然しそれ以來鶏鳴の聲は止んだと云ふが、之は碑石の鶏冠に似た所から聯想した創話である。三人目に出來上つたと云ふ事なども、お伽の型にはまつてゐる。

（岡田鐵三著函館百珍、函館圖書館藏）

以上二つの傳說を比較すると、前書は永仁四年には鳴き聲は聞えなくなつてゐるが、後者に依れば文化十三年まで聞えたことになるし、前書は人間の聲、後者は鶏の聲になつてゐる。元來墨書が永仁四年から文化十三年迄五百二十年間も雨露に晒されて、殘存する事も有るべからざる事であり、之の建碑者が本滿寺の目龍であることは、現に碑面に彫刻さ

れて居ることでも明らかなことである。

一三、大石之松

之は今の山の上大神宮の東北側向ひ、大石忠次郎宅地内に在つたもので、高さ六米程だが幹の周り三米、枝葉が三米四方にも伸び、樹齢数百歳を超える樹齢の名樹であつた。惜しいことには明治十二年の大火に焼死した。尙此の松の實生は現在図書館構内に茂つてゐる。

此の松を渋瀾春一著和人傳説考には、義經腰掛之松と言つて、義經渡島の際腰を掛けて休息した所だとしてゐる。

又雜誌ハコダテ（函館図書館蔵）には、

元此のあたりは、常盤町と云ふ所謂色街であつたが、其の名は此の松の色から名づけられたものであつた。今では僅かに常盤小學校と、常盤坂といふ名のみを止めてゐる。

又同誌中に、

常盤町あたりの遊女のことを何故ガノヂといふかと言へば、遊女が旅客の爲に伽羅を焚じて待つのが禮とされ、又嗜みともせられたので、いつの間にか遊女を伽羅と呼び、旅客同士は「おい行かんか」「どこへさ」「ほら伽之字の所へさ」などとの會話の中から、自然に「ガノヂ」に變形したものだと。

小樽市（小樽市役所調）

一、夜光の珠

雄多増毛の遠峰の頂をかすめて、東シベリアの野から突み切つた風が、藍色の日本海上を辷つて、ポツカリと洋上に浮んだ島根に打ち寄せるところ、岩を噛む不斷の濤聲、波に戯れる鷗の叫び、さては紫夷松の梢に奏でる自然の琴の音等――大きな原始的な光りと、聲と震めきとが漲つてゐる天地があつた。愈酷な文化はそれらの、天然の詩と聲と光りとを蹂躙して、苫屋數戸のアイヌ村も今は人口十六萬の大都會となり、その名もヲタルナイから小樽市に變つた。その小樽港内の西北方沖合に大小の岩が二つあつた。これを立岩と言ひ、小樽の名勝として名高かつたが、昭和二年の海面埋立で姿を消した。この立岩の出來事である。陸に栽培する餘地を惠まれなかつたヲタルナイのアイヌ達は昔、荒海に獨木舟を乘り入れて漁りする事を、生業としてゐたのであつた。

西して西山に沈む夕陽の影を追うて、幾艘もの小舟が沖から夕の團欒へと急いで漕いで來る時、きつと岸邊の岩上に立つて、愛人の歸りを待つ一美女の姿が見られた。入潮へ一艘づゝ繫留されて行く小舟の中に、その人の姿を見付けると、彼女はイソ〳〵と渚に下り立つた。それと同時に逞しい腕と體がヌーツと乙女に迫る、やがて二人は肩もすれ〳〵に老いた父一人が寂に枯枝をさしのべて、待つてゐる家路を辿るのであつた。

「いゝ娘になつたなあ、このヲタルナイは愚か近郷近在どこにだつて、ペチカ程の美しい娘があらうか」漸く夜の帳に覆はれて行く二人を見送つて、中年を少し過ぎたアイヌが言ふ。「全くだ、それにイサヤコの節節の强くなつたこと、もう爺さんも安心だ」と他の一人、口やかましい牧等の間でも二人の仲は許されてゐた。

「澤山とれたね」青年の背の籠に躍る金鱗をのぞいてペチカはにつこりとした。それと同時に眼の青い色の黒い見る

から男々しい、イサヤコの一文字に結ばれた唇もかすかにゆるんだ。一日中に流した汗の代償は、愛する許嫁のこの女のこの言葉と微笑とで完全に癒られたのだ。

彼女は實際美しい女であつた。肌の色は白蠟の様に、白く冷たい感じのする程滑らかであつた。彼女の眼なざしはどことなく力強い魅力を持つてゐて、顔を見合した男は、何かしら強い壓迫を感ずるのであつた。風や濤が眞紅に紅葉して、秋も更けたある夜のことだつた。五丁ばかり沖へ突き出た岬――全體が岩で出來てゐて水から五人の斧で切り下げられた様に、屹立してゐる岬の突端に人々は怪異な光りを見た。夜が晝の光りを追ひ盡して、空に銀砂の様な星が瞬き出すと、岬の怪光――二つの怪光は物凄く光るのであつた。「何んだらう」――「夜光の珠だ」「海の神様だ」疑問は臆測を生み、推斷は神秘に落ちた。イサヤコはぢつと燈邊に端坐して、暗と光りとの交話を見つめた――怪異！彼は怪光を思ふ度に、異様の緊張さを覚えた。

「兄さんあの夜光珠が欲しいわ」ペチカはイサヤコの膝にすがつて言つた。「お前はあれを玉だと思ふのか」「皆は神様だつて言ふけれど私は珠としか思へません」

「愚かしい事を言ふな、命のない玉なら正體を見屆けようとした者が、怪病に取りつかれる事もあるまいに」――多が來た。雪は萬物を埋めた。物凄い暴風、煙と降る粉雪、小山の様にくづれる瓦礫、夜もすつかり更けきつた逢魔の刻、岬の怪光は物凄く光つた。ペチカはすつくりと岩上に立つた。髪と衣は狂女のそれの様に亂れ吹かれてゐた。一波又一波彼女の體は、搖返す瓦礫の下に苦もなく呑み盡されたのであつた。怪光はいと強く光つた。イサヤコは苦しい夢からさめた。そして傍に臥してゐるであらうペチカを見た。あつ……正夢であつたか？廣からぬ家内中の何處にもペチカの姿は見えなかつた。「ペチカよペチカ」狂氣の如くなつた青年は戸を排して、雪野に出た。併し彼は彼の全身を埋めてしまふ雪の嵐、一歩も歩む事が出來なかつた。「ペチカ……」その聲は空しく吹雪の中に消えた。彼は詮方なく家に入つた……

「オー、ペチカお前はこの吹雪の烈しい夜にどこへ行つてゐたんだ」

「知らぬ間に海邊まで」

彼は不思議な恐しいある物の怪が、自分達を呪うてゐる事を意識して、ぞつと總身の震へるのを感じた。「體に障ると惡い、早く御休み」彼はペチカを抱く様に臥床に導いた。彼女の體は氷の様に冷たかつた。やがて魔の棲家は輝かしい朝陽に奪はれて吹雪も止んだ。

「兄さん夜光珠が欲しい」ペチカは同じことを繰返した。「玉ではない、魔物だ」イサヤコは強く、女の言葉を否定した。そして事なかれかしと天に祈つた。夜になるとペチカは海岸に行つた。そして波のしぶきが彼女の體にかゝると、彼女の姿は忽然と波間に吸ひ込まれた。そんな夜が幾夜も續いた。

ペチカの容貌は一層蒼味を帶びて來た。肌が氷の様に冷たくなつた。それでゐて彼女の美しさは光りを發する程輝しくなつた。ペチカの妖美になつて行つたのに反して、イサヤコは人が變つた様に憔悴して行つた。理智の光の溢れてゐた青い瞳には、深い憂ひの雲が覆ひかぶさり、逞しい雙の腕は肉落ち骨現れて、漕ぐことに働くことにかけては部落の誰にも一歩も負をとらなかつた、昔の氣力はすつかり拔けてしまつた。口にこそ言はね、彼イサヤコの命はペチカの愛だつた。それだのにペチカの様子には、彼を求め乍ら拒んでゐる矛盾が見られたのだ、怪光の呪、おゝ、あの怪光の呪に相違ない、

ペチカを救ひ自分を救ふ爲にあの怪光の正體――さうだ、よしこの身は怪光と共に亡びやうとも、ペチカを救ひ得たならば幸福だ、彼はさう決心して靜かに月神に祈つた。

「兄さんあなたは、あの夜光の珠を怪しい物だと思つてゐるのね、止めて下さい。あれは夜光の玉に違ひありません。決して〳〵怪しい魔物なんかぢやありません」

「いや、お前は、――怪光に魅せられたお前は、自身があの怪光に苦しめられ呪はれてゐる事を知らないのだ。見よ、あの空に輝く月がまん圓になつた夜、俺は日頃お前のほしがる夜光を引つ捕へてやらう。曇りない月の光を力にきつと怪物を退治て見せる」ペチカはイサヤコの目に、人間にでなければ見られないある強い力――總べての妖魔惡邪を亡ぼさないではおかない、力が現はれてゐるのを見た。

「兄さん許して下さい、あの夜光を亡ぼさうとなさる事を……あの光は私の命です、私の體は、あなたに捧げました。けれど私の心はあの夜光珠に奉はれたのですもの、私を哀れと思召したら何卒そんな恐しいことをしないで下さい」

「いやお前は怪光を玉と思へばこそ、その世にも得難い玉に魂を奉はれたのだ、怪光が魔物である事を知つたなら、お前の魂は屹度救はれるのだ。」

月が一夜一夜ふくらみを増して行つた。それにつれてペチカの悶え嘆きは加はつた。濃藍色の海の水が暗黑に變つて行く頃、ペチカは岸邊の岩上の人になつた。……人間としての此の世の最後、人間の愛を受け人間を愛し、性劣りしものにして人間の姿を偽りし身も、今度は假面をぬいで元の姿に歸らねばならぬ。彼女は思ひ餘つて岩上に體を投げ出して泣いた。今宵を最後の人間の姿、彼女は空虛の目を上げて白い手、白い足を今更のやうに見入つた。けれど何んの情もない黑い波は、どぶりと岩を打つて彼女の體をしぶきで蔽らした、と彼女は忽ち足から海の中へ吸ひ込まれてしまつた。折しも月は雲間をぬけた。水晶も驚がしく未練氣に女は我の中を覗みた。體一面に白い鱗が光つてゐた。決心の色を面に現はして、イサヤコは單身小舟を怪光に漕ぎよせた。漸く間近く迫つた彼は、あはれ息苦しくなつて意識を失ひかけた。人間の最後の偉大な力が彼に超人的奮起を促さなかつたら、彼は恐らくその魔怪光の正體すら見極めずに死んだであらう。彼は命を賭して怪光の下に攀上つた。燦々と光る二つの玉、それは見るも恐ろしい大蛇の眼であつた。彼は衆ねて用意の小刀を振り上げて、唯一打と打ち下した。大蛇の雙の目は雷光のやうに強烈に光つた。毒氣が彼の體を包んだ瞬間、彼はかすかにわな〳〵震へながら、傍にとぐろをまいてゐる小さな白蛇を見た。白蛇の目には涙が光つてゐた。確かに手應へのあつた一打の後、彼はすつかり意識を失つてしまつた。主のない小舟は波のまに〳〵たゞよつてゐた。

二、大蛇を殺した話

小樽手宮の山の西北の裂け目に、昔大蛇が棲んで居つた。長さ七八丈、太さ四斗樽位もあつて、村人に怖がられ、喰はれて死ぬ者も多かつたので、村人たちは牛羊を供へて、祭りをして見たが、何の効もなかつた。

その大蛇が、人の夢枕に立つて、十二三歳の無垢の少女を食ひたいといつたとやらで、村人たちも持餘して居つた。

しかし相變らず害をするので、已むを得ず、賤しい者の子や、罪ある家の子などを貰ひ受けて養ひ置き、八月になると、祭りをして大蛇の穴の處へ其の兒を捨ることにした。すると大蛇が出て來て呑んで了ふといふ風で、年々それが例となり、すでに九人の少女を供へたが、十人目の少女が入用となつてそれを募り探すことになつた。

イワナイの酋長には、男子が無くて、六人の女兒が居つた。その年若い女兒が自分で犠牲にならうと申し出た。父母は許さう筈もないのに、娘が言ふには、「不仕合で、男の子が一人も無くて、女の子ばかり六人も有ります。有つても、無いと同樣かと存じます。女の子では御兩親の爲に何の御役にも立たず、此方から御助け申し上げられないばかりでなく、衣食の費も無益であり、生きて居る甲斐もございませんから、早く死にたいと存じます」と意外な覺悟を聞いて、父母は尙更手離しかね、娘の願を許さなかつたところ、娘は家を脫け出して墓に應ずるといふ始末、とても思ひ止まらせる譯にゆかない。

かくて娘は、いよ／＼犠牲となることに決つたが、思ふ仔細ありと見え、切れ味良きマキリ（土語小刀）と、蛇を食ふ犬とを請ひ受けることにした。

八月となつた。娘は大蛇を祭る穴に入り、愼にはマキリを忍ばせ、逞しき犬を連れ、先づ鹿の肉を穴の口に供へた。

やがて這ひ出た大蛇の眼は大きな鏡の如く、穴の口なる肉の香を嗅ぎ、これから先へと喰ひつく、樣子を驚と見すまして少女はと、ぞと犬を放つた。必死の猛犬に噛みつかれて急所の痛手堪へ難く、さしもの大蛇も、苦しげにのたうつて、とう／＼醜き亡骸を曝した。娘は大蛇の穴を探り、前に食はれた九人の少女の髑髏を取出して言葉も涙く「如何に女の身なればとて、氣の毒にも大蛇に喰はれるとは、弱いにも程があります」と叱り氣味に言ひ放ち、其のまゝゆる／＼歸つて來たといふ。

三、オタルナイの熊

今の小樽市外朝里村、舊オタルナイのアサリと云ふアイヌ部落に、一人のピリカメノコ（美しい女アイヌ）があつた。

ある時このメノコが附近の山から出て來た、オヤヂ（熊）の爲に殺されてしまつた。さあ大變部落のアイヌ仲間で美の樣化か愛の化身かと讃へられてゐた、ピリカメノコが山のオヤヂの餌食となつたので、部落長の怒は絶頂に達し、總動員を以て熊狩を開始する事となつた。速日連夜草を分け林を探し、山谷を逸潰しにして遂に目指す當のオヤヂを美事に、ブシ矢を以て射止める事が出來た。アイヌ間には凱歌が擧がつた。それにしても憎んでも餘りあるはこのオヤヂ、唯とのまゝでは腹が癒えぬ、此奴の上顎と下顎を八つ割にし、土中に埋めて思ひを晴らすべしとの議が一決、正にその熊の口を割かんとした。

この情報を耳にしたのは、當時クマウスに本居を構えてゐたオタルナイ一帶の酋長であつた。それは山のオヤヂに對してあまりに非禮な事である。我々同族は昔から熊に對して熊祭まで催して、その禮を盡してゐるではないか、如何に憎い熊でも、既に射止められ一命を失うたものは、その罪が消えたるもの、それを死屍に鞭打つが如きことを爲すは、熊の靈に對し相濟まざる所である。これは看過し得ぬと、早速現場に駈けつけ、猛り立つアイヌを制し、死者に對しては相當禮を以て當るべしと說いたが、餘憤容易に治まらざるアサリアイヌは、仲々肯じようとしないので酋長は、然らば我が家に傳來の寶刀五十本あり、これを汝等に分與すべければ、その熊の屍を我に讓れよと再三說得、漸く彼等の承諾を得、寶刀五十本を我家より取寄せて彼等に與へ、酋長はその熊の屍を我家に運んだ。そしてその首を刎ね高く竿に刺して揭げ、カヤイに手向け禮拜して曰く、汝はその兇惡の罪により死して後までも非禮の取扱を受け、山のオヤヂの恥を曝さんとせるを、我今傳家の寶刀を以てこれを止めさせ、斯くカヤイに捧げてその靈を弔ふ事となれり。汝願あらばよくこれを享け、今後我が子孫に對し危害を加ふる事勿れと。

この事あつて以來、この酋長の家では永く子孫に至るまで、熊の危害を蒙つた事はないと云ふ。

四、有幌稲荷神社の由來

小樽市有幌町に平山と云ふ、舊家が現存してゐる。此の家の裏に多くの傳說を有した、稲荷神社の小祠がある。

昔この一帶は山で海に面し、斷崖絶壁をなして居つた。丘は自然林を以て覆はれ、狐狸の巢窟であつたと傳へられてゐる。此の丘に大きな穴が一つあり、穴口に大きな櫻の古株が、穴を掩うて獸の棲居として申分なかつた。此の穴に一匹の古狐が棲んでゐた。

昔からの言傳へで當時の村の人々は、狐は稲荷樣だから大切にしなければならぬと確く信じてゐた。此の附近の漁夫等は漁があるやうにと願つて、始終赤飯や鯡を供へたり、其他色々な珍らしい供物で、穴の周圍には食物の絶えた事がなかつた。場所もよく其の上食物も豐富であつたので、狐も他所に行かないで、村民に馴染まれて居つた。又面白い事には此の狐が穴から顔を出して外を眺めてゐると、必ず天氣が變り、雨になるか風になるか何か變り事があるとして、漁夫等は例へ一點の雲もない好日和で、海は油を流した樣に凪いで居つても、舟を出すのを躊躇し、又どんなに天氣が惡くとも此の稲荷樣が顔を出さないと、漁に出かけるのに躊躇しなかつた。此の樣に長く村民に馴染み信仰されて居つたが、有名な有幌の大火の爲此附近も焦土と化し、禿山となり、山林もなくなり櫻の株も焼けてしまつた。それ以來こゝには最早狐の姿を見ることが出來なかつた。村の人々は非常に落膽し悲しんだ。それでこゝに狐を祀つて、稲荷神社を建立したのである。現存の小祠がそれである。

五、オタモイ地藏

オタモイは小樽市を距る西南一里、後志國忍路郡塩谷村にある。「オタ」は砂、「モイ」は「ムイ」の變化した語であつて、濱渚しくは灣、ともにアイヌ語で、往時はこの邊一帶が砂濱で、しかも灣入してゐたので我オタモイと云ふ樣になつた。

此の海岸にあるオタモイ地藏は、多くの傳說を有つてゐる。

今を去る二百七十餘年前、即ち寛文七年には鯡漁場忍路場所は、松前藩士蠣崎喜藏の給所で、オタモイは其の給所の一部であつた。漁場請負人は近江國住吉屋傳右衛門（姓は西川）で、明治二年まで漁業を營んで居つた。

弘化四年、今より九十餘年前の出來事であつた。北海道もそろ〳〵春めいて來た、四月二十三日の曉方から天候急變し、西北の强風となり夕方には大時化となり、翌二十四日の朝に至つて漸く鎭まり、海面は何事もなかつた如く滑らかになつた。漁夫等は何か濱邊に異狀はなかつたかと見巡りをした。

一大變事！　妙齡婦人の溺死體が、砂濱に打ち揚げられて居つた。此の婦人は非常な美人であつて、しかも姙娠七八ケ月乳が脹れて少々乳汁が流れ出て居た。漁夫等も憐れみを催し、一同相談の上今の地藏尊のある少し下手の小丘に葬り野菊などを折つて、手向のしるしとしてその墓を慰めた。

此の椿事があつた翌嘉永元年、此の漁場の請負人、住吉屋傳右衛門の漁場支配人德兵衛なる者が、この話を聞き惻隱の情を起し、國元江州で三尺餘の花崗石の地藏尊を作らしめて、この婦人供養のため建立した。これが即ち今のオタモイ地藏尊である。最初の堂宇はその後三回程移轉し、現今の地點は昭和三年五月中、地主、堂守富治の父親村上市三郎の建立したものである。

それ以來乳不足の女は一度願すれば、乳が泉の如く出るとて婦人の參詣者多く、近來に至つて諸病に慈願ありと、

平素は一日数百人以上、六月二十四日の命日には幾千人の參拜者が引きも切らず、近郷は勿論遠く旭川方面よりも、山道絶壁斷崖の難所を意とせず、賽する者踵を接する盛況である。

室蘭市（室蘭市役所調）

一、イタンキ濱の傳說

何時の頃であつたか、其の年は日高一帶は海は不漁、陸は凶作、山々の鹿狐、コクワなどさへ實らず、獸すらも棲家をかへた位の凶年であつた。アイヌ達は飢ゑて木の根や草の根を啗つては、僅かに露命をつないでゐた。

夏が過ぎ早や秋も過ぎた。

「エトモコタンは景氣がいゝぜ」

噂雲ふとはなしにさうした話が、その年も多近くになる頃、日高一帶のアイヌ達に傳はつた。

「どうせ今に草も木も食へなくなるんだ。此の多に凍え死にするよりはエトモコタンに行かうぜ」といふので、日高のアイヌ達はエトモコタンさしてやつて來た。シュバナもその一人だつた。日高から村々を過つて這ふやうにしてシラヲイコタンまでやつて來た。

土地のアイヌに聞くと、エトモコタンは景氣がいゝどころか、ガスが多くて惡性の流行病が流行つて、そのため命を殞すものが毎日數知れず、殊にエトモの都オハウシナイは、天然痘が流行つて漸く生き殘つた者達も、イヨシサンベ（湖畔山）の原始林に隱れてゐるだけだとの事であつた。シュバナはがつかりしてもう行くことも出來ず、歸ることもならずつかり落膽したが、シラヲイコタンで買つたトド（海獸）の腸をかぢりながら、どうやらイタンキまで辿りついた。

それはもう夕方だつた。雄大な風光は今も昔も變りはない。太平洋に臨んだ水か雲か涯しもなく續く、海邊にどつかり坐つたシュバナは、疲れ切つた體にもう一度大きな目を開いて暮れ行く沖を見た。所が、どうだらう、そこには大きな鯨が流れて來るではないか、

「フンベ（鯨）！　フンベ」

シュバナは飢も疲れもうち忘れて大聲に叫んだ。そして浪のまに〳〵流れて來る鯨を、岸邊に立つて今か今かと待つてゐた。

夜はだん〳〵と更けて身を刺ふ寒さに、シュバナは流木を集めて火を焚いた。そしてあの五大なフンベが、岸に流れ寄せられる朝を待つた。そして只一人であの大きなフンベをとつた時の氣持を、いろ〳〵に心に描いても見た。けれども夜明けに及んでも、その鯨は岸には寄つて來なかつた。次の日もシュバナは鯨の來るのを待つた。

「あのフンベさへ自分のものになつたら」

と、たゞそればかりを待ちくたびれてゐたが、また其の日もとう〳〵暮れた。寒さと飢とに戰ひながら、今はもう木片もすつかり焚きつくして、自分の持つて來たイタンキ（椀）までも燒いて暖をとつた。

第八十四圖版　イタンキ濱とフンベレルマ（岩）

平素は一日數百人以上、六月二十四日の命日には數千人の參拜者が引きも切らず、近郷は勿論遠く旭川方面よりも、山道絶壁斷崖の難所を厭とせず、寄する者踵を接する盛況である。

室蘭市（室蘭市役所調）

一、イタンキ濱の傳說

何時の頃であつたか、其の年は日高一帶は海は不漁、陸は凶作、山々の獵獲、コタツなどさへ言らず、獄ずらも棲家をかへた位の凶年であつた。アイヌ達は飢ゑて木の根や草の根を掘つては、僅かに露命をつないでゐた。

夏が過ぎ早や秋も過ぎた。

「エトモコタンは景氣がいゝぜ」

誰云ふとはなしにさうした話が、その年も多近くになる頃、日高一帶のアイヌ達に傳はつた。

「どうせ今に草も木も食へなくなるんだ。此の多に凍え死にするよりはエトモコタンに行かうぜ」といふので、日高のアイヌ達はエトモコタンさしてやつて來た。シュバナもその一人だつた。日高から村々を過つて這ふやうにしてシラヲイコタンまでやつて來た。

土地のアイヌに聞くと、エトモコタンは景氣がいゝどころか、ガスが多くて惡性の流行病が流行つて、そのため命を殆すものが毎日數知れず、殊にエトモの部オハウシナイは、天然痘が流行つて漸く生き殘つた者達も、イヨシサンペ（湖盤山）の原始林に隱れてゐるだけだとの事であつた。シュバナはがつかりしてもう行くことも出來ず、歸ることもならずすつかり落膽したが、シラヲイコタンで貰つたトド（海獸）の鍋をかぢりながら、どうやらイタンキまで辿りついた。

それはもう夕方だつた。雄大な風光は今も昔も變りはない。太平洋に臨んだ水か雲か涯しもなく續く、海邊にどつかり坐つたシュバナは、疲れ切つた體にもう一度大きな目を開いて暮れ行く沖を見た。所が、どうだらう、そこには大きな鯨が流れて來るではないか、

「フンペ（鯨）！　フンペ」

シュバナは飢も疲れもうち忘れて大聲に叫んだ。そして浪のまに〳〵流れて來る鯨を、岸邊に立つて今か今かと待つてゐた。

夜はだん〳〵と更けて身を裂ふ寒さに、シュバナは流木を集めて火を焚いた。そしてあの巨大なフンペが、岸に流れ寄せられる朝を待つた。そして只一人であの大きなフンペをとつた時の氣持を、いろ〳〵に心に描いても見た。けれども夜明けに及んでも、その鯨は岸には寄つて來なかつた。次の日もシュバナは鯨の來るのを待つた。

「あのフンペさへ自分のものになつたら」

と、たゞそればかりを待ちくたびれてゐたが、また其の日もとう〳〵暮れた。寒さと飢とに戰ひながら、今はもう木片もすつかり焚きつくして、自分の持つて來たイタンキ（椀）までも焼いて暖をとつた。

第八十四圖版　イタンキ濱とアンペルマヤ（岩）

そしてシルパナは此の濱で鯨の來るのを待ちくたびれつゝ、とろ〳〵次の朝冷たいむくろとなつてしまつた。

今も尙イタンキの濱に寄せては返す波に洗はれ乍ら、鯨の姿そのまゝの岩がのこつてゐる。ランベシルマと云ふのがそれである。イタンキと云ひランベシルマと云ひ、その昔のアイヌの物語として、その名殘りを止めて居るのである。

二、輪西の語原

輪西はワヌシの轉訛で、ワヌシは更にハルウシの轉訛である。ハルは食料のことで「コイカタシュハルウシ」と呼ばれたのが、今の輪西で「雨の食料川」といふ意味であると云はれてゐる。

三、絵鞆

エトモは室蘭市の西方に位する小さな村であつたが、今ではもう市の中に含まれてゐる。エルムはアイヌ語の鼠だと言ふ。絵鞆にはその言語分ネズミが澤山居た。それでエルムと言ふ村の名にしたのが、月日の經つに從つて、エトモ村となつたので、今日では村が更に絵鞆町となつたのである。

四、祝津

祝津は二十五六年前から開けたのだといふが、その前からアイヌが澤山住んでゐた。

或時大黒島をはさんで、濱邊のアイヌと對岸のアイヌとが戰をしたところ、濱邊のアイヌが、シタジリをしたことが度々あつた。それでしくじり町と名が付いたと云ふ。

又シュクジシと言ふのはアイヌ語で、アサジキと言ふネギに似た草のことで、アサジキは當時今日の祝津の、到る所に生えてゐた。それで祝津志といふ名をつけたのださうである。

五、小内

小橋内といふ名の起りについては、次のやうな言ひつたへがある。昔この邊一帶に澤山の土人が住んで居た。そして魚を捕つたり獣を追つたりして幸福な日を送つて居た。ところが、或年疫病が大變流行して、今まで丈夫で幸福に暮して居たのに、このみにくい病氣に惱つて、動けなくなつたり、死んだりする者が數へ切れない程あつた。そのため次第に人が減つて來た上に、病に罹らない人達もこの病氣を恐れて、他の地方へ逃げてしまつて、終ひには誰も住む者がなくなつた。そこで誰云ふとなしに此の邊を、オハウシュナイといふやうになつた。オハは宗谷、ウシュナイは澤又は谷川の意で、卽ちオハウシュナイとは、人の住んで居ない澤といふ意味である。

六、大磯山（坊主山）

坊主山を又大磯山とも言ふ。大磯山と何故つけたかといふと次の様な傳說がある。

祝津志が開けない時の事である。ある時、室蘭湾に軍艦が入港した。大黒島附近まで來た時、土地のアイヌが大變驚き防禦につとめた。

大變激しい戰となつたさうであるが、何しろ相手は新兵器、こちらは弓矢を用ひて應戰したのであるから忽ち破れ、これは大變と樹の中にかくれた。ところが酋長が時ならぬ時に嘘をしたので、遂に發見され、みな殺しにあつてしまつた。戰が濟んだ後で、坊主山が崩れた時、大磯が落ちたので、それから大磯山と呼ぶやうになつたのだと云ふ。

第八十五圖版　大磯山（坊主山）

そしてシュバナは此の濱で鯨の來るのを待ちくたびれつゝ、とろ〳〵次の朝冷たいむくろとなつてしまつた。

今も尙イタンキの濱に寄せては返す浪に洗はれ乍ら、鯨の姿そのまゝの岩がのこつてゐる。フンベシュマと云ふのがそれである。イタンキと云ひフンベシュマと云ひ、その昔のアイヌの物語として、その名殘りを止めて居るのである。

二、輪西の語原

輪西はワヌシの轉訛で、ワヌシは更にハルウシの轉訛である。ハルは食料のことで「コイカタシュハルウシ」と呼ばれたのが、今の輪西で「鮭の食料川」といふ意味であると云はれてゐる。

三、絵　鞆

エトモは室蘭市の西方に位する小さな村であつたが、今ではもう市の中に含まれてゐる。エルムはアイヌ語の鼠だと言ふ。絵鞆にはその昔鼠分ネズミが澤山居た。それでエルムと言ふ村の名にしたのが、月日の經つに從つて、エトモ村となつたので、今日では村が更に絵鞆町となつたのである。

四、祝　津

祝津は二十五六年前から開けたのだといふが、その前からアイヌが澤山住んでゐた。

或時大黑島をはさんで、濱益のアイヌと對岸のアイヌとが戰をしたところ、濱益のアイヌが、シタジリをしたことが度々あつた。それでしくじり町と名が付いたと云ふ。

又シュクジシと言ふのはアイヌ語で、アサジキと言ふネギに似た草のことで、アサジキは當時今日の祝津の、到る所に生えてゐた。それで祝津志といふ名をつけたのださうである。

五、小　内

小橋内といふ名の起りについては、次のやうな言ひつたへがある。昔この邊一帶に澤山の土人が住んで居た。そして魚を捕つたり獸を追つたりして幸福な日を送つて居た。ところが、或年疱瘡が大變流行して、今まで丈夫で幸福に暮して居たのに、このみにくい病氣に罹つて動けなくなつたり、死んだりする者が數へ切れない程あつた。そのため次第に人が減つて來た上に、病に罹らない人達もこの病氣を恐れて、皆他の地方へ逃げてしまつて、終ひには誰も住む者がなくなつた。そこで誰云ふとなしに此の邊を、オハウシュナイといふやうになつた。オハは空虛、ウシュナイは澤又は谷川の意で、卽ちオハウシュナイとは、人の住んで居ない澤といふ意味である。

六、大砲山（坊主山）

坊主山を又大砲山とも言ふ。大砲山と何故つけたかといふと次の樣な傳說がある。

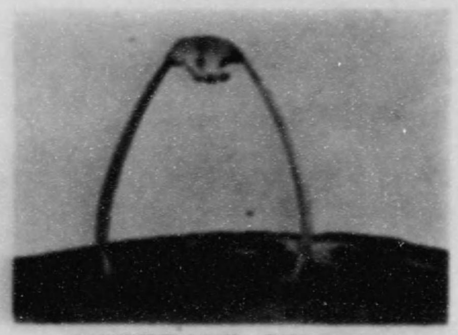
祝津志が開けない時の事である。ある時、室蘭灣に軍艦が入港した。大黑島附近まで來た時、土地のアイヌが大變驚き防禦につとめた。

大變激しい戰となつたさうであるが、何しろ相手は新兵器、こちらは弓矢を用ひて應戰したのであるから忽ち破れ、これは大變と壕の中にかくれた。ところが酋長が時ならぬ時に壕をしたので、遂に發見され、みな殺しにあつてしまつた。戰が濟んだ後で、坊主山が崩れた時、大砲が落ちたので、それから大砲山と呼ぶやうになつたのだと云ふ。

第八十五圖版　大砲山（坊主山）

七、貝塚

給別呼一帯は到る處に貝塚がある。特に給別小學校庭の貝塚は、代表的のものとされてゐる。昔この邊一帯に、非常に大きな飢饉が起つたそうである。その時此の邊に住んでゐた土人は喰ふに食なく、毎日海岸から貝を採つて來ては食べて暮した。當時食がなくて死んだ人が多かつたが、中には貝を調理せずそのまゝ食べたので、腹を痛めて死んだものも隨分あつた樣である。その當時の貝が、現在貝塚となつて遺つてゐるのだと云はれて居る。



第八十六圖版　給別小學校庭貝塚

釧路市（釧路市役所調）

一、番會所のチヤシ

佐野碑園は元會所の跡である。其の丘の西端は現在崩されて旅亭さへ建てられてゐるが、元は立派なチヤシであつた。トイチヤシ（土で築き上げた砦の意）といつて、釧路アイヌの酋長の居所であつた。東蝦夷日誌に、

久摺會所の後にチヤシコツあり、此城にはオニトムシト云へるもの住居せし由、今素燒の陶器又鐵石、雷斧石等を掘出す、さてチヤシコツの故を乙名なるメンカクシに尋ねに、我等が先祖なるよしにて左の如く答ふ

初代オニトムシ、此者は天より下り土人の娘を妻として上なる城に住せしと、オニシは雲、トウシはウウシにて下ると云ふ義にてあり、その妻の名は知れざる由云々

今のアイヌに尋ねても、そんな詳細な話を知つてゐる者はない。只トイチヤシがあつて偉い酋長が居つたといふ話だ、とそれ位である。

二、春採湖畔のポンチヤシ

春採湖の北岸に小規模のチヤシがある。今のアイヌは之をポンチヤシ（小砦の義）といつてゐるが、一名ウライケチヤシ（戰爭のあつた砦）ともいつてゐる。

東蝦夷日誌には、初代オニトムシの子トミカラアイノが築いて住居してゐたが、或年根室、厚岸、十勝の三方から攻められて城が陷り、守將後サルシナイに築いて移つたとあり、現今のアイヌは、昔あのチヤシで戰爭があつたが城が陷り、守將は一時寶物を附近の岩窟に隱して、部下を率ゐて逃げたといひ傳へてゐる。その寶物を隱した岩窟は、オンネポル（大きな穴の義）といつて殘つてあつたのだが、築港工事の石を採つた時毀されたと。

第八十七圖版　春採湖畔のポンチヤシ

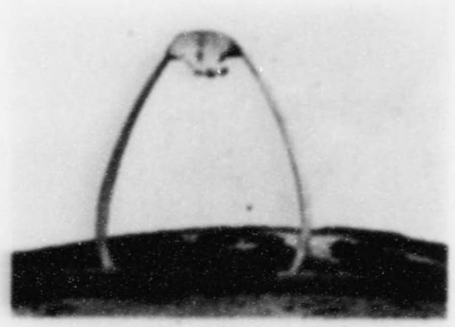
三、モシリヤのチヤシ

東蝦夷日誌によれば、同じく二代目の酋長トミカラアイノが、春採湖のポンチヤシが陷つたので、此處に築いて住んでゐたが、再び敵に攻められたので、此の時は前の谷地

第八十八圖版　モシリヤのチヤシ

七、貝塚

縫栖岬一帶は到る處に貝塚がある。特に縫栖小學校校庭の貝塚は、代表的のものとされてゐる。昔この邊一帶に、非常に大きな飢饉が起つたそうである。その時此の邊に住んでゐた土人は喰ふに食なく、毎日海岸から貝を採つて來ては食べて暮した。當時食がなくて死んだ人が多かつたが、中には貝を調理せずそのまゝ食べたので、腹を痛めて死んだものも隨分あつた相である。その當時の貝が、現在貝塚となつて遺つてゐるのだと云はれて居る。



第八十六圖版　縫栖小學校前貝塚

釧路市（釧路市役所調）

一、蔡蕃所のチヤシ

佐野碑関は元會所の跡である。其の丘の西端は現在崩されて旅亭さへ建てられてゐるが、元は立派なチヤシであつた。トイチヤシ（土で築き上げた砦の意）といつて、釧路アイヌの酋長の居所であつた。東蝦夷日誌に、

久摺會所の後にチヤシコツあり、此城にはオニトムシト云へるもの住居せし由、今素燒の陶器又鏃石、雷斧石等を掘出す、さてチヤシコツの故を乙名なるメンカクシに審すに、我等が先祖なるよしにて左の如く答ふ

初代オニトムシ、此者は天より下り土人の娘を妻として上なる城に住せしと、オニシは雲、トウシはウウシにて下ると云ふ義にてあり、その妻の名は知れざる由云々

今のアイヌに尋ねても、そんな詳細な話を知つてゐる者はない。只トイチヤシがあつて偉い酋長が居つたといふ話だ、とそれ位である。

二、春採湖畔のポンチヤシ

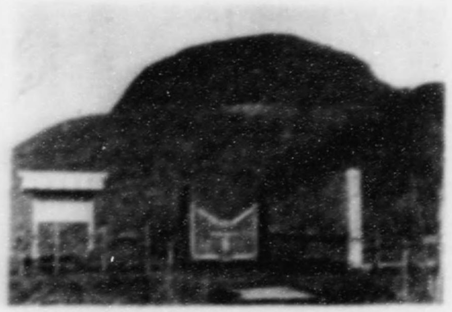
春採湖の北岸に小規模のチヤシがある。今のアイヌは之をポンチヤシ（小砦の義）といつてゐるが、一名ウライケチヤシ（戰爭のあつた砦）ともいつてゐる。

東蝦夷日誌には、初代オニトムシの子トミカラアイノが築いて住居してゐたが、或年根室、厚岸、十勝の三方から攻められて城が陷り、守將後サルシナイに築いて移つたとあり、現今のアイヌは、昔あのチヤシで戰爭があつたが城が陷り、守將は一時寶物を附近の岩窟に隱して、部下を率ゐて逃げたといひ傳へてゐる。その寶物を隱した岩窟は、オンネポル（大きな穴の義）といつて殘つてあつたのだが、築港工事の石を採つた時發されたと。

第八十七圖版　春採湖畔のポンチヤシ

三、モシリヤのチヤシ

東蝦夷日誌によれば、同じく二代目の酋長トミカラアイノが、春採湖のポンチヤシが陷つたので、此處に築いて住んでゐたが、再び敵に攻められたので、此の時は鶴の谷地



第八十八圖版　モシリヤのチヤシ

を風となして防ぎ勝利を得たとある。今のアイヌには其の戦爭の模様等に就て知つてゐるものなく、只戦爭があつて勝つたとのことであるといふ位である。

四、怪懸のチヤシ

昔カツラコイの酋長は立派な鎧を持つてゐた。人に取られぬやうにチヤシの其中に、竿を立てそれを吊して置いた。それが大變評判になつて北見の酋長が之を欲しがり、多くの若者をやつて盜ませやうとしたが、警戒が嚴重で如何ともすることが出來なかつた。色々考へた末、姫振したメノコをよこした。それには油斷をした。

或時、僅の隙にそれを盜み取つて逃げた。それを知つた酋長は追駆けながら後より斬りつけた。利刄と腕の冴えは無殘にも振の子供も一緒に斬斷した。その刀はウポロペ（姫振女を切つた寶刀）といつて代々傳へた。

一說に

昔カツラコイに偉い酋長が居て、白金黄金を鏤めた立派な鎧を持つて居た。何處のアイヌも羨んでゐた。狡猾な北見アイヌは、之を盜み奪はうとして隙を窺つてゐた。或時、其の鎧を木に吊して乾かさうと、見張りにメノコを殺して置いた。ところがそのメノコが水を汲みに谷川に下りた處を、一矢で射殺して其の鎧を奪つて逃げて行つた。それを知つた酋長は秘藏の一刀を提げて後を追ひ、セシヤナの附近で追著き、數十人の北見アイヌを惨殺しにして鎧を取り返した。

第八十九圖版　怪懸のチヤシ

五、知人岬の神石

知人岬にノツコロカムイ（岬の神）といつて、釧路は勿論他國のアイヌにまで、非常に崇敬せられた神石が二つあつた。其の神石（カムイシユマ）は、太古世界の始まりにアイヌに幸福を授け給ふ神として、二つの星が天降り、石となつて鎮座ましましたとのことである。大なる方はピンネカムイ（男神）、小なる方はマチネカムイといつて崇拜し、幣を立て、漁期の始には大漁を祈り、農期には豐作を祈願したものであつたが、築港工事の時、男神は打割られ女神は土中に埋没してしまつた。

六、知人岬の神橋

知人岬の突端海中に二條の水成岩脈があつて、干潮には恰も毀れた橋の殘杭の樣に見えるものがある。アイヌは之をカムイルイカ（神橋）といつて、レプンカムイ（沖の神樣）が陸の神樣に祭を求めて、お會ひになるために通られる橋であるといつてゐる。

神樣が此の橋をお通りになる時は、眞夜中か若しくは日蔭であるなら、人が戸外に出られないやうな大暴風雨の時であるとのことである。之が大内餘庵著の東蝦夷夜話には左の如く記載せられてゐる。

巡判官はじめて蝦夷地へ渡りしは、今のサル領の内ヒラトリコタンのハイノサウシといふ處に落著き、其の後は東西の蝦夷島を定めず居られしものと見え、クスリ領には男アカンの家に夢を樂れ

第九十圖版　知人岬の神橋

を堀となして防ぎ勝利を得たとある。今のアイヌには其の戦争の模様等に就て知つてゐるものなく、只戦争があつて勝つたとのことであるといふ位である。

四、柱懸のチヤシ

昔カツラコイの酋長は立派な鎧を持つてゐた。人に取られぬやうにチヤシの館中に、竿を立てそれを吊して置いた。それが大変評判になつて北見の酋長が之を欲しがり、多くの若者をやつて盗ませやうとしたが、警戒が厳重で如何ともすることが出来なかつた。色々考へた末、雑煮したメノコをよこした。それには油断をした。

或時、隙の隙にそれを盗み取つて逃げた。それを知つた酋長は追駆けながら後より斬りつけた。利刄と腕の冴えは無疵にも振の子供も一緒に神隠した。その刀はウポロペ（雑煮女を切つた寶刀）といつて代々傳へた。

一説に

昔カツラコイに偉い酋長が居て、白金黄金を鏤めた立派な鎧を持つて居た。何處のアイヌも羨んでゐた。狡猾な北見アイヌは、之を盗み奪はうとして隙を窺つてゐた。或時、其の鎧を木に吊して乾かさうと、見張りにメノコを残して置いた。ところがそのメノコが水を汲みに谷川に下りた虚を、一矢で射殺して其の鎧を奪つて逃げて行つた。それを知つた酋長は秘蔵の一刀を提げて後を追ひ、セシリヤの附近で追著き、数十人の北見アイヌを無殺しにして鎧を取り返した。

第八十九図版　柱懸のチヤシ

五、知人岬の神石

知人岬にノツコロカムイ（岬の神）といつて、釧路は勿論他國のアイヌにまで、非常に崇敬せられた神石が二つあつた。其の神石（カムイシユマ）は、太古世界の始まりにアイヌに幸福を授け給ふ神として、二つの星が天降り、石となつて鎮座ましましたとのことである。大なる方はピンネカムイ（男神）、小なる方はマチネカムイといつて崇拝し、幣を立て、漁期の始には大漁を祈り、農期には豊作を祈願したものであつたが、築港工事の時、男神は打割られ女神は土中に埋没してしまつた。

六、知人岬の神橋

知人岬の突端海中に二條の水成岩脈があつて、干潮には恰も毀れた橋の殘骸の様に見えるものがある。アイヌは之をカムイルイカ（神橋）といつて、レプンカムイ（沖の神様）が陸の神様に縁を求めて、お會ひになるために通られる橋であるといつてゐる。

神様が此の橋をお通りになる時は、霧夜中か若しくは日暮であるから、人が戸外に出られないやうな大暴風雨の時であるとのことである。之が大内餘庵著の京都夷夜話には左の如く記載せられてゐる。

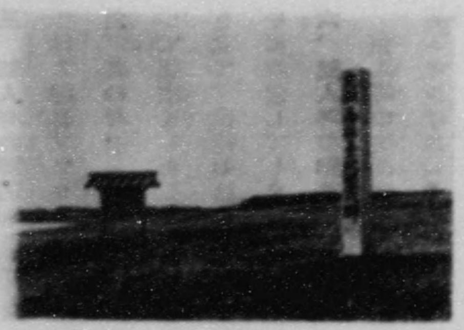
巡判官はじめて蝦夷地へ渡りしは、今のサル領の内ヒラトリコタンのハイノサウシといふ處に落著き、其の後は東西の蝦夷地を定めす居られしものと見え、クスリ領には男アカンの峯に跡を殿れ

第九十十図版　知人岬の神橋

給ふ、クスリの海中窓礁暗礁多くして岸につゞけり、其の中に築垣の如く遙の沖の方へ二條さし出たり、干潟のときあらはれ出て顯に見わたさる、土人のいふことは測判官のこの渡りに住み給ひしとき、トカチの岬をさして橋を架さんとなし、株の跡なりといふ、おのれ行きて見るにいかにも橋の株とおぼしく、直程トカチの岬に對してさし出たり、天造ながらも實に奇といふべし

七、竪　穴

アイヌは決して穴居はしない。あれはトイチセコワロカムイ（土の家を持つ神の義）が住んだ跡であるといふ、又オロワロの住んだのだともいふ。



第九十一圖版　春採の竪穴

八、釧路アイヌの酋長

今釧路アイヌの酋長の子孫は山本多助といつてゐる。彼の家の言傳へによれば、祖先は釧路市より約三里ばかり川上の、遠矢から移つて來たのだといふ。其の當時海岸線は今よりも、もつと入り込んで居て舟等もその附近まで來たといふ。

幕末頃武勇を以て鳴つた酋長メンカクシは、其の母が雷鳴に感じて妊娠したといはれ、その出生の際も牧の產屋の上を雷が鳴り渡つた。それでフミウカクシといふ名をつけた。「それは雷の如く盛名を天下に馳せよ」との意味だとのことである。それを和人がメンカクシと訛つたのだといふ。牧に就てこんな話が傳へられて居る。釧路酋長となるには古來難問題が課せられた。それは遙か北の方摩周湖で熊を打取り武勇を示すことである。メンカクシも青年に達した時、摩周湖に分け登り熊を探して徘徊した。ふと一頭の大熊が巖上に蹲つて居るのを發見し、只一矢で射殺さうと發した矢が、急所を外れたので熊は猛然襲ひかゝつた。牧はタシロ（山刀）を逆手に熊の懷に飛び込み心臟を刺した。熊は斃れた。然し斷崖を轉落して摩周湖に影を沒した。

牧は空しく引き上げなければならなかつた。その後西別川の水源に一頭の大熊が矢を打込まれたまゝ浮かんでゐた。やがて其の矢と熊がメンカクシの許に届けられた。摩周湖の水が西別川の源に伏流となつて通じてゐたからだと、これから牧の武勇は遠近に鳴り立派な酋長になつた。

九、オキキリマイ

源義經は日高勝振地方では、アイヌの祖神オキクルミと混同され崇拜の對象となつてゐるが、釧路地方では義經はアイヌから寶物を奉ひ牧等を苦しめた大惡人であると言ひ、之をオキキリマイ（惡業野郎）といつて憎んでゐる。

一〇、クシロとは

キタミヤアフケシヤシラヌカから來るアイヌは、必ず案内をつけて、フラヨマナイのチエンタウケエカシの家に、藁出しをしなければならなかつた。たゞ通ることは出來なかつたのである。だからタシュルコシ（寄つて越えなければならない道）といつた。それがクシになつた。彼人はオタシバウシ（渡船）で川を渡つた。

またクシロは北海道の東に當り、日高が西に當つた。おてんとうさまが東に出るから、東の者は西の者より偉かつた。事實クシロは一番人が搶つてゐた。メノコも綺麗なのがたくさんゐて、日高から餘に買ひに來た。そこで日高のアイヌは、クシロにチュウブカコタン（太陽の村）といふ綽名をつけた。

給ふ、クスリの海中荒磯暗礁多くして岸につゞけり、其の中に築垣の如く遙の沖の方へ二條さし出たり、干潟のときあらはれ出て顯に見わたさる、土人のいふことは漁判官のこの渡りに住み給ひしとき、トカチの岬をさして橋を架さんとなしゝ株の跡なりといふ、おのれ行きて見るにいかにも橋の株とおぼしく、直程トカチの岬に對してさし出たり、天造ながらも實に奇といふべし

七、竪穴

アイヌは決して穴居はしない。あれはトイチセコツコロカムイ（土の家を持つ神の義）が住んだ跡であるといふ、又オロツコの住んだのだともいふ。

第九十一圖版　春採の竪穴

八、釧路アイヌの酋長

今釧路アイヌの酋長の子孫は山本多助といつてゐる。彼の家の言傳へによれば、祖先は釧路市より約三里ばかり川上の、遠矢から移つて來たのだといふ。其の當時海岸線は今よりも、もつと入り込んで居て船等もその附近まで來たといふ。

幕末頃武勇を以て鳴つた酋長メンカタシは、其の母が雷鳴に感じて妊娠したといはれ、その出生の際も彼の產屋の上を雷が鳴り渡つた。それでフミウカタシといふ名をつけた。「それは雷の如く盛名を天下に馳せよ」との意味だとのことである。それを和人がメンカタシと訛つたのだといふ。彼に就てこんな話が傳へられて居る。釧路酋長となるには古來難問題が課せられた。それは遙か北の方摩周湖で熊を打取り武勇を示すことである。メンカタシも青年に達した時、摩周湖に分け登り熊を探して徘徊した。ふと一頭の大熊が巖上に蹲つて居るのを發見し、只一矢で射斃さうと發した矢が、急所を外れたので熊は猛然襲ひかゝつた。彼はタシロ（山刀）を逆手に熊の横に飛び込み心臟を刺した。熊は斃れた。然し踏崖を轉落して摩周湖に影を沒した。

彼は密しく引き上げなければならなかつた。その後西別川の水源に一頭の大熊が矢を打込まれたまゝ浮かんでゐた。やがて其の矢と熊がメンカタシの許に屬けられた。摩周湖の水が西別川の源に伏流となつて通じてゐたからだと、これから彼の武勇は遠近に鳴り立派な酋長になつた。

九、オキキリマイ

源義經は日高地方では、アイヌの祖神オキクルミと混同され崇拜の對象となつてゐるが、釧路地方では義經はアイヌから寶物を奪ひ彼等を苦しめた大惡人であると言ひ、之をオキキリマイ（惡魔野郎）といつて憎んでゐる。

一〇、クシロとは

キタミやアツケシやシラヌカから來るアイヌは、必ず案内をつけて、ソラロマナイのチエンタウケエカシの家に、舳出しをしなければならなかつた。たゞ通ることは出來なかつたのである。だからタシムルロシ（寄つて越えなければならない道）といつた。それがクシになつた。旅人はオタクシバウシ（渡船）で川を渡つた。

またクシロは北海道の東に當り、日高が西に當つた。おてんとうさまが東に出るから、東の者は西の者より偉かつた。事實クシロは一番人が揃つてゐた。メノコも綺麗なのがたくさんゐて、日高から嫁に貰ひに來た。そこで日高のアイヌは、クシロにチユウブカコタン（太陽の村）といふ綽名をつけた。

一一、細　鵜

昔、このコタン（春採部落）に住んでゐた吾々の先祖が、漁に出て濃霧のため七日七夜も流浪しなければならなかつたことがあつた。方角がわからない。糧食もない。寒さはつのる。今はたゞ死あるのみと覚悟した時、三羽の細鵜が、どこからともなく飛んで来て、陸地に向つて案内した。そして吾々の先祖は助かつた。それから後シララワカムイといつて細鵜を祀るやうになつた。

一二、クシロの津波

私（春採部落の古老トシェランクル）の父が若かつた頃、クシロに大津波があつた。コタンの人々が漁のために沖へかけた網が、波のために陸へ打上げられ、ホンノウエト（今の休み坂附近）の沿かげの中段に引つかゝつたりした。

かういふ大津波は、むやみにあるものではないが、先祖のいひ傳へによれば地震がさきに来るものだ。大地震があつたら早く高台に逃げるものだ。高台に逃げても笹地をえらべ、笹は根深く長く張つて、中々地が裂けない。

この時の大津波も大地震がさきに来て、大地が裂けて水が湧り出ると、中からフナの子のやうな魚がとびだしたが、大事の場合そのフナがどうして出たか、どうなつたかわからない。

津波はハルトリのトウ（沼）を上つて、チヤシの右手を北に向つて進み、今の測呼病院の前からセシリヤに進んだ。またその一つはトイトウ（今の太平洋炭鑛附近）の奥によつかり、更にフレムサの小川を越したといふ。もう一つオムフブから上つた波は、イカルル（今の築港正門前）を越えて、フレナイプトに出たといふ。ホンノウエト（休み坂附近の崖）はその際波の打ちつけたところである。

一三、波退治のウポポ

大昔、クシュルベツが河でなく海であつた頃、トホヤにクジラがより上つたことがあつた。トホヤのエカシは大聲で隣り村のベツポコタンの親類を呼んだ。フンベヤンナア、ウタリ、エツ、ヤンナアと。

その時ベツポのエカシは、小舟四五艘に妻子や家来を乗せ、勇しく漕いで行つた。その時、みんな調子を合せて歌つたかけごえが、今だに殘るウポポである。

トヲヤア　フンベヤアニ
セカン　ニシーコー　トリ
ハワホウ　フイヤホー

（以上一〇より一三は釧路市吉田仁雲「ニカレの物語」に載る）

帯廣市（帯廣市役所調）

一、伏古チヨマトーに纏はる傳説

或年十勝日高兩土人間に戰爭が起り、十勝土人は大敗した。其の後再び兩土人間に戰爭が起り、今度は日高土人が敗軍した。そして退却に方り、非常の空腹のため歩行も自由ならず、今の伏古土人學校附近の沼から、數羽の鳥を捕つて之を食し、一時空腹を凌いで居た。ところが間もなく背面又前面を包圍されて退路を失ひ、終に日高土人は沼中に身を投じ、溺

死する者が多數に上つた。爾來この沼を土人語でチヨマトーと稱した。即ち窩跡した沼といふ意義で、今に土人等は國道に架せられた帶廣市の西端の板橋を、チヨマトー橋と稱して居る。（明治四十年十二月十五日發行十勝史二三及二四頁）但し此の橋は大正十年橋下の沼水を埋めて、國道を東西に接續したため廢絶されて今はない。

なほ之と似通つた一、二の傳說がある。

この伏古別のチホマトーといふ名の起りは、昔鐵路や北見の方の惡者どもが方々の寶物を掠めて來て、同勢約六十人が、この沼の鴨をとつて食つて居たところを他の者に攻め立てられ、沼に飛び込んで溺れたところから、チホマといふ惡いといふ意味の名をつけた。（明治四十年三月二十七日伏古酋長フウレナ和名武田源五郎よりの古田屬聽書に依る）

大正五年十一月三日伏古アイヌ伏根弘三より吉田巖聽書の一節に、「昔時シビチヤリ（今の日高國內の地名）の敵衆約六十人が攻寄せて來た時、波トカチの惡能者によつて覺破せられ、五十九人はこの沼に追込められて溺死し、他の一人は辛うじてシビチヤリに逃げかへるを得た。五十九の怨靈があるから、禍を崇るといふ考でチホマと稱するに至つた。トウは沼の夷語である。

大正五年十一月三日伏古アイヌの主唱で、明治天皇桃山御陵遙拜地を、沼の南畔にトして小祠を創立せんとした。老アイヌは一齊に沼の名チホマの不吉を唱へたのでカムイトウと改稱することになつたといふことである（吉田屬稿本十勝國神居沼古蹟の一節）

なほ現今チホマトウ又はカムイトウ（神居沼）として知らるゝ區域は、主として帶廣市基線西二十三番地（谷口清太郎被給與地）同西二十五番地（舊日新小學校附屬地）に跨り、相接伴する卵形の沼と、國道の南基線西二十二番地の細長い

卵葉形で、木賊の叢生した沼との小部分に過ぎない。然し往時に溺れば附近は一帶の湖水地であつて、字名に殘る伏古別（ブシコベツ）（廢川の義）の示す通り、出水等の際は沼水が川に續いて靜花とした湖沼となり、一定の形狀を捕捉することが出來なかつたやうに思はれる。その後附近の土地の開拓せらるゝに隨つて次第に水が涸れ、遂に今日の狀態を呈するに至つたのである。

（以上帶廣市吉田屬記錄による）

昭和十五年三月二十五日印刷
昭和十五年三月三十日發行

北海道の口碑傳說　—全一冊—

一部　金貳圓五拾錢

編　者　北海道廳
發行者　札幌市北一條西五丁目一番地　北海道聯合教育會　代表者　大西正一
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　小坂孟
發行所　札幌市南一條西一丁目八番地　日本教育出版社
發賣所　札幌市南一條西三丁目六番地　合名會社　富貴堂　電話代表六〇九〇

大日本印刷株式會社印刷

148W77